

研究成果報告書  
2020～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））

「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史的研究

2024年3月

研究代表者 山根 真理  
（愛知教育大学 教育学部）

研究成果報告書  
2020～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））

「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史的研究

2024年3月

研究代表者 山根 真理  
（愛知教育大学 教育学部）

## 目次

はしがき	山根 真理	i
第1章 プロジェクトの概要	山根 真理	1
第2章 韓国 —1950年代と1980年代生れの子育ての実態と意識の世代間変容—	李 環媛・洪 上旭・山根 真理	9
第3章 中国 —「50后」と「80后」の語りから比較する現代中国家族のケア規範の変容—	李 東輝・磯部 香	28
第4章 フィリピン —1950年代生まれ地方在住女性のライフコース調査の概要—	長坂 格	38
第5章 デンマーク —高負担・高福祉国家に生きる人々の人生経験—	青木 加奈子・宮坂 靖子	46
第6章 トルコ —事例に見る1950年代・1980年代生まれの「成人期への移行」—	安藤 究・Tolga Özşen・Melek Çelik	57
第7章 日本 —1950年代、1980年代生まれの人々の「ケアの軌跡」—	山根 真理	75
第8章 前近代日本 —19世紀初頭生まれの人々の出生・死亡・結婚—	平井 晶子	85
資料 インタビュー調査内容		97

## はしがき

この報告書は、2020～22年度科学研究費補助金の助成を受けて行ったプロジェクト研究の第一次報告書である。本研究は、未婚化、晩婚化、少子化、成人期への移行の困難、高齢期の長期化とケア労働力不足、人口減少など、人間の人生と世代再生産の「危機」として語られる現代的事象にたいし、より広い視野で、比較家族的観点から考えることで認識の可能性を広げるねらいをもって始めた。本研究が目指すのは、20世紀から21世紀にかけて生きてこられた方々のライフコース（人生の道筋）である。一人ひとりの人生と歴史的時代の関係について考え、家族変動論との対話を行うことで、人生・家族・社会変動の関係を比較史的に考えることを目指している。

プロジェクトの中心的な仕事として、韓国、中国、フィリピン、デンマーク、トルコと日本において、1950年代、1980年代に生まれた方々を対象に、ケアの経験とそれを支えるネットワークを重点的にとらえるライフコースのインタビュー調査を行った。この調査は、山根が代表をつとめていた2007～2009年度の科研プロジェクトの一環として2009年に韓国、中国、フィリピン、日本で1920～40年代生まれの方々を対象に設定して行ったアジア4カ国5地域質問紙調査の続編に位置づけられる。韓国、中国、フィリピン、日本のインタビュー記録は、2009年調査の結果と照らしあわせて考察を深めるように設計した。デンマーク、トルコについては、より広い視野にたって世界各地における人生と歴史を考えることができるように、今回のプロジェクトで新たに対象地域とした。

プロジェクトではまた、ライフコース研究と歴史人口学、家族史研究との対話を深めることも重視している。「わたしたちは今、どこにいるか」を理解するためには、「わたしたちは、どこからきたか」を正確に理解することが有効だと考えるからである。そのような意図をもって、研究期間に韓国の歴史人口学研究者との交流や歴史学研究との対話を行った。

本報告書は、プロジェクトの第一段階の基礎資料集としての性格をもつものである。研究概要をまとめた第1章、アジアとヨーロッパ6地域のライフコースインタビュー調査の一次分析結果をまとめた第2～7章、歴史的資料から19世紀生まれの人々のライフコースの再現を試みた第8章からなっている。あわせて資料として、インタビュー内容を掲載した。

プロジェクトは、研究開始年である2020年2月に端を発する新型コロナウイルスパンデミックのため、中心的な活動である調査の延期を余儀なくされた。コロナ禍がやや沈静した2023年2月から本調査を開始、計画の繰越が認められて2023年度まで延長し、データの一次的整理と最初の成果公表を終えたところである。ささやかな報告書であるが、20世紀を真ん中に置いてその前の時代から21世紀の現在まで、人生・家族・社会変動に関する比較史のための一里塚とし、さらに研鑽していきたい。末筆になるが、コロナ禍の厳しい状況のなか、インタビューにご協力くださった方々に心よりお礼を申し上げる。

2024年3月

山根 真理

# 第1章 プロジェクトの概要

山根 真理

## 1. 研究課題

### 1.1 経緯

本研究は、プロジェクト代表である山根が 21 世紀初頭以降に実施あるいは参加してきた、家族の国際比較研究の延長上に構想された。代表者がこれまでかかわってきた国際比較研究は、現代家族の比較研究と、歴史的時代と家族変動の比較研究に大別される。それらの研究を振り返る中で、「ライフコースと世代」の観点で歴史と現代を統合することで、比較家族史および現代家族理解に対して新たな視野を得ることができるのではないか、と着想するようになった。

本申請研究は直接的には、2007～09 年度に山根が代表として実施した科学研究費プロジェクト<sup>1)</sup>である「アジア・ライフコース研究プロジェクト」の続編である。このプロジェクト (AL 科研プロジェクト) の一環として、妊娠、出産、子育て、介護など、ケアにかかわるライフ・イベントとそれを支えるネットワークに注目し、韓国、中国、フィリピン、日本において 2009 年に、1920～40 年代生まれの方を対象にしたライフコースの比較調査を実施した。この「アジア・ライフコース調査」(AL2009 調査)を通じ、ケアネットワークの変化を基層的家族・親族システムと歴史・社会変動の混合とみなしうること、出産の近代化には複数の道筋があることなどの認識を得た。(山根他, 2014、山根・洪, 2018)

本プロジェクトは、AL2009 調査からほぼ 10 年たった時点にあつて、後続の 1950 年代出生コーホートとその子ども世代にあたる 1980 年代出生コーホートの人々のライフコースに関する調査を同一地域で実施することで 20 世紀以降のアジア諸地域のライフコースを重層的に理解するとともに、対象地域をヨーロッパと西アジアに広げ、世界史的な視野で 20 世紀から 21 世紀にかけての比較家族史的洞察をえることをねらって着想された。

### 1.2 目的

本プロジェクトの目的は、東アジア、東南アジア、西アジア、ヨーロッパに射程を広げたライフコースの比較調査と、歴史人口学、家族史とライフコース研究の対話を通して、多面的な比較家族史的認識を得ることである。研究方法の中心は、世界の 6 地域におけるライフコースのインタビュー調査である。歴史人口学、家族史とライフコース研究の対話にかんしては、歴史的資料の再分析の方法を用いる。

プロジェクトの理論的関心は、ライフコース研究と家族変動論の対話をはかることにある。人生の出来事と歴史的時代のかかわりを具体的に記述、理解するライフコース研究からわかることを通じて家族変動論と対話し、歴史的時間のなかの人間の人生と家族変動を結びつけた比較家族史的認識が得られるのではないかと考えた。

### 1.3 独自性と意義

周知のようにライフコース研究は、1970 年代に領域横断的な研究視角として学界に登場した。ジールとエルダーによれば、ライフコースは「個人が時間の経験の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列」(ジール&エルダー, 2003 : 70)と定義される。こ

の定義にあるように、ライフコースの研究視角を通してみれば、人生の道筋が個人的なものであると同時に、その生きた歴史的、社会的時間に規定されるものである。同時に個人の人生の選択が社会のあり方に影響を与え、歴史的な転換をもたらすこともある。本研究はライフコース研究のなかでも特に、ライフコースと歴史的時代の関連に注目する研究蓄積に多くを負っている。(エルダー, 1986、ハレーブ、2001、森岡・青井, 1991、安藤由美, 1998, 2000、安藤究, 2017)

本プロジェクトのライフコース研究としての特徴は、ジェンダー視角を重視する点にある。もとよりライフコース研究は、個人の人生を対象にするアプローチであるから、ここでは女性／男性の人生の具体的様相と社会のありようや変動とのかかわりについて解明することができ、それゆえ、特に日本の家族研究の分野では、ジェンダー研究はライフコース視角の導入とともに発展してきた側面がある。(目黒, 1987) その意味で、ライフコース研究にジェンダー視角をとり入れること自体は、とりたてて目新しいものではない。ジェンダー視角のなかで本研究が重点をおくのは、妊娠・出産などのリプロダクションにかかわる経験や、近代化にともなって独特の意味や価値が与えられ、家族のなかの女性に配分されてきた、子育てや介護などのケアにかかわる経験である。人生のなかで人が直接、間接的に出会い、他者による助けが必要なこれらの経験について、それを支えるネットワークにも注目する。これらの点が本研究のライフコース研究としての独自性である。

本プロジェクト研究の目的は、多面的な比較家族史的認識を得るという学術的なものであるが、未婚化、晩婚化、少子化、成人期への移行の危機、ケア労働力不足など、現代社会において「少子高齢化」と連動して語られる「ライフコースと世代再生産」の「危機」に対して比較家族史的認識をえることを通して、「ライフコースと世代再編」に関して、冷静で包括的な認識を生み出す可能性を探る意義もあると考える。

#### 1.4 ライフコース研究と家族変動論の対話

家族変動論との対話にかんして注目する焦点は二つある。ひとつは、近代化以前の「基層」にあった家族・親族システムと近代化の関係である。人類学的基底として家族制度を位置づけて基層と近代性との関係について考究した E.トッド (トッド, 1991, 1993)、アジア (とヨーロッパ) の家族変動を、重層的多様性をもつものとみて、親族構造と文明化、その上にのった「近代化」という認識枠組みを示した落合 (2022)、東アジアにおける家族の「伝統」を比較家族史的に検討した小浜・落合 (2022) などと、認識的な対話ができるとよい。

家族変動論の焦点のふたつ目は、近代家族形成と近代家族の「その先」にかんする議論である。早い時期に「家族の個人化」仮説をとらえた目黒は、家族と社会の変動を考える枠組みとして、社会を構成する単位のタイプに注目し、親族単位から近代家族単位の段階を経て、個人単位に移行する枠組みを示した。(目黒, 1993, 2013) 2010年代以降、ベック&ベック・ゲルンスハイム (2022) の「第二の近代論」を基礎においたアジア家族変動論が展開されている。韓国の社会学者チャンは、短期間に近代化をとげた韓国社会においては「圧縮近代」(compressed modernity)というべき現象が社会の諸側面でおきており、家族にかんしては圧縮的社会変動のなかで儒教的、道具主義的、叙情主義的、個人主義的な家族理念が共存している、とみる。(장, 2001、Chang, 2010, 2017、張, 2013) 落合は「圧縮近代」概念を比較家族変動論に展開、人口転換と女性の主婦化に注目してヨーロッ

パとアジアの人口・社会変動を比較し、日本以外のアジア社会は圧縮近代、日本は相対的に「近代家族」の安定期のある半圧縮近代を経験した、と論じる。(落合, 2013a、2013b)

基層的家族・親族システムからの近代化と、近代家族形成と近代家族の「その先」へ。この二つの焦点に注目して、ライフコースと歴史的時代のかかわりについて考察していく。

## 1.5 調査地域と世代

本研究では調査対象地域として韓国、中国、フィリピン、デンマーク、トルコ、そして日本を設定した。韓国、中国、フィリピン、日本については AL2009 調査と同様であり、それぞれの国内での調査対象地もほぼ同じ<sup>2)</sup>である。AL2009 調査実施時には、アジアの家族比較調査は東アジア中心であることにたいし、東南アジアを対象地域に加えて、そこから見えることを探りたいという意図で、フィリピンを調査地域に加えた。フィリピンは双方向的な「家族圏」的家族・親族システムが基層にあり、調査地であるイロコス地方は 20 世紀前半のアメリカ統治時代からアメリカへの移住があり、1980 年代以降はイタリア、アジア諸国にも海外移住が広がり、国境を越えた移動が組みこまれたライフコースが常態化している点が特徴である(長坂, 2009)。

プロジェクトの調査対象地域の設定にあたり、AL2009 調査の 4 地域に加え、デンマークとトルコを調査地域に設定した。デンマークは女性の主婦化を経験し、1970 年代以降、ジェンダー平等化とケアの脱家族化、多様性尊重が進んだ地域のひとつである。トルコは「西アジア/北アフリカのイスラム家族」に位置づけられ、西洋的価値観やライフスタイルとイスラムの伝統の混交がみられる地域とされる(Therborn, 2014、岩井, 2018)。2000 年代以降、女性の高学歴化、出産年齢上昇などの急激な家族変動を経験しているが、このような変化が東アジア同様「圧縮近代」で説明できるか、宗教による「近代化」抑止が現れるか、などが論点として考えられる。

調査対象者の「世代」については、1950 年代生まれ、1980 年代生まれという二つの出生コーホートを設定した。1950 年代出生コーホートを対象者にした意味は第一に、AL2009 調査の調査対象として設定した 1920~40 年代出生コーホートの次の世代だということにある。1980 年代生まれの人々は、1950 年代生まれの人々の子ども世代にあたる。第二に歴史的時間という観点からすれば、1950 年代出生コーホートは冷戦体制、フォーディズム生産体制の普及など、第二次世界大戦終結後の世界秩序が形成された時代に生を受けた人々である。1980 年代出生コーホートは、政治的には東西ドイツ統一、東欧社会主義国家の崩壊など、冷戦体制が崩れ、資本主義諸国の経済発展に陰りがみられるようになった時期以降に生まれた世代でもある。また、1960 年代後半以降に西側産業諸国におこった第二波フェミニズムを受けて、1970 年代半ば以降、ジェンダー平等が、国連が主導する世界的潮流になった後に生まれた世代でもある。

## 2. 20~21 世紀の歴史的出来事・潮流と人生の変化

### 2.1 歴史的出来事と潮流

20~21 世紀のライフコースと歴史的時代を考えるにあたり、注目する歴史的出来事と潮流を、試論的に示す。世界史的にみた同時代性のもとにあるが、世界社会のなかで置かれる位置によって、その波及時期、速度と強度、順序や方向が異なるものと捉える。

- ① 植民地支配と戦争
- ② 第二次世界大戦後の独立国家形成
- ③ 社会主義国家の形成
- ④ 冷戦体制からポスト冷戦体制へ
- ⑤ 民主化の進展と、それに伴う新たな家族価値の形成・波及
- ⑥ 産業化の進展とその停滞
- ⑦ 近代家族システムの形成と修正・解体
- ⑧ ジェンダー平等と多様性尊重
- ⑨ 福祉国家の形成
- ⑩ グローバリゼーション

## 2.2 人生の変化

20～21世紀の人生の変化のトレンドについても、思考をすすめるための試論として示す。

表 1-1 20～21世紀の人生の変化のトレンド（試論）

生まれる	少なく生まれる 医療化（生殖医療を含む）
育つ	「子ども期」の形成 教育期間の長期化 教育政策と競争
大人になる	産業社会的な大人性の形成と揺らぎ 脱青年期の登場
働く	雇用労働者としてのライフコースの成立／非成立 女性の主婦化・脱主婦化 ジェンダー・トラックの形成・解体 非正規職の拡大 グローバル労働市場の形成
パートナー形成	制度から選択へ 夫婦家族制への移行 個人化と多様化
産む	産む／産まないの選択 少なく産む 男児（女児）選好の弱化・強化 医療化（生殖医療を含む）
育てる	ケアの家族化、女性化 ケアの脱ジェンダー化、脱家族化
引退・向老	「定年」の形成と変容 「主婦」の定年？ 向老期の形成
高齢期	長期化 個性化 祖親役割の変化
ケアを受ける	長期介護の形成 ケアの脱家族化、再家族化
死ぬ	死にかかわる自己決定 葬送・墓・祭祀の脱親族化、多様化

表 1-1 は、筆者の日常的な生活の場であり研究フィールドでもある日本社会、研究のフィールドである韓国社会での観察、学術的な著書や論文から得られる情報、マスメディアの情報などから試論的に構成したものである。考えを進める手がかりとして、研究会や学会発表の場で示してきた。東アジア発で印象的なものではあるが、プロジェクト内の議論も含め、世界諸地域の研究成果と対話して鍛えていきたい。

### 3. 研究体制

#### 3.1 研究課題

研究課題の概要は以下の通りである。

研究課題名：「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史的研究

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2020 - 2022 年度

研究課題番号：20H01567

#### 3.2 研究組織

研究組織は以下の通りである。(所属は研究終了年度)

研究代表者

山根 真理 愛知教育大学

研究分担者

青木 加奈子 京都ノートルダム女子大学

安藤 究 名古屋市立大学

李 璟媛 岡山大学

磯部 香 高知大学

長坂 格 広島大学

平井 晶子 神戸大学

宮坂 靖子 金城学院大学

研究協力者

洪 上旭 韓国・嶺南大学

李 東輝 中国・大連外国語大学

Tolga Özşen トルコ・Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi

Melek Çelik トルコ・Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi

#### 3.3 研究の経過

2020 年度 2 月以降、約 3 年間続いた新型コロナウイルスパンデミックのため、現地でのインタビュー調査を中心的な方法とする本研究は、当初計画を修正せざるを得なかった。初年次の 2020 年度、二年目の 2021 年度は調査を実施できる状況になく、もっぱらオンライン研究会での情報、意見交換と基礎的研究を行い、2022 年 3 月に韓国と中国の協力者の方々に洪上旭先生、李東輝先生の協力の下、オンラインでの予備インタビュー調査を行った。

コロナ禍のなかでできる調査方法（web を通じた質問紙調査、オンラインインタビュー）に中心的方法を切り替えることも議論したが、直接お会いしてお話をお聞きするインタビュー調査を行う可能性を待って、コロナ禍がやや沈静してきた 2023 年 2 月以降、対面でのインタビューが可能な地域において現地調査を実施、対面インタビューが難しい地域に

においてはオンラインインタビューを行った。科学研究費の研究助成期間は 2020～22 年度の 3 年間であるが、調査実施のために毎年繰越申請を行い、最終年度の 2022 年度も次年度に計画を一部繰り越し、2023 年度まで研究を継続した。

2020 年 4 月の研究開始時から 2024 年 2 月までに、計 10 回の研究会を開催した。そのうち 8 回はオンライン、1 回は対面とオンラインの併用、1 回は対面で行った。

10 回の研究会のうち、2 回はプロジェクトに関連する研究をされている研究者を講師に招いて実施した。ゲスト講師の講演内容について、以下に記す。

2022 年 3 月 27 日 公開研究会（オンライン）

講師：松田 京子（南山大学）

テーマ：植民地統治下の台湾先住民女性に対する「助産婦」養成事業—1930 年代の「蕃地」の内地化政策の一環として—

2023 年 7 月 23 日 公開研究会（オンライン）

鄭 楊（ハルビン師範大学）

テーマ：自由と束縛—在日中国人家庭の物語—

### 3.4 研究方法

#### 3.4.1 インタビュー調査

本プロジェクト研究における主な研究方法は、6 地域におけるインタビュー調査である。巻末資料 1 に掲載した基本インタビュー項目にもとづき、各地域で独自の事項を加えたり、事情によって一部の項目に重点化したりする形で 6 地域においてインタビュー調査を実施した。各地域の調査概要については、各章をご参照いただきたい。

各地域の調査計画、実施にあたり、困難な状況のなか、研究協力者の洪上旭先生（韓国）、李東輝先生（中国）、Tolga Özşen 先生（トルコ）、Melek Çelik 先生（トルコ）には一方ならぬご尽力をしていただいた。本研究が実現したのは、研究協力者の先生方のご尽力によるところが大きい。

なお、調査研究の実施にあたり、愛知教育大学研究倫理委員会の承認を得た<sup>4)</sup>。

#### 3.4.2 歴史人口学研究交流

歴史人口学、家族史との対話にかんして、ソウル大学（韓国）の Park, Keong-Suk 先生をリーダーとする歴史人口学研究チームとの研究交流を行った。研究会の概要は以下の通りである。研究会は「オンライン・カフェ」として、プロジェクトメンバーによる下記報告をめぐって Park 先生のコメントを受ける形で実施した。

2022 年 9 月 27 日 Online Café on Historical Demography in Korea and Japan

報告者：HIRAI Shoko (Kobe University)

テーマ：Historical Demography and Family Sociology in Japan

コメント：Keong-Suk Park (Seoul National University)

### 3.5 研究成果

新型コロナウイルス禍による事情で現地調査実施が遅れたため、中心的研究成果の公表も遅れたが、2023 年 11 月 26 日に日本女子大学で開催された比較家族史学会 2023 年度秋季大会シンポジウムにおいて、「ケアとジェンダーでみるライフコースの変容：アジア・ヨーロッパ 6 社会の事例から」のテーマでの発表が本格的な成果報告の一步となった。今後、AL2009 調査の再分析や歴史人口学、家族史との対話も含め、成果公表を続けていく。

## 注

1) 「AL 科研プロジェクト」の概要は以下の通りである。

研究課題：20 世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース—家族イベントの聞き取りを通して—(基盤研究 (B)、課題番号 19330105、2007 - 2009 年度)

研究体制：研究代表者 山根真理(愛知教育大学) 研究分担者 上野加代子(徳島大学)、落合恵美子(京都大学)、中筋由紀子(愛知教育大学)、長坂格(広島大学)、藤田道代(大手前大学)、宮坂靖子(奈良大学)、山本かほり(愛知県立大学) 研究協力者 洪上旭(韓国・嶺南大学)、朴京淑(韓国・ソウル大学)、李東輝(中国・大連外国語大学)(所属は研究終了年度)

2) AL2009 調査において、韓国の調査地はソウルとテグの二地点としたが、本プロジェクトにおける韓国の調査地はテグのみとした。

3) 後述の比較家族史学会 2023 年度秋季大会シンポジウム(2023 年 11 月 26 日)で示した内容から、若干修正した。

4) 課題名：ライフコースと世代再編に関する比較家族史的研究、研究責任者：山根真理、承認番号：AUE20220304HUM。

## 文献

安藤究, 2017『祖父母であること：戦後日本の人口・家族変動のなかで』名古屋大学出版会。

安藤由美, 1998『激動の沖縄を生きた人々—ライフコースのコーホート分析』早稲田大学人間総合研究センター。

安藤由美, 2000『沖縄におけるライフコースの出生コーホートの比較研究』平成 9.10 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書。

ベック, U. & E. ベック—ゲルンスハイム, 2022, 中村好孝・荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎・吉田竜司・玉本拓郎・有本尚央訳『個人化の社会学』ミネルヴァ書房。  
張慶燮, 2013, 柴田悠訳「個人主義なき個人化—「圧縮化された近代」と東アジアの曖昧な家族危機」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』京都大学学術出版会：39-66

エルダー, G.H. & ジール, J.Z., 2003, 正岡寛司・藤見純子訳『ライフコース研究の方法：質的ならびに量的アプローチ』明石書店。

エルダー, G.H., 1986, 本田時雄・川浦康至・伊藤裕子・池田政子・田代俊子訳『大恐慌の子どもたち—社会変動と人間発達』明石書店。

ハレーブン, T.K., 2001. 正岡寛司監訳『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部。

岩井八郎, 2018「アジアの家族変動と家族意識—東アジア社会調査 (EASS) とアジア比較家族調査 (CAFS) からみた多様性と共通性—」『家族社会学研究』第 30 巻第 1 号：135-151。

小浜正子・落合恵美子, 2022『東アジアは「儒教社会」か? : アジア家族の変容』京都大学学術出版会。

長坂格, 2009『国境を超えるフィリピン村人の民族史—トランスナショナルリズムの人類学』

- 明石書店.
- 目黒依子, 1987『個人化する家族』勁草書房.
- 目黒依子, 1993「ジェンダーと家族変動」森岡清美監修『家族社会学の展開』培風館 : 211-221.
- 目黒依子, 2007『家族社会学のパラダイム』勁草書房.
- 森岡清美・青井和夫, 1991『現代日本人のライフコース』日本学術振興会.
- 落合恵美子, 2013a, 「アジア近代における親密圏と公共圏の再構成ー『圧縮化された近代』と『家族主義』」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成ーアジア近代からの問い』京都大学学術出版会 : 1-38.
- 落合恵美子, 2013b, 「近代家族の転換と家族変動の論理ーアジアとヨーロッパ」『社会学評論』64 (4) : 533-552.
- 落合恵美子, 2022, 「アジアの重層的多様性ーセクシュアリティとジェンダーから見る」落合恵美子・森本一彦・平井晶子編, 『リーディングス アジアの家族と親密圏 第3巻 セクシュアリティとジェンダー』有斐閣 : 1-29.
- トッド, E., 1991, 1993, 石崎晴己・東松秀雄訳『新ヨーロッパ大全』I II, 藤原書店.
- 山根真理・洪上旭・朴京淑・李東輝・長坂格・中筋由紀子, 2014「20世紀アジアの社会変動と産育のネットワークー5 地域ライフコース調査からー」『愛知教育大学研究報告』(人文・社会科学編) 63 : 155-166.
- 山根真理・洪上旭, 2018「ライフコースからみる韓国の家族・ジェンダーの変容：テグ調査コーホート分析を中心に」『社会学雑誌』34 : 1-20.
- 장경섭, 2001, 가족이념의 우발적 다원성: 압축적 근대성과 한국가족, 『정신문화연구』, (家族理念の偶発的多元性 : 圧縮的近代性と韓国社会, 『精神文化研究』) 第 24 卷第 2 号 (通卷 83 号) : 161-202.
- Chang, Kyung-Sup, 2010, The Second Modern Condition? Compressed Modernity as Internalized Reflexive Cosmopolitization, *The British Journal of Sociology*, Volume 61 Issue 3: 444-464.
- Chang, Kyung-Sup, 2017, Compressed Modernity, *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Social Theory*, Edited by Bryan S. Turner, John Wiley & Sons, Ltd (<https://doi.org/10.1002/9781118430873.est0839>) .
- Therborn, G., Family Systems of the World: Are They Converging?, J. Treas, J. Scott and M. Richards eds., *The Wiley Blackwell Companion to the Sociology of Families*, Wiley Blackwell: 3-19.

## 第2章 韓国

### —1950年代と1980年代生れの子育ての実態と意識の世代間変容—

李 璟媛・洪 上旭・山根 真理

#### 1. 調査概要—調査地の特性及び調査対象者のプロフィール

韓国での調査地は大韓民国慶尚北道に位置するテグ広域市（以下テグ市と表記）である。テグ市は、韓国の東南方面の内陸に位置しており、面積 1,499.52km<sup>2</sup> で、全国の 1.52% に当たる。2023年12月現在、人口 2,374,960人、世帯数 1,094,148世帯である。2022年現在、合計特殊出生率は 0.67 で全国平均より低い。2022年現在、テグ市の共働き世帯は 41.2%、高齢者率は 21.8%である。主な産業は、繊維産業、自動車部品などを含む機械産業、医療、ロボット産業などがある（テグ広域市 HP / 統計庁 HP）。

インタビュー調査は、2023年2～3月と8月の2回に分けて、1回目は10人、2回目は4人を対象に実施した。使用言語は韓国語、インタビュー時間は、1人当たり1時間30分から2時間30分程度である。合計14人のうち、1950年代生れが6人（女性4人、男性2人）、1980年代生れが8人（女性4人、男性4人）である。婚姻状況は、1950年代生れは全員既婚、1980年代生れは既婚6人、未婚2人である。インタビュー項目は、属性、本人の出生環境、子どもの出産環境、離家、仕事、育児、ケアの経験などである。本稿では、主に子育てに関わる実態と意識について報告する。本研究は、愛知教育大学「研究倫理委員会」の承認を受けて実施した。

表2-1、2-2は、調査対象者のプロフィールである。表2-1、2-2を参照に1950年代生まれ6人と、1980年代生れの8人のプロフィールを簡単に示す。地域名の「道」は、日本の「県」に似た地域区分である。

表2-1 調査協力者のプロフィール—1950年代生れ

	性別	職業（前職）	学歴	婚姻状態	配偶者の特性（性別・生年・学歴・職業）	同居している人	子ども関連状況（人数・学歴・職業・婚姻・住居など）	実親、義親の居住等
Aさん	男性	無職（高校教員：定年退職）	大学院博士	既婚	女性・1965・大卒・主婦	4人：本人、妻、次男、三男	3人（3男） 長男：大卒・公務員・未婚・遠居・1人暮らし 次男：高2年・同居 三男：中3年・同居	実親：父死亡／母1人暮らし・近居 義親：父死亡／母近居で息子夫婦と同居
Bさん	男性	無職（大学教員：定年退職）	大学院博士	既婚	女性・1957・大卒・医師	2人：本人、妻	3人（1女2男） 長女：大学院修士・主婦・既婚・子ども3人・遠居 長男：大卒・会社員・未婚・遠居・1人暮らし	実親：死亡 義親：死亡

							次男：大学生・未婚・近居・1人暮らし	
Cさん	女性	大学教授 (中高校教員：名誉退職)	大学院博士	既婚	男性・2019年死亡(69歳時)	1人	2人(1男1女) 長男：大学院修士・会社員・既婚・子ども2人・近居 長女：大卒・未婚・塾講師・近居	実親：死亡 義親：死亡
Dさん	女性	無職(臨床心理士：定年退職)	大学院修士	既婚	男性・1957・大卒・韓国語講師(前会社員)	3人：本人、夫、長女	2人(1女1男) 長女：大学院・医師・未婚・同居 長男：大卒・会社員・未婚・遠居	実親：父自宅介護中/母健康 義親：死亡
Eさん	女性	デジタル関連講師(中高校教員・定年退職)	大卒	既婚	男性・1954・大学中退・無職(前会社員)	3人：本人、夫、長男	2人(1男1女) 長男：大学中退・無職・未婚・同居 長女：大卒・主婦(結婚退職)・既婚・子ども2人・近居	実親：死亡 義親：死亡
Fさん	女性	療養保護士(調理師)	小卒	既婚	男性・1959・高卒・日雇い労働(前建築業)	2人：本人、夫	2人(1女1男) 長女：大卒・会社員・既婚・子ども2人・近居 長男：大卒・会社員・既婚・子ども2人・遠居	実親：死亡 義親：父死亡/母療養院

表2-2 調査協力者のプロフィール—1980年代生れ

	性別	職業(前職)	学歴	婚姻状態	配偶者の特性(性別・生年・学歴・職業)	同居者	子ども関連状況(人数・学歴・住居地など)	実親、義親の居住地等
Gさん	男性	自営業	大卒	既婚	女性・1990・大学院博士課程・相談士	4人：本人、妻、長男、次男	2人(2男) 長男：幼稚園生・同居 次男：幼稚園生・同居	実親：父母、健康・近居 義親：父健康/母健康・近居
Hさん	男性	フリーランサー(個人事業主)+妻のビジネス協力)	大卒	既婚	女性・1989・大学院博士課程・フリーランサー	4人：本人、妻、長男、次男	2人(2男) 長男：子どもの家通園(保育所)・同居 次男：家庭保育中・同居	実親：父母、健康・近居 義親：父母、健康・近居
Iさん	男性	会社員	大卒	既婚	女性・1985・大学院修士課程・高校教員	3人：本人、妻、長男の3人	1人(1男) 長男：子どもの家通園(保育所)・同居	実親：父健康/母通院中・近居 義親：父健康/母健康・近居
Jさん	女性	フリーランサー(個人事業主)	大学院博士	既婚	男性・1985・大卒・フリーランサー	4人：本人、夫、長男	2人(2男) 長男：子どもの家通園(保育所)・同居	実親：父母、健康・近居 義親：父母、健康・近居

						男、次男	次男：家庭保育中・同居	
Kさん	女性	主婦（結婚退職）	大卒	既婚	男性・1980・大学院修士課程・会社研究員	4人：本人、夫、長男、次男	2人（2男（双子）） 長男・次男：子どもの家通園（保育所）・同居	実親：父母、健康・近居 義親：父健康／母健康・遠居
Lさん	女性	社会福祉士	大学院修士	既婚	男性・1983・大卒・会社員	4人：本人、夫、長男、次男	2人（2男） 長男：小学3年生・同居 次男：幼稚園生・大同居	実親：父通院中／母健康・近居 義親：父母健康・近居
Mさん	男性	パートタイム勤務（親族経営自営業）	大卒	未婚	いない	3人：本人、父、母	いない	実親：父母簿健康・同居
Nさん	女性	相談士	大学院修士	未婚	いない	1人	いない	実親：父健康／母手術後入院中・近居

## 2. 1950年代、1980年代生れにみられる子育て等の現状

### 2.1 1950年代生れにみられる子育て等の状況

ここでは、1950年代生れの6人の「生まれ育った時」、「出産と子育ての状況」「孫育てに関わる状況」などを中心に概略する。

#### ① Aさん（男性）

概要	慶尚北道チルゴクで生まれ育つ。5人兄弟姉妹の長男。父は小学校校長で定年、93歳で死亡。母は専業主婦、テグ市で1人暮らし。インタビュー時は骨にひびが入り自宅で療養しながら通院治療中。兄弟姉妹5人が交代で世話。知人の紹介で1987年に結婚、2002年に死別。2005年に再婚。初婚で1男、再婚で2男を儲ける。大学院終了後、教師になり、2019年に定年退職。妻は家庭教師の仕事に従事している。テグ市で、妻、子ども2人と3人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1956年
	生まれた場所	母の実家
	取り上げた人	母方祖母
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、父方祖父母、父の未婚の兄弟
	就学前に世話してくれた人	訓育を含め一番世話してくれたのは祖母。母は、舅姑の世話のため、子どもの世話まで手が回らなかった。母には子育ての気力が残ってなかったと思う。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない。
	その他	父は、仕事に専念して私には関心を注がなかった。
子どもを育てた時	出産	長男：1993年／次男：2006年／三男：2008年
	子どもが生まれた場所	長男：大学病院／次男・三男：近所の産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	自宅
	子どもの世話：主に世話した人	長男：前妻が大学教授で忙しかったため主に妻の母が世話してくれた。私の母も交代で世話してくれた。次男と三男は、妻が世話している。
子どもの世話：手伝った人	次男・三男：私	
子どもが幼い時離れて暮らしたこ	長男：たびたびあった。前妻の職場の関係で長男を妻の実	

	と	家や私の実家に預け、金曜日に迎えに行って日曜日に妻の実家に預けた。長男が泣いていたのを今も覚えている。 次男・三男：ない
	出産・子育て時に受けた公的支援	長男出産の場合、大学教授の妻は夏休み出産、産前産後休暇は取得しなかった。
	その他	長男は、祖父母に預けられていたことを覚えており、今も虚脱感を覚えているようである。
孫育て支援	孫の有無	いない
	孫育ての状況（現状と将来）	子どもの家庭には絶対に介入しないつもり。子どもが要請すれば、支援する。
	経済的支援	私たちの老後を考慮しながら支援するつもり。
	ケア的支援	無限大にしたい。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児 <sup>1)</sup> は基本的には否定的。ただ政府の支援が厚くなっても、祖父母に頼る現状は変わらないと思う。実際には、私たちの「年齢代」の祖父母のほとんどは、孫の世話、孫のロードマネージャー、孫の送迎など、孫育てを支援しているため、友たちが集まるのが難しい。
その他（子育ての公的支援）	現在実施されている「無償保育」によって、ある意味保育の格差、階層化が深化している。例えば幼稚園に入園される際、月30万ウオンの支援を受けられるために支援金を含めてより高い幼稚園に入園させようとする親が増えた。そのため格差が広がり、決して効果的とはいえない。	
特記事項	私たちの時代は、一人っ子出産が強調される時代だった。それは絶望的なキャンペーンだった。制限がなければ娘が欲しかった。	

## ② Bさん（男性）

概要	テグ市で生まれ育つ。2男2女の長男。父は大学教授、母は主婦で仕事経験はない。大学2年終了後軍に入隊。復学、大学卒業後、1983年大企業に就職、激務のために転職を決心。1984年に小学校同級生と結婚し、同年に公企業に転職。妻は大学卒業後医師になる。公企業に3年間勤めた。公企業は定期的に全国への転勤があるため妻と相談し退職し、大学院修士、博士課程を修了。1996年に大学教授になる。大学院生時のほぼ10年間の家計は、開業医である妻が負担。妻は現職医師。子どもは娘1人、息子2人。現在は、テグ市で妻と2人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1957年
	生まれた場所	自宅
	取り上げた人	コモ（父親の女兄弟）と産婆
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、姉
	就学前に世話してくれた人	母。他は、トウミ（以前は「食母（シッモ）」と呼ばれた）
子どもを育て	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	出産年	長女：1985／長男：1986／次男：2000
	子どもが生まれた場所	子ども3人とも産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	自宅
子どもの世話：主に世話した人	妻の母。開業医の妻が子連れ出勤。妻の母が病院に出勤して孫のケアをした。	

た時	子どもの世話：手伝った人	子どもが幼稚園に入る頃に妻の母が死亡。年輩のトウミを雇用し朝から夜まで世話を頼んだ。私が夜帰宅して育児をした記憶はないが、週末などはいつも野外に子どもを連れて出かけた。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援	妻が開業医だったために出産前後休暇などはなかった。
孫育て支援	孫の有無	3人。長女：2男1女、遠居
	孫育ての状況（現状と将来）	長女家族は遠居のために常に孫育てに関わることはない。
	経済的支援	経済的支援は行っていないし、今後も行わない予定。孫には小遣い程度。
	ケア的支援	娘世代と養育方式が異なるので、養育支援は難しい。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児には否定的。状況によって祖父母が孫育てをするのは仕方がないが、主になってはならない。祖父母の本来の生活や健康等を考慮すべき。 外国に暮らす娘家族のために黄昏育児をしている友人がいる。妻が外国に3か月ほど在住し、ビザ更新後また外国に行っている。韓国に残っている夫は一人暮らしで、いわゆる「キログハラボジ <sup>2)</sup> 」の状況になる。
その他（子育ての公的支援）	これから子どもを持つ、育てる立場にいる人々が最も納得できる内容の政府支援が必要。	
特記事項	孫育てのエピソード：長女が3番目の子をアメリカのグアムで出産。その際、2人の息子を語学キャンプに同行する計画を立て、その子どもたちの世話係として私が同行した。妻は仕事があり、暇だった私が選ばれた。同行費用は娘が負担。妻は、出産費用を負担した。いい経験だった。	

### ③ Cさん（女性）

概要	キョンジュ市で生まれ、テグ市で育つ。2男3女の次女。父は公務員、母は小学校教師だったが、結婚退職後主婦。大卒の1978年に中・高等学校の家庭科教員になる。1979年に恋愛結婚。夫は会社員だったが、のちに自営業に転職。1男1女を出産。1999年に名誉退職、家庭科教員をしながら修士、博士課程を修了し、退職後、理学博士の学位を取得した。2000年から大学兼任教授となり、現在に至る。2019年に夫と死別し、テグ市で1人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1956年（戸籍上）、実際は1955年。
	生まれた場所	母の実家近くの助産院
	取り上げた人	産婆が取り上げたと思うが、あまりよくわからない。
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母
	就学前に世話してくれた人	母方祖母。母は末っ子の一人娘で家事などが得意ではなかった。祖母が頻繁に私たちの家にきたり、私がキョンジュ市（遠居）にある祖母の家で暮らしたりした。学校の送り迎えを含めほとんど祖母が育ててくれた。他には、母、家政婦さん（お姉さんと呼んだ）。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ある。4番目に生れた弟が生後3か月に小児麻痺がきて治療のための通院が必要だった。祖母は、キョンジュ市で息子家族と同居していたが、そこで、私たち姉妹3人は、祖母、叔父夫婦と一緒に暮らした。
その他	父母と離れて暮らしたことが度々あったので、幼年時期がそれほど幸せではなかった。	

子どもを育てた時	出産年	長男：1980年／長女：1983年
	子どもが生まれた場所	全員病院
	取り上げた人	医者
	産後のケア	自宅
	子どもの世話：主に世話した人	長男：姑、母。 長女：年配のトウミ、夜間は大学生のトウミ（本の読み聞かせなどを頼んだ）。
	子どもの世話：手伝った人	銀行に勤めていた小姑が結婚準備のために退職した後、6か月程度手伝ってくれた。他の多くの人に助けてもらった。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
出産・子育て時に受けた公的支援	—	
孫育て支援	孫の有無	2人。長男：1女1男。
	孫育ての状況（現状と将来）	孫の世話は息子の義親がしている。
	経済的支援	経済的支援をせざるをえない。息子が結婚してしばらくの間は、私のクレジットカードの支出の8割は息子家族のため使われた。今は2割程度。それでもデパートで孫の服などを購入し、宅配で送っている。
	ケア的支援	頼まれる時は支援している。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児は肯定的に考えている。ただ、孫を預かり2人だけであると予期せぬことが発生する可能性もあり、孫育てに責任を持てるか、不安である。孫と孫の母と3人の場合は非常に気が楽で安心である。黄昏育児をしている友人がいるが、いつも非常にしんどいという。
その他（子育ての公的支援）	若い世代が自分の家庭を持てるようにインフラを助成することが必要。無償保育は実施されているが、親の負担が軽減されているとは思えない。	
特記事項	息子が子育ては母親がするべきといい、息子の妻は結婚退職を選択した。息子が子どもは母親が育てるべきといったときは非常に悲しかった。14年間も高校3年生の担任を任せられていたので、早朝出勤して遅い時間に帰宅した。育児のためにトウミを2人雇っており、月給より支出が多かった。また子どもが幼い時約12年程度夫が単身赴任をしていた。慶尚道の男は家事や育児はあまりしないが、夫は、週末に帰ってくると疲れていたと思うが、家事を2割程度手伝ってくれたり、子どもに本を読んであげたりして関わってくれた。	

#### ④ Dさん（女性）

概要	テグ市で生まれ育つ。5人姉妹の長女。父は自営業、母は主婦で、父を手伝う。大学院修了後、細胞病理士として病院勤務。1985年小学校同級生の夫と結婚。1女1男。会社員だった夫は、55歳で早期退職。放送大学に編入学し教育学を専攻、韓国語教師資格を取得し、現在は韓国語教師。1983年から病院務めをはじめ、2019年に定年退職。継続雇用を頼まれたが断った。現在、テグ市で、夫、未婚の娘、実家の両親（父は自宅で介護、母は健康）の5人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1958年
	生まれた場所	自宅（4女までは自宅、5女は病院）
	取り上げた人	父の兄嫁
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母
	就学前に世話してくれた人	母。母以外はいなかった。
幼い時親から離れて暮らしたこと	ない	

子どもを育てた時	出産年	長女：1987年／長男：1991年
	子どもが生まれた場所	自分が勤務した病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	自宅
	子どもの世話：主に世話した人	母。子どもは2人とも、月から土曜日までの間、毎朝8時ごろ実家に預け、夕方6時ごろに迎えに行った。子どもは祖母の家で夕ご飯とお風呂も世話してもらった。長女が小学生の時、実親が近所に引越して世話してくれた。
	子どもの世話：手伝った人	いない
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援	産前産後休暇の概念はなく、出産後に、長女は1か月、長男は2か月、休暇を取得した。ほぼ出産日まで病院に勤務し、産気付いて、そのまま産室に入り出産した。
その他	子どもたちは、私の不在を祖母に埋めてもらって問題なく成長できたと思っている。両親に感謝しかない。	
孫育て支援	孫の有無	いない
	孫育ての状況（現状と将来）	子どもは2人とも未婚だが、子どもが結婚して、孫が生まれて、育てることが難しい場合は、私が育ててあげたい。
	経済的支援	—
	ケア的支援	将来、支援しないといけないと思っている
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児については肯定的。子どもが遠居の場合は、通いながら孫育てを支援したい。国内、国外でも行く。友人の中で、平日はソウルで孫育てをして、週末にテグ市に戻る友人や、外国の娘家族のために1年滞在のビザを取得して定期的に通っている友人がいる。私もそう思う。
その他（子育ての公的支援）	無償保育で若干の時間的余裕はできたと思う。子育てにはお金がかかる。子どもが大学に行くまで経済的支援が必要だと思う。	
特記事項	母親が長女である私の子どもの世話をしていたので、私の妹たちは、出産時に誰も母親に助けてもらえなかった。妹たちには申し訳なかったと思っている。だから両親の老後はすべて私の責任と妹たちにはいっているし、いま、両親と同居しながら世話している。	

⑤ Eさん（女性）

概要	テグ市で生れ育つ。父と母は、長い間江原道で自営業を行った。4女1男の長女。大学卒業後中学校教員になる。夫とは大学生の時、夜間学校の講師と一緒に勤めていたときに出会い1982年に結婚、1男1女を儲ける。夫は大学中退、会社員で定年退職、現在は無職。2018年に定年退職し、現在は、デジタル関連の講師をしている。テグ市で夫、未婚の息子と3人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1956年
	生まれた場所	自宅（全員自宅で生れた）
	取り上げた人	母方祖母、隣人の人々が手伝ってくれた。
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、未婚の父の妹
	就学前に世話してくれた人	母方祖母、未婚の母の妹
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ある。5歳の時、両親が仕事のために江原道に引っ越した。その際、妹と弟を連れて行き、私は母方祖母に預けられ

		た。母の妹と弟も一緒に暮らした。祖母や叔父、叔母が仲良くしてくれて、みんなから愛されていたと思う。それでも私は父と母と一緒にいたかった。
	その他	夏休みと冬休みは必ず両親のところに行って過ごした。楽しかったし、両親と一緒にいられるだけでよかった。
子どもを育てた時	出産年	長男：1983年／長女：1985年
	子どもが生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	自宅
	子どもの世話：主に世話した人	姑。長男：3歳まで姑が世話、長女：1歳まで姑が世話。姑がこれ以上孫の世話ができないと宣言し世話人を雇った。
	子どもの世話：手伝った人	妹、実家の両親。4番目の妹が2、3年程度子どもの世話を手伝った。その後実家の両親がテグ市に戻った。私たち家族が両親の家で同居しながら世話してもらった。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	長男：ある。3歳の際、私が単身赴任。息子は姑、夫と生活。息子が分離不安によるチック症状が起きた。 長女：ない。
	出産・子育て時に受けた公的支援 その他	出産後休暇を取得できなかった。 姑がある正月の元旦に親族が集まったところで、孫の世話をこれ以上しないと爆弾発言をした。そこで世話人を雇った。姑も孫育てに疲れて少し鬱があったかもしれない。子育てはつらかった記憶しかなく、出勤が脱出口だった。
孫育て支援	孫の有無	いる。長女：2人、近居。長女は結婚退職。
	孫育ての状況（現状と将来）	—
	経済的支援	している。預けたい、世話してほしいと連絡がある場合、まず、金銭的支援をする。例えば、トウミを雇う、おかずを購入するなど。娘は金銭を受けても使わない。私は今後も働き続けながら経済的支援を続けるつもり。
	ケア的支援	あまりしない。娘に申し訳ないが、孫の世話はしたくないし、しんどい。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児はできるならばいいと思うが、周りを見るとしんどいという。江原道に済む友人はソウルの娘宅に5か月間同居しながら孫の世話をした。また頼まれているので、仕方がないが老衰でしんどいと言っていた。もう一人の友人はアメリカに住んでいる娘のために黄昏育児をしている。アメリカに滞在するのはしんどいが、娘が安心するので続けている。育児方式が異なり衝突することもあるようだ。
その他（子育ての公的支援）	就業中の既婚女性にとって育児が最も大きい問題。政府による出産休暇、育児休暇の大幅な支援が必要。孫2人もオリニジップに通うなど公的支援を受けた。	
特記事項	共働きの場合、子育てを支援せざるを得ない状況もある。他人より祖父母に預けられる方が安心と思う。	

⑥ Fさん（女性）

概	慶尚道のチョンドで生れ育つ。3男3女の次女。父は農業、母は主婦。小卒。20歳の時から家を
---	--

要	離れ、下宿しながら合計4年ほど紡績工場に勤めて退職。26歳の1981年にお見合いで建築業の夫と出会い1か月後に結婚。1女1男。息子が軍に入隊してから1994年から食堂に勤める。2018年から調理師として就職、2022年に定年退職。65歳になった2023年から療養保護士で働いている。生活費用は基本的に夫の収入で行っている。現在、キョンサン市で夫と2人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1956年
	生まれた場所	自宅。
	取り上げた人	分からない。
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、姉、兄2人
	就学前に世話してくれた人	母。他は、父、姉と兄。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
子どもを育てた時	出産年	長女：1982年／長男：1984年
	子どもが生まれた場所	長女：自宅／長男：産婦人科病院
	取り上げた人	長女：産婆（診療は病院で受けた）／長男：医師
	産後のケア	自宅
	子どもの世話：主に世話した人	本人
	子どもの世話：手伝った人	夫。夫以外はいなかった。夫がおむつ替え、離乳食の準備、お風呂など積極的にケアした。夫は子どもが大好き。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援 その他	ない 第3子が欲しいと思ったが、つわりがひどすぎてあきらめざるを得なかった。
孫育て支援	孫の有無	長女：2人／長男：2人
	孫育ての状況（現状と将来）	長女：私の自宅で、1子出産後1ヶ月、2子出産後は2か月以上、産後調理をした。娘婿は行ったり来たりしていた。 長男：あまりしていない。
	経済的支援	実際にしていない。小遣いや誕生日のお祝い程度。
	ケア的支援	長女：現在夫の両親と同居しており、孫の世話は義親がしている。姑がいない場合でも、私たちには頼まない。 長男：産後調理は妻の実家で、普段は自分たちで子育てしているが、必要に応じて義親が世話している。私たちには頼まない。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児についてはあまりわからない。周辺にも該当する友人などいない。
	その他（子育ての公的支援）	あまり考えたことないが、職場の中にオリニジップを多く設ければ、父母が安心して働けると思う。

## 2.2 1980年代生れにみられる子育て等の状況

ここでは、1980年代生れの8人の「生まれ育った時」、「出産と子育ての状況」「子育て支援状況」などを中心に概略する。

### ① Gさん（男性）

概要	テグ市で生まれ育つ。建築業の父と主婦の母に1男1女の長男として生まれる。両親はテグ市で祖父の農園を継ぎ営んでいる。大学3年生から今の仕事に携わり、現在の自営業に続いている。2017年に友人の紹介で出会った妻と結婚し、2男を設ける。妻は、博士課程を修了し、現在は相談士として働いている。テグ市で妻、子ども2人の4人暮らし。
----	--

生まれ育った時	生まれた年	1986年
	生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、父方叔母、父方叔父、母方叔母、母方叔父 (両家の実家は田舎だったため、テグの家で父と母の実家の家族が2階建ての住宅で一緒に暮らした。)
	就学前に世話してくれた人	母、父。他は、母方叔母、父方叔母。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
子どもを育てた時	出産年	長男：2018年／次男：2019年
	子どもが生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	長男：病院→産後調理院 <sup>3)</sup> 2週間→自宅で産後トウミ2週間 次男：病院→産後調理員10日間→自宅で産後トウミ4週間 (長男、次男が年子のため産後トウミ4週間受けられる)
	子どもの世話：主に世話した人	私と妻が半々
	子どもの世話：手伝った人	必要に応じて、両親
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援 その他	トルボミ制度、無償保育制度を利用 トルボミ先生には次男が新生児から今まで継続して世話してもらっている。子どもにとっては家族のような方である。
祖父母の孫育て支援	祖父母からの経済的支援の有無	結婚資金の支援を受けた。現在は受けていない
	祖父母からのケア的支援の有無	必要に応じて夫の両親に頼んでいる。近居なので頼めばいつでも引き受けてくださる。例えば、夫婦だけでコンサートに行く、外食するなどの場合に頼んでいる。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	子育て中の親は、黄昏育児を基本的に望んでいないと思う。祖父母が望むならば可能。ただ、長期間で継続的に依存するのは望ましくないと思う。様々な制度や施設を利用したほうがいい。今は24時間利用できる公的施設もある。
公的支援	出産時に受けている(受けた)経済的公的支援	トルボミ制度、無償保育制度を利用
	子育て時に受けている(受けた)ケア的公的支援	トルボミ制度：トルボミ先生、政府が支援するデイケアセンター派遣の人、毎日、午後4時～7時半ごろまでの3-5時間程度世話してもらっている。費用は実費の10%程度負担
	その他(要望など)	「無償保育」は必須だと思う。住居支援が最も必要、教育のための経済的支援が必要。未婚家庭や新婚家庭などの特定家庭のみでなく、一般の家庭を対象に支援を拡大してほしい。10年前と比較すると非常に改善されていると思う。

## ② Hさん(男性)

概要	忠清南道ヨンドン郡で生まれ、出生100日後にテグ市に引越し、育つ。父は貨物車運転士、母は主婦。1女1男の長男として生まれる。母は結婚後も会社員として働き、Hさんが高校生の時退職。その後非正規で働いた経験もある。父母は、現在テグ市で父方祖母と同居。大学1年終了後軍に入隊。卒業後ソウル市の旅行ガイドとして旅行会社に就職。ガイドの仕事は移動が多いため、結婚2、3か月後に退職し、フリーランサー(個人事業主)になった。2013年に知人の紹介
----	---

	で妻に出会い 2017 年に結婚し、2 男を儲ける。フリーランサーとして働くとともに、妻のビジネスに協力している。妻は博士課程を修了し、フリーランサーとして働いている。テグ市で妻、息子 2 人の 4 人暮らし。長男はオリニジップ通園、次男は家庭保育。	
生まれ育った時	生まれた年	1985 年
	生まれた場所	自宅（忠清南道の田舎）
	取り上げた人	父方祖母、近所のおばさん（専門の産婆ではない）
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、姉（歩ける距離に父方・母方祖父母が暮らした）
	就学前に世話してくれた人	母。生後 100 日で引越したため両家の祖父母とも遠居になった。母に急用がある時は近所の人が見てくれた。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
子どもを育てた時	出産年	長男：2020 年／次男：2022 年
	子どもが生まれた場所	病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	長男：病院出産 3、4 日後→産後調理院 2 週間→自宅で産後トウミ支援を受ける 2 週間 次男：病院出産 3、4 日後→産後調理院 4 週間→自宅で産後トウミ支援を受ける 2 週間
	子どもの世話：主に世話した人	妻
	子どもの世話：手伝った人	産後トウミ、近居の妻の両親
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援	妻はフリーランサーなので、出産休暇などはない。産後トウミ支援制度を利用した。
その他	長男、次男ともに、コロナ禍の時に出産した。通常、産後調理院は、夫や子どもの訪問、宿泊などが自由だが、コロナ禍のために訪問程度で制限された。	
祖父母の孫育て支援	祖父母からの経済的支援の有無	—
	祖父母からのケア的支援の有無	必要に応じて近居の妻の両親に世話を受けている。私の実家はテグ市であるが、少し遠い。長男 1 人の時は、必要に応じて子どもを預けて迎えに行くこともあったが、2 人いる今は連れて行くのが大変。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児は仕方がないと思うが、周りで思い当たる人はいない。「無償保育制度」に関わりなく、共働き夫婦は、外部のサポーターを雇うことも難しく、祖父母に頼らざるを得ない状況である。
その他	私たちも主に夫婦 2 人で子育てを頑張っていると思っているが、いざというときは多くを両親に頼っている。祖父母がいないと子育ては不可能。本当にありがたいし、必要。	
公的支援	出産時に受けている（受けた）経済的公的支援	産後トウミ制度
	子育て時に受けている（受けた）ケア的公的支援	トウミ制度
	その他（要望など）	現在の支援は多い方だと思う。ただ、あまりにも支援内容が細分化されており、予算が重なっているので統合して支援したほうが良いと思う。経済的支援が増えれば良いと思うが、今の内容に不満はない。

③ Iさん（男性）

概要	テグ市で生まれ育つ。父は自営業（前職は会社員）、母は主婦。2男の長男として生まれる。母は私が6歳くらいまで保険会社に勤務、退職の理由は分からない。父母はテグ市で2人暮らし。大学卒業後、防衛産業団体に勤務。軍は免除。従妹の紹介で妻と出会い、1年交際後2017年に結婚。1男を儲ける。妻は高校の中国語教師、大学院修了。長男はオリニジップに通園。テグ市で妻、子どもの3人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1986年
	生まれた場所	病院
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母
	就学前に世話してくれた人	母方祖母、母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ある。父母が共働きだったため、私が就学前に1年ほど、遠居の母方祖父母の実家で暮らした経験がある。
	子どもを育てた時	出産年
子どもが生まれた場所		病院
取り上げた人		医師
産後のケア		病院出産後5日入院→産後調理院2週間→自宅
子どもの世話：主に世話した人		妻、私
子どもの世話：手伝った人		ない
子どもが幼い時離れて暮らしたこと		ない
祖父母の孫育て支援	出産・子育て時に受けた公的支援	妻：コロナ禍時に妊娠で心配だったので、妊娠後すぐ休職。出産後2年4か月育児休職。育児勤務時間短縮制度。 私：1ヶ月育児休暇（パパ休暇制度）利用
	その他	人工授精による妊娠、出産を経験している。妻の育児休暇中は妻が主に育児。私は夕方7時までに帰宅し、子どものお風呂と寝かせなどの育児。現在は、妻が復職しているので、子ども送迎は、朝は私、夕方は妻が担当している。育児分担は、私が掃除、食事の後片付け、本人用の洗濯、妻は、食事作り、洗濯。私が朝の出勤時間を調整したため帰宅が少し遅くなり、帰宅時は、子どもはすでに寝ている。
公的支援	祖父母からの経済的支援の有無	両家の両親から子育てに使用できるようにと小遣いを受けている。
	祖父母からのケア的支援の有無	急用の時は近居の妻の母に頼んでいる。快く引き受けてくれる。妻の母は小学校教員だったが、今は定年退職。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児は、しんどいと思うが、代案がないので仕方がないと思う。祖父母が子育てを一緒にしてくれるのはいいと思う。父母は自分の人生を楽しんでほしい。同僚に妻の実家の方で黄昏育児に頼っている夫婦が3組いる。
	その他	祖父母との同居は自然にいろんなことを学べていい。
公的支援	出産時に受けている（受けた）経済的公的支援	妻：産前9か月程度休職、産後2年4か月育児休暇利用 私：1ヶ月育児休暇（パパ休暇制度）利用
	子育て時に受けている（受けた）ケア的公的支援	トウミ支援制度は利用していない。
	その他（要望など）	信頼できる保育施設、時間延長できる、休日、出張時などに預けられる保育施設の拡充が必要。

④ Jさん（男性）

概要	テグ市で生まれ育つ。父母は繊維工場に勤めていた。現在、父は造園業、母は繊維業界でフリーランサーとして働いている。2人兄弟の次男。大学1年1学期終了後軍に入隊。大学卒業後、大学教授研究室で無給で教授の研究を手伝う。諸事情で辞めざるを得なかったが、その結果、パニック症候群に陥る。現在は、兄が経営するカフェで時間制勤務。結婚を考えていた人がいたが、32歳ごろに別れる。未婚。父、母と3人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1984年
	生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、兄
	就学前に世話してくれた人	祖母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	その他	子どものときは、父母が共働きで非常に忙しく、祖母に育てられた。祖父は、父が7歳の時に死亡。私が6歳ごろに祖母が引越して同居。兄と過ごす時間が多かった。今は両親に居候している感じ。
祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	共働きなど、状況によって、祖父母に頼らざるを得ないことはある。基本的に子育ては母親がするのが望ましいと思う。私は、祖母に育てられたが、子どもを制御する際、母が制御すれば肯定的、祖母が制御すれば否定的に反応する。母が育てるべきと考える理由である。	
公的支援についての要望など	子どもが6歳くらいまでに金銭的支援が必要。一時的で断片的支援ではなく、継続的で総合的な支援が必要。	

⑤ Kさん（女性）

概要	キョンサン市で生まれ育つ。2男1女の末っ子。1960年生まれの父は自営業、1958年生まれの母は主婦。2015年ごろ知人紹介で夫と出会い2019年に結婚、2男を儲ける。大学院博士課程修了。大学在学中からフリーランサーとして働いており、職場に勤めた経験はない。旅行会社に勤務していた夫は、結婚後すぐ退職、フリーランサーになる。長男はオリニジップ通園、次男は家庭保育中。現在、テグ市で夫、2人の子どもの4人暮らし。1980年代生れのHさんは夫。	
生まれ育った時	生まれた年	1989年
	生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、双子の兄
	就学前に世話してくれた人	母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	その他	父は、近年、成長する孫を見ながら、忙しすぎて子どもと関わった記憶がなく、とっても後悔しているとよく言う。
子どもを育てた時	出産年	長男：2020年／次男：2022年
	子どもが生まれた場所	病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	長男：病院3日→産後調理院2週間→自宅 次男：病院出産3日→産後調理院2週間
	子どもの世話：主に世話した人	夫、私（現在育児は夫4割、私4割程度）
	子どもの世話：手伝った人	両家の両親、トウミ
子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない	

	出産・子育て時に受けた公的支援	長男：産後トウミ制度1ヶ月（平日9時から18時まで） 次男：産後トウミ制度1ヶ月（平日9時から18時まで）
	その他	博士課程修了後、プサンで4年間フリーランサーとして働いたが、第1子の出産直前に、子育てのために実家のあるテグ市に引っ越した。長男出産時は、産後調理院の2週間の間は、コロナ禍の中での出産だったので、夫は入室などできず、訪問程度で制限された。次男出産時は、コロナ対応が少し緩和されPCR検査後入室可能になった。ただ、第1子の子どもは入室が禁止されていたため、夫が第1子の世話をしており、一度も産後調理院に訪問できなかった。
祖父母の孫育て支援	祖父母からの経済的支援の有無	—
	祖父母からのケア的支援の有無	仕事の準備のため3か月ごとの周期で忙しい時期がある。両家の両親に子どもの世話を頼んでいる。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児は否定的に考える。友人に祖母の望みで、毎日娘の家に通いながら黄昏育児をする祖母がいる。祖母には老後を楽しんでほしい。共働きでも、近年は保育システムが整備されているので、十分活用できる。
公的支援	出産時に受けている（受けた）経済的公的支援	産後トウミ制度
	子育て時に受けている（受けた）ケア的公的支援	アイトルボミ制度利用：生後3か月から利用可。3か月に申請し、2か月待機してから利用している。最初は1週間5日、1日4時間利用。現在は平日4日、7-8時間利用。本日は制度を利用しない日だが、インタビューのため申請し、支援を受けている。
	その他（要望など）	子育て支援はよくなっていると思う。無償保育はあるが、場合によって追加費用が必要な場合もあるので、統一してほしい。

⑥ Lさん（女性）

概要	グミ市で生まれ、テグ市で育つ。1男1女の長女。父は、20年前に会社員として退職後、現在フリーランサーとして働く。母は中学校の生物化学教師。結婚・出産に伴う経歴中断はなく、2018年に定年退職。1980年生まれの夫とは、大学生の時に出会い2017年に結婚、双子を儲ける。夫は大学院修了、現在、会社研究員。大学卒業後、正職員として大手「塾」で英語講師を務めたが体調を崩して退職。以降、家庭講師、非正規講師などを経て、結婚後、完全に退職。現在は主婦として育児に専念している。双子の子どもはオリニジップに通園。現在テグ市で、夫、2人の子どもの4人暮らし。	
生まれ育った時	生まれた年	1985年
	生まれた場所	病院
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、兄
	就学前に世話してくれた人	母方祖母（よく覚えている）
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
子	出産年	双子（2男）：2019年

どもを育てた時	子どもが生まれた場所	大学病院（帝王切開で出産）
	取り上げた人	医師
	産後のケア	大学病院 5 日→産後調理院 2 週間→自宅
	子どもの世話：主に世話した人	私
	子どもの世話：手伝った人	実親の父と母
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援 その他	産後トウミ 3 週間：週 5 日、9 時から 18 時まで利用。 早く結婚し、子どもを育てて仲睦まじい家庭をつくりたいと思っていた。いつになるか分からないが（可能であれば早く）、また仕事を持ちたい。小規模塾のような形で子どもたちをケアしながら、英語を教える仕事をしたい。
	祖父母の孫育て支援	祖父母からの経済的支援の有無
祖父母からのケア的支援の有無		回数は少ないが、必要に応じて実親に子どもの世話をお願いすることがある。父と母、たまには兄も世話してくれる。子育てがしんどい時、オリニジップに通園しない夏季、冬季休みや休日、夫が出張の時、友たちに会うときなど、両親に頼っている。
祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え		黄昏育児で祖父母による孫育ては反対。祖父母の子育て支援は、子どもの情緒発達にいいと思っている。子育ては私たち夫婦がメインで行っているが、実際に祖父母の支援がないと無理。祖父母も老後を楽しんでほしい。
その他		母が勤めており忙しかったので祖母が世話してくれた。私の母は、友たちの母親に比べて仕事に没頭していたように感じ、もっと関わってほしいと思った。祖母の訓育は少し不足していたのではないかとも思う。
公的支援	出産時に受けている（受けた）経済的公的支援	産後トウミ制度
	子育て時に受けている（受けた）ケア的公的支援	無償保育
	その他（要望など）	無償保育制度は定着したが、他のサービスを利用すると追加費用が必要である。より経済的支援が必要と思う。（母親が）仕事を継続できない最も大きな理由は、子どもが帰宅する午後 4 時ごろに家で子どもの世話をする人がいないためである。政府によるトウミ制度の拡充が必要。

⑦ M さん（女性）

概要	ソウル市生まれで、2 歳からテグ市で育つ。1 男 1 女の長女。父は銀行員として定年退職、母は専業主婦。大学を休学しながら、銀行員、製造業、英語幼稚園などで働く。高校と大学の同級生である夫とは、2012 年に結婚し、2 男を儲けている。夫は、大学卒業後、親族経営の繊維工場に勤めている。結婚後も、英語幼稚園に務めたが、第 1 子を流産し退職。2014 年の 31 歳の時、子育てしながら大学を卒業。2019 年に職業相談士、社会福祉士 2 級取得、2023 年に社会福祉士 1 級取得。2023 年から大学院修士課程在学中。現在、社会福祉士として働いている。テグ市で夫、2 人の子どもの 4 人暮らし。	
生 ま	生まれた年	1984 年
	生まれた場所	産婦人科病院（ソウル市）

れ 育 っ た 時	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、兄
	就学前に世話してくれた人	母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	その他	私が生まれたとき母が体調を崩し、3歳上の兄が母と離れて6ヶ月ほど、母方祖母に預けられた。6か月後母と会った兄は、人見知りをして祖母の背中に隠れたという。母はとっても心を痛み、今もその記憶を話している。
子 ど も を 育 て た 時	出産年	長男：2014年／次男：2017年
	子どもが生まれた場所	産婦人科病院
	取り上げた人	医師
	産後のケア	病院→自宅
	子どもの世話：主に世話した人	私。
	子どもの世話：手伝った人	長男：出産後、私は専業主婦だったが、すぐ隣に住んでいた実家の母が毎日家に来てくれた。 次男：実家の母
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	出産・子育て時に受けた公的支援	—
祖 父 母 の 孫 育 て 支 援	祖父母からの経済的支援の有無	—
	祖父母からのケア的支援の有無	実家の父と母に子どもの世話を頼んでいる。私が仕事のある平日、午後3時から7時までの間、両親が、毎日自宅に来てくれる。長男が学校からもどると間食を与え、塾に行かせる。次男は幼稚園に迎えに行く。母は体調を崩しており、1人でのいるのは難しい。孫の世話は父がするが、毎日母と一緒に来ている。両親にはとっても感謝している。
	祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え	黄昏育児は肯定的に考えている。
	その他	両親には毎月50万ウォン謝礼している。以前私が主婦だった時は毎月20万ウォンの謝礼をした。夫の給与からの支出だったために気が引けた。今は私の給与から謝礼ができています。両親も喜んでいる。
公 的 支 援	出産時に受けている（受けた）経済的公的支援	—
	子育て時に受けている（受けた）ケア的公的支援	長男：小学校トルボミ教室利用
	その他（要望など）	小学生の帰宅時間帯のトルボミ教室のプログラムを充実してほしい。教室運営においても申し込みは先着順ですぐ埋まってしまうので、利用できない。拡充してほしい。

⑧ Nさん（女性）

概 要	テグ市で生まれ育つ。1男1女の長女。父は、以前は設備、整備の仕事をしていたが、現在は母の故郷で農業。専業主婦であった母は、療養保護士資格取得後、2005年から15年まで療養保護士養成学園を運営した。現在は父と共に農業。大学院修士課程修了。2023年から博士課程に在
--------	--

	学中。相談士。未婚。13年間付き合っている人がいる。結婚を考えていたが、諸事情により、破綻した。しかし現在も付き合いは続いており、遠居の恋人とは、週末に会っている。	
生まれ育った時	生まれた年	1986年
	生まれた場所	保健所（テグ市）、兄も保健所で生まれる。保健所での出産は珍しいことではなかったようである。
	取り上げた人	医師
	生まれたとき一緒に住んだ人	父、母、兄
	就学前に世話してくれた人	母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	その他	父は子育てにそれほど気を使う人ではなかった。祖母とはほとんど交流がなかった。2005年に大学入学、休学と復学を繰り返し、2011年に卒業。2011年に大学院入学、社会福祉学専攻、2014年修了。2023年から大学院博士課程入学、相談学専攻。結婚はしたいが、子どもについてはうまく育てられるか自信がない。
祖父母による孫育て、孫育て支援についての考え		黄昏育児は、頼む側、受け入れる側ともに事情はあると思うが、望ましいとは思わない。祖父母にも自分たちの時間が必要である。仲良しの人が黄昏育児というか、近居の実家の両親と共同育児をしているケースがある。祖父母が孫のサイクルに合わせて暮らしている。
公的支援についての要望など		休職や育児休暇など整備されていると思う。

### 3. 1950年代、1980年代生れにみられる子育ての実態と意識の世代間変容

以下では、1950年代生まれ、1980年代生れの人々の「自分が生まれたときの状況」、「出産と産後ケア」、「子育て」、「子育て支援」、「祖父母が孫育てに関わることについての意見」の順で簡単に両世代における子育ての実態と意識の世代間の変容を述べる。

#### 3.1 1950年代生れの人々の特徴

1950年代生れの人々の状況をみると、兄弟姉妹は4-6人で、平均5人、生まれた場所は1人が助産院で生まれ、5人は、母の実家、自宅など、家で生まれており、出生時に取り上げた人は、親族や産婆である。1人が1970年代に結婚、5人は1980年代に結婚している。子どもは2-3人出産しており、平均2.3人である。兄弟姉妹数に比べ出産している子ども数は半減している。子どもを出産した場所は、1人が第1子を自宅で出産、第2子は病院で出産しているが、他の5人は全員病院で出産している。自宅で出産した人も診察等は病院で受けており、全員が出産時医療機関と関わっている。つまり出産の場所が自宅から医療機関へ変化している。産後のケアは自宅で行われ、産前産後休暇という名称で休暇はあったものの利用率が低い状況がみられた。祖父母が子どもの主な養育者になっているケースも多くみられた。

#### 3.2 1980年代生れの人々の特徴

1980年代生れの人々の状況をみると、兄弟姉妹は2-3人で、平均2.2人、生まれた場所は全員医療機関である。子どもの時に主に世話してくれたのは母親が最も多く、次が母方祖母である。その他に母方・父方の親族の支援があるケースもみられた。6人の既婚者のうち、1人は2010年代の前半に結婚、5人は後半に結婚しており、1-2人の子どもを出産している。平均子ども数は1.8人で、全員病院で出産している。出産した6人のうち、5人

は、自営業、主婦などで、産前産後休暇や育児休暇取得には該当しなかった。産前産後休暇制度を利用した人は1人で、その夫は1か月間の出産後育児休職を取得している。出産後のケアについてみると、1人が退院後自宅で産後ケアを行っているが、5人は、産後調理院で産後ケアを行っていた。産後調理院で過ごす期間はそれぞれ異なるが、一定の期間を専門機関で世話を受けながら過ごしていることが分かった。子どもの主な養育者は、妻と夫が協力するケースが多く、妻方の両親に子育て支援を受けているケースが多くみられた。外部サポーター、例えば、アイトルボミなどのように公的支援を受けているケースも多くみられた。

### 3.3 世代間の変容

兄弟姉妹の平均人数は5人から2.2人に半分以下になっている。子どもの平均人数は、2.3人から1.8人で大幅に減少しているのがわかる。1950年代生れは、自宅で生まれているが、子どもは病院で出産している。1980年代生れは、病院で生まれ、病院で出産しており、子どもの出産が完全に医療機関に移譲されているのがわかる。特に二つの世代間で変化がみられたのは、子どもの出産後のケアの場所である。1950年代生れは病院で子どもを出産し、産後を自宅で過ごしていたが、1980年代生れは、1人を除いて、病院で出産し、産後調理院というケアの専門機関で一定の期間を過ごしながら、産後ケアのみでなく、子育てに関わるケアと指導を受けていることが分かった。さらに、産後調理院から自宅に戻ってから、新生児ケアに関わる公的支援制度の1つである「産後トウミ支援」を受けながら子どもの育児をスタートさせるケースや、新生児以降のケアに関わる公的支援制度である「アイトルボミ支援」を受けているケースも多くみられた。

韓国では、1953年に「勤労基準法」に基づいて「産前産後休暇」制度が始まったが、1950年代生れの人々は、制度はあったもののうまく利用できていない状況がみられたが、1980年代生れの人々は、公的支援制度をうまく利用している状況がみられた。

### 3.4 二つの世代にみられる孫育てに関する意識について

子育てにおける私的支援の状況を確認した結果、1950年代生れも、1980年代生れも、子どもの祖父母に多くの支援を受けているのが分かった。今回のインタビューでは、祖父母が全面的に孫を育てる、いわゆる「黄昏育児」についての実態と意識について質問した。1950年代生れで実際に孫がいる人々は、経済的、またはケア的支援をしているのがわかった。祖父母の多くは「黄昏育児」には反対しながらも、子ども世代からの支援要請がある場合は、おおむね快く孫のケアを引き受けている様子であった。1980年代生れの人々の多くは、「黄昏育児」には賛成しないという意見を持ち、祖父母には自分たちの老後を楽しんでほしいと願いながらも、必要に応じて、両家の祖父母に子どものケアの支援を依頼している状況がみられた。特に、子育てにおいては、公的支援制度と祖父母による私的支援を適宜、混合にして頼っているのがわかった。

#### 注

- 1) 「黄昏育児」(ファンホンユガ)とは、様々な理由で孫育てに勤しむ祖父母が増え、その様子を指す造語として現れた。
- 2) 韓国では、2000年代以降に「キログイ家族」、「キログイアパ」という造語がつくられている。「キログイ家族」とは、高校生以下の子どもの国外への早期留学のために(主に)母

親が同伴して子どもの世話をし、(主に) 父親が一人韓国に残って働き、外国にいる子どもと妻の生活費と学費を送金する家族を指す言葉である。一人韓国に残る人の多くが父親であるため、父親を指して「キログiap」と呼んでいる。「アパ」は父、パパという意味である。同様に、孫育てを手伝うために祖母が家を離れ、祖父だけが一人家に残されている状況を指して、「キログハラボジ」という言葉も出てきた。「ハラボジ」は、おじいちゃんという意味である。

- 3) 「産後調理院」とは、産後調理及び療養などに必要な人力と施設を備えたところ（「母子保健法」第2条）において、分娩直後の妊産婦や出生直後の乳児に休職・療養、その他、日常生活に必要な便宜を提供する場所である。また、公的子育て支援の1つである「トルボミ先生」とは、政府が支援するデイケアセンターで派遣する子育て支援者を指す。

## 文献

李璟媛、2015、「韓国における子育て支援政策の動向と『黄昏育児』のゆくえ」、『家族社会学研究』27(2)：139-148。

テグ広域市 HP、대구광역시 (<http://daegu.go.kr>) (2024. 2. 19 最終確認)

統計庁 HP、KOSIS 국가통계포털 (<http://kosis.kr/index/index.do>)

(2024. 2. 20 最終確認)

## 第3章 中国

### — 「50后」と「80后」の語りから比較する現代中国家族のケア規範の変容—

李 東輝・磯部 香

#### 1. 目的

本章では中国社会の家族を取り巻くケア規範の変化に着目する。図1-1, 図1-2をみてもわかるように現在, 中国は1979年から2014年まで続いた一人っ子政策が大きな要因となり, 少子高齢化が急激に進行している。この少子高齢化が中国の家族をどのように変化させているのかを, ケアを切り口として解明したい。

中国の家族やケアに関して, 落合恵美子の「グローバル化する東アジアの低出生率」を引用すると,

中国系社会では, 傍系も含めた親族間の食事や家事の共同が日常的で, 日頃から世帯の独立性が低く, 子どもの預け合いも援助と言うより当然のこととして行われる。そもそも中国の伝統では子どもの面倒を見るのは祖父母という規範があり, 本来育児は母親がするものという意識は希薄だという。老親による育児援助は, 後の子どもによる老親扶養とセットだと意識されている。

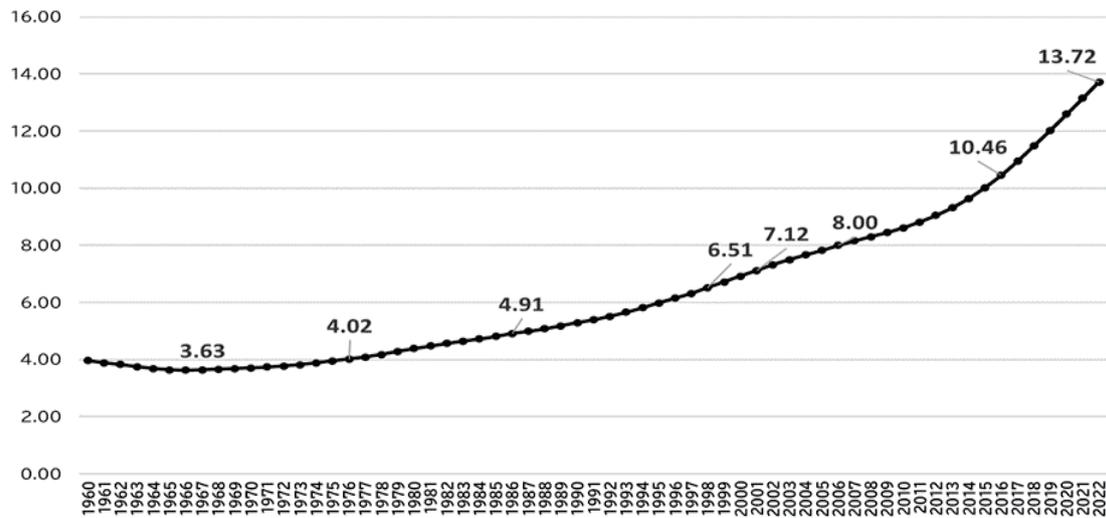
とある。法律にも明文化されているように中国では養育と扶養はセットの関係ではある。祖父母が子ども(孫)の養育を親に代わって「孫育て」を行い, その後, 年老いた後, 子どもや孫が親(祖父母)の扶養や介護を行っているのである。

そこで本報告書では, 中華人民共和国建国以降, つまり社会主義制度が構築された時期に生まれた「50后(50年代生まれ): Wǔ líng hòu」と, 一人っ子政策が実施され改革開放の中で比較的裕福な時代に生まれたとされる「80后(80年代生まれ): Bā líng hòu」<sup>1</sup>の2つの世代の主に女性に焦点を当て, 現下, この2つの世代は, どのような子育て経験や子育て観を有しているのか, また, 親世代の介護にどんな規範を持っているのかについて, 「50后」と「80后」の世代間の相違点と共通点の視点で述べてみたい。

---

<sup>1</sup> 以降, 本報告書では, 以降50年代生まれのことを「50后」, 80年代生まれを「80后」と記述することとする。

図 1-2. 中国の高齢化率（65 歳以上）



世界銀行 IBRD・IDA データ「65 歳和 65 歳以上の人口（占総人口的百分比）」  
 (https://data.worldbank.org.cn/indicator/SP.POP.65UP.TO.ZS) より、筆者グラフ作成。

## 2. 調査地概要

### 2.1 調査地の概要

今回の調査地域は、中国の東北部に位置する遼寧省大連市とした。大連市は遼寧省にある沿岸都市のひとつである。現在の中国の高齢化率は 13.5%（2021）であるが、2025 年には 14%、2060 年には 30%を超えると試算されている（『令和 4 年度 高齢者白書』<sup>2</sup>）。特に調査対象地域と選定した遼寧省大連市がある中国東北部の遼寧省・吉林省・黒竜江省の 3 省は、省全人口の 20%以上が 60 歳以上を占めている。さらに 0 歳から 14 歳の人口が 14%から 16%に低下しており、中国の中でも少子高齢化が深刻な状態にある（『2021 年中国統計年鑑』）。

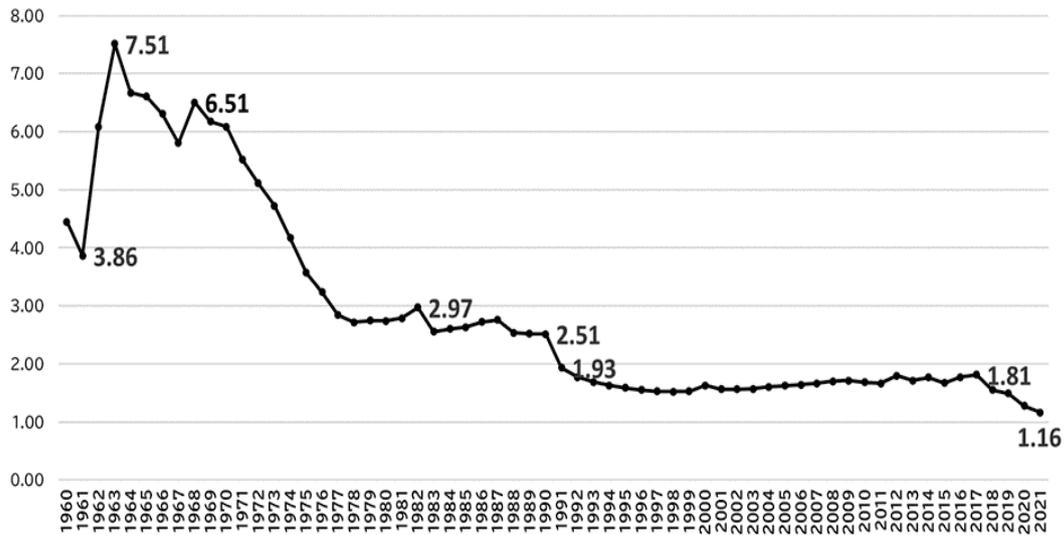
### 2.2 調査方法、及び、調査対象者の属性

調査日・調査対象者：2023 年 7 月から 11 月にかけて中国遼寧省大連市在住の 50 年代生まれ（女性 10 名）<sup>3</sup>、80 年代生まれ（女性 6 名、男性 3 名）に中国のソーシャル・ネットワークキング・サービスアプリ We Chat と騰訊会議を使用し、オンラインにてインタビュー調査を実施した。調査対象者はスノーボウリングサンプリング法を採用し、知人の紹介により調査協力をお願いした。

<sup>2</sup> 内閣府『令和 4 年版 高齢社会白書（全体版）』によれば、日本の高齢化率は 28.6%（2022）、韓国は 15.8%（2022）となっている。

<sup>3</sup> 2023 年 2 月、50 年代と 60 年代に生まれた女性に対し一人ずつプレ調査を行った。今回は「50 后」を対象としているため、女性のデータ (W1) のみを分析に使用することにする。

図 1-1. 中国の合計特殊出生率



世界銀行 IBRD・IDA データ「総生育率（女性人均生育）」

(<https://data.worldbank.org/cn/indicator/SP.DYN.TFRT.IN?end=2021&locations=CN&start=1960&view=chart>) より、筆者グラフ作成。

倫理的配慮・調査時間：本調査の実施にあたっては、人を対象とする研究に関する倫理審査委員（愛知教育大学山根真理教授、承認番号：第 AUE20220304HUM）の承認を得ている。インタビュー調査を実施する前に本研究の主旨を説明し、いつでも調査協力を撤回できること、また答えたくない質問には答える必要がないことを伝えた。そのうえで本主旨に同意してくださった方には調査同意書にサインをいただき、録音を行う許可を取った後に録音を開始した。調査時間は 1 時間半から 2 時間である。本調査は本研究共通のインタビューシートを使用している。

表 1-2 「「50 后」調査協力者の属性（女性 10 名）」を説明すると、調査協力者の年齢は、最年長は 70 歳で、一番若いのは 64 歳である。10 名は全員結婚を経験しているが、2 名が離婚を経験し、2 名は配偶者と死別している。出生地に関しては、全員ほぼ中国の東北地域出身である。遼寧省出身が多く 8 名、次に吉林省出身者は 2 人である。学歴をみると、小学校中退は 2 名、中学校卒は 2 名、高等学校卒は 3 名、専門学校卒は 1 名、非学歴教育を経て大学を卒業した人は 1 名、修士課程修了者は 1 名である。

「50 后」の女性たちの元職業について、現在全員リタイアしているが、農業は 4 名、工場勤務は 3 名、企業の中層幹部は 1 名、医師は 1 名、大学の教師は 1 名であった。家族構成をみると、三世代家族は 3 名で、夫婦二人の家族は 4 名、1 人暮らしは 3 名である。注目すべきは、調査協力者の中で、W1、W3、W10 は子ども夫婦と同居している。その理由は孫の世話をするためである。「50 后」女性のきょうだい数をみると、3 人から 8 人の間

表1-2. 「50后」調査協力者の属性（女性10名）

ID	年齢	配偶者の年齢	婚姻状態	学歴	元の職業	出身地	現在の家族構成	きょうだいの数
W1	68歳	69歳	継続	大卒（非学歴教育）	企業の中層幹部	吉林省洮南市	夫婦、息子夫婦、孫（女）	3人（弟2人）
W2	70歳	68歳	継続	専門学校（中専）卒	医師	遼寧省海城	夫婦	7人（姉1人、妹2人、弟3人）
W3	70歳	71歳	死別	中学校卒	工場売り場での勤務	遼寧省阜新市	自分、娘夫婦、孫	3人（妹1人、弟1人）
W4	64歳	65歳	継続	高等学校卒	農業	遼寧省凌源市	夫婦	8人（兄5人、姉1人、妹1人）
W5	66歳	66歳	継続	高等学校卒	石油工場勤務	大連市	夫婦	3人（弟2人）
W6	64歳	/	離婚	高等学校卒	工場の労働者	瀋陽市	1人暮らし	5人（姉1人、妹3人）
W7	64歳	/	離婚	修士課程修了	大学教師	遼寧省鞍山市	1人暮らし	不詳
W8	69歳	/	死別	小学校（小学校4年まで）	農業	遼寧省凌源市	1人暮らし	8人（兄4人、弟1人、妹2人）
W9	68歳	69歳	継続	中学校卒	農業	吉林省榆樹市	夫婦	6人（姉1人、弟3人、妹1人）
W10	66歳	69歳	継続	小学校（小学校2年まで）	農業	遼寧省鉄嶺市	夫婦、長男息子夫婦、孫2人	7人（兄2人、弟3人、妹1人）

表1-3. 「80后」調査協力者の属性（女性6名、男性3名）

ID	年齢	配偶者の年齢	婚姻状態	学歴	現在の職業	出身地	家族構成	子どもの数
B1	34歳	40歳	継続	大専	秘書	河南省	夫婦＋息子＋娘	息子（10歳）、娘（5歳）
B2	42歳	42歳	継続	大卒	塾講師	遼寧省大連市	夫婦	なし
B3	37歳	44歳	継続	大卒	看護師	黒龍江省綏化市	夫婦＋息子	息子（12歳）
B4	39歳	42歳	継続	中専	教師（幼稚園）	遼寧省大連市	夫婦＋娘	娘（14歳）
B5	35歳	37歳	継続	大卒	教師（中学校）	遼寧省大連市	夫婦＋娘	娘（3歳半）
B6	40歳	40歳	継続	大卒	教師（中学校）	黒龍江省	夫婦＋娘	娘（12歳）
B7m	40歳	34歳	継続	科目履修生	自営業	遼寧省大連市	夫婦＋息子＋娘	息子（10歳）、娘（5歳）
B8m	42歳	42歳	継続	大専	一般職（販売員）	遼寧省大連市	夫婦	なし
B9m	44歳	37歳	継続	中専	医師	遼寧省大連市	夫婦＋息子	息子（12歳）

※B1/B7m, B2/B8m, B3/B9mは夫婦

で多い。W7は詳しい情報を教えてくれなかったため、分からないが、W7以外の9名の調査協力者はきょうだい数は平均 5.56 人で、50 年代に生まれた人は中国の合計特殊出生率が比較的に高い時期に生まれた世代であるということが分かる。

次に表 1-3 の「80 后」についてであるが、34 歳から 44 歳の男女である。※にも明記してあるが、B1 と B7m, B2 と B8m, B3 と B9m は夫婦であり、夫婦でインタビュー調査に協力してくれた。「50 后」と同様に「80 后」も全員既婚者（初婚）である。9 名中 6 名が遼寧省出身である。学歴は 4 名が大卒、2 名が大専となっている。職業は、女性は、塾講師を含め教師が 4 名、秘書 1 名、看護師 1 名であり、男性は、自営業 1 名、一般職 1 名、医師 1 名となっている。家族構成は夫婦かもしくは夫婦と子どもの核家族であるが、近くに義理を含めた父母が生活しており、常に支援がもらえる「修正大家族」の形態をとっている。子どもの数は 0 名から 2 名である。また調査対象者のきょうだい数について言及したい。B3 は本人を含め 4 人きょうだい、B1 は 3 人兄弟、B4, B6 は 2 人きょうだいである。一人っ子政策が実施された以降に生まれた「80 后」であるものの、きょうだいがいるのも特徴である。

### 3. 「50 后」・「80 后」の子育て

#### 3.1 子育ての経験

「50 后」調査協力者の多くは 24～26 歳の間で結婚している。子どもが生まれたのは 1978 年から 1989 年の間である。調査協力者は持っている子どもの数をみると、表 3-1 に示したように、2 人の子どもを持つ人は 3 名（W4, W8, W10）で、それ以外の 7 名は子どもが 1 人だけとなっている。

「50 后」の女性たちは、結婚し、産児制限である「一人っ子政策」が実施される直前やその後に出産・妊娠を経験していることもあり、10 名の中 7 名が子どもが一人っ子で、3 名が子どもを 2 人産んでいることから、中国の「一人っ子政策」が中国女性の出産に大きな影響を与えていることがうかがえる。子どもの人数と戸籍との関連をみると、2 人子どもを産んでいる対象者は全員農村戸籍である。農村戸籍の場合、第一子が女兒である場合、第二子を産むことができると規定されており、都市部より農村部では政策が少し緩やかであったのが影響している。しかし、第一番目の子どもが男児である場合、仮に第 2 子を産むと、「一人っ子政策」に違反するとされ、W10 のように、罰金を科せられることも少なくなかった。

注目すべきは、調査協力者たちの学歴が低い一方で、自身の子どもたちの学歴はほぼ大学卒以上であり、非常に高い点である。中国では 1966 年～1976 年までの「文化大革命」の影響により、「50 后」の女性たちが大学に進学するチャンスはほとんどなく、十分な教育を受けられなかったため、かえって自分の子どもへの教育期待が大きく、子どもに対する教育を大変重視していることが読み取れる。

「50 后」自身の生育歴に関しては、幼いときよくお世話をしてくれた人を問うと、一番多い回答は「父母」（6 名）、その次に「母親」が 4 名、そのほかに、「父方の祖父母」、「母方の祖母」、「兄」、「姉」と「姉の娘」（親戚）などと回答している。父母中心の子育てであったが、そのほかのメンバーである祖父母ときょうだい及び親戚も「50 后」の子育てに

表 3-1. 「50 后」の結婚年齢と子育て状況

ID	年齢	結婚した年	結婚年齢	子どもの数	子どもの年齢 生まれた年	子どもの学歴	主な介護対象	自分の子どもを世話 していた人
W1	68歳	1980	25歳	息子 (1人)	41歳 (1982)	大卒	①自分の母親 ②母方のお婆さん	①自身 ②幼稚園
W2	70歳	1977	24歳	息子 (1人)	45歳 (1978)	修士課程修了	父母	自身
W3	70歳	1977	24歳	娘 (1人)	45歳 (1978)	修士課程修了	母親	①母親 ②自身
W4	64歳	1983	23歳	娘 (2人)	39歳 (1984) 32歳 (1991)	長女：修士課程修了 次女：大卒	①父母 ②姉妹兄弟	①自身 ②夫
W5	66歳	1983	26歳	息子 (1人)	36歳 (1987)	修士課程修了	①父母 ②父方のお婆さん ③母親の妹	義母
W6	64歳	1985	26歳	娘 (1人)	37歳 (1986)	大卒	父母	母親
W7	64歳	1988	24歳	息子 (1人)	34歳 (1989)	博士課程在籍	父母	①自身 ②離婚した夫
W8	69歳	1979	24歳	息子 (2人)	46歳 (1977) 44歳 (1979)	長男：大卒 次男：修士課程修了	①母親 ②兄たち	①自身 ②自身と夫の母親
W9	68歳	1979	24歳	息子 (1人)	44歳 (1979)	修士課程修了	①母親 ②姉	①夫の妹 ②自身
W10	66歳	1980	18歳	息子 (2人)	44歳 (1979) 42歳 (1981)	長男：大卒 次男：小学校卒	父母	①姉の娘 ②義父母

表 3-2. 「80 后」の結婚年齢と子育て状況

ID	年齢	結婚した年	結婚年齢	子どもの数	子どもの年齢 生まれた年	子どもの学歴	主な介護対象	自分の子どもを世話 している人
B1	34歳	2012	23歳	息子・娘 (2人)	10歳 5歳	小学校 幼稚園	義母 (入院のとき)	①父母 ②義父母
B2	42歳	2009	28歳	0			経験なし	
B3	37歳	2009	23歳	息子 (1人)	12歳	中学1年	経験なし	①義母 ②自身
B4	39歳	2007	24歳	娘 (1人)	14歳	中学2年	母親 (小さい頃)	①自身 ②義母
B5	35歳	2017	29歳	娘 (1名)	3歳半	幼稚園	父方の祖父母 (たまに手伝う)	①自身 ②母親
B6	40歳	2008	25歳	娘	12歳	中学1年	義母 (1週間程度)	①自身 ②夫
B7m	40歳	2012	29歳	息子・娘 (2人)	10歳 5歳	小学校 幼稚園	母親 (入院のとき)	①妻 ②自身
B8m	42歳	2009	28歳	0			母方の祖父母 (13~15歳の頃)	
B9m	44歳	2009	30歳	息子 (1人)	12歳	中学1年	父親 (2日間)	①母親 ②義母

コミットしている。

「50 后」自身の子育てをみると、主に自分が子育ての中心的役割を果たしていると回答する人が多く、7名（W1, W2, W3, W4, W7, W8, W9）がそのように答えている。その次に自分の母親と答えた人は3名（W2, W6, W8）と義理の母親は3名（W5, W8, W10）で、そのほかに「夫の妹」、「姉の娘」、「夫」と「幼稚園」などと答えている（表 3-1）。

次に「80 后」の子育てについてみて行こう。「80 后」の子どもは、幼稚園から中学校2年であり、まだ成人していない。「一人っ子政策」の一環としての晩婚化・晩産化の推進、さらに高学歴化の影響により、6名が20代後半に結婚している。また子どもを強く望まない夫婦もいる（B2/B8m）。主に子どもたちの世話をを行っている人は、自分自身でと回答する人が5名である一方、義理を含めた父母が子育ての大きなサポーターとなっている。その一方、配偶者と回答している人がB7mのみというのも興味深い。

また「50 后」と「80 后」の子育てサポーターを比較すると、「50 后」は「父方の祖父母」、「母方の祖母」、「兄」、「姉」、「姉の娘」（親戚）と家族・親族の中でも、比較的広く、横のつながりの支援者がいる。しかし、「80 后」になると、義理を含めた父母が子育ての強力なサポーターとなっており、直系にサポートが収斂している点が特徴であることも述べておかねばならない。

### 3.2 「50 后」の孫育てサポート状況と意識

少子高齢化の進行により労働力が足りない日本では、退職後に再就職する人が多い。同じ東アジアに位置する中国では、子育て観念の変化と子育て施設の不備により、生まれてから幼稚園に入るまでの子育てを誰の手によって行うのかが大きな課題のひとつになっている。特に少子化が進んでいるため、子どもを1人もしくは2人産んでいる中国の家族では、子どもを大変大事にし、親たちが子ども夫婦の子育てにサポートするのが一般的になっており、退職した親の「再就職」と揶揄される言葉が現在流行っている（表 3-3）。

調査協力対象者の子どもへの子育てサポート状況をみると、表 3-3 に示したように、孫がまだ生まれていない W7 以外全員が孫の世話を経験している。大部分の「50 后」の調査協力者は生まれてから幼稚園に入園するまで孫の日々の生活のお世話、入園後は幼稚園への送迎、孫が小学校に入っても送迎を行っている。子ども夫婦はほとんど共働きであり、自身の乳幼児の子どもを預ける施設はなく、親（祖父母）のサポートが必要であるのが中国の子育ての現実である。

## 4. 介護経験の有無と介護規範

### 4.1. 介護期間と経験

表 3-1 を見ると「50 后」のほとんどの調査協力者が介護した経験がある。そのうち、自分の親と義理の親を介護した人は8名であり、自分の夫の介護をした人は2名（M3, M8）である。介護期間は一番長いのは16年（W4）、一番短いのは半年（W9）である。介護の場所は介護が必要な人の自宅が多く、高齢者施設を利用する人は2名（W1, W7）である。介護の内容は日々食事などの生活の世話、身体のケア、入院するときの付き添い、経済の援助と情緒的なサポートなどを含めている。

W1 が語ってくれたように「(介護を) とても辛いことだと感じている」人がほとんどである。自分の夫の介護をした W3 (1年2カ月) と W7 (8カ月) は自分の夫の介護を主に自身で行っている。子どもたちは仕事があるため、手伝うことが少なく、介護は大変だったと言っていた。自分の親と義理の親の介護に関して、50年代に生まれた人たちはきょうだいが多く、きょうだいと一緒に分担する人が何人かいるが、長期間の介護はやはり大変だと感じる人が多く、介護が原因で家族の健康状態が悪くなった事例もある (W5)。

一方、「80 后」の特徴としては、義理も含めた本格的な親の介護が未経験であることである (表 3-2)。B2, B3 はまだ介護の経験がないと回答している。その他の「80 后」の介護は、比較的短期間の、さらには病院での付き添い等の介護経験であり、小さい頃の祖父母の介護体験も交えて語っている。

表 3-3. 「50 后」の子どもの状況と孫の面倒の有無

ID	子どもの結婚	孫の数	孫のお世話の有無
W1	既婚	女兒 (1人)	生まれてから現在まで (14歳の孫) ずっとお世話を行う。
W2	既婚	女兒 (1人)	息子の妻が妊娠し大連に来た後、ずっとお世話を行う。
W3	既婚	男児 (1人)	ずっと孫のずっとお世話を行っている。
W4	長女既婚、次女未婚	女兒 (1人)	孫が生まれてから3歳まで (幼稚園に入るまで)、仕事をやめて、長女に家に住み込んで孫のお世話を行う。
W5	既婚	女兒 (1人)	家政婦を雇っているが、自分も毎日子どもの家へ行って、孫のずっとお世話を行う。
W6	既婚	女兒 (1人)	孫が日本にいるため、生まれてから3歳まで毎年ごとに半年間、日本に来て孫のずっとお世話を行う。
W7	既婚	いない	なし
W8	二人とも既婚	女兒 (2人) 男児 (1人)	三人の孫が幼稚園に通うまでお世話した。今も末の孫の学校への送り迎えをしている。
W9	既婚	女兒 (1人)	09年生まれた孫、現在中学校3年、幼稚園に入ってからお世話をしていた。孫は長い間自分の家に来て、同居していた。
W10	二人とも既婚	女兒 (2人) 男児 (2人)	吉林省の実家から大連にきて、次男の二人の孫を現在もお世話をしている。

#### 4.2 将来誰によって介護されたいのか

将来、誰の手によっての介護を期待するのかについて紹介する。

W2 は、規範について「親孝行として介護を行うのは当然である」という伝統的なケア意識がまだ根強く残っていることが分かる。

親孝行は当たり前だと思います。夫の父親は私たちにとても親切してくれたので、老後には介護するのは当たり前です。また夫のきょうだいは4人で、大家族の関係をうまくいくために、また、夫のために、親の面倒をみるべきです (W2)。

また「50 后」の調査協力者たちは、自分の親、義理の親と夫が介護に必要なとき、献身的に介護をしていたが、自分自身の介護に関しては、配偶者にしてもらいたいと考えている (W2, W4) が、子どもに期待すると答えた人は W10 だけであった。

自分の将来、二人の嫁はとても親孝行で、どの嫁でも将来介護してくれると思います。現在は元気でまだ介護してもらう必要はありません。大丈夫です。将来のことはまだ

考えていません。高齢者施設にいかうとしても、二人の息子が反対するに違いありません。自分の行った子どもへの教育を誇りに思います (W10)。

W10 以外の 9 名は子どもに自身の介護を期待できないと語っている。

一方、「80 后」は、将来義理を含めた両親の本格的な介護に直面した場合、できうる限り自分たちの手で義理を含めて父母の介護を行いたいと回答している。B4 は今後の介護に関してはこのように回答している。

あの、義理のお父様とお母様、例えば、介護が必要な時、夫がしてくれると思います。もしも将来、これからの時間の中で、えっと、義理のお父様とお母様のお世話、あるいは、介護必要の場合、あの、自分の夫が忙しくて時間がない場合は、私も行います。これは人の子どもとしての基本だと思います (B4)。

また男性は義理の両親を含めた親の介護についてこう語っている。

介護は(子どもの)責任だから、当然しなければならないことです。これは一般的な考え方だと思います。

・・・妻の両親に対する介護に関しても、自分の親と一緒に思うように行おうと思います (B7m)。

と語り、B8m、B9m も同様に、義理の両親を含めた親の介護は、「自分の家族であるから」、「子どもとしての義務」と捉えていることが分かった。

## 5. 結論

以上、「50 后」、「80 后」のインタビュー調査から明らかとなったのは、下記の通りである。

1. 「50 后」の彼女たちの人生は、子ども期に政治や社会変動の影響を大きく受け、自身が大学を含めた高等学校への進学が難しかったこともあり、自身の子どものへの進学への期待値が高い。「50 后」の子ども世代である「80 后」の多くは、「50 后」と比べれば、自由に自身の進路を決めており、大学へ進学したり、外国に留学したりしている。
2. 「一人っ子政策」の制限により、「50 后」も「80 后」も子ども数が少ない。特に「50 后」に関して都市部の女性は子どもをひとりしか産めなかったが、農村部の女性は第一子が女兒である場合、2 人を産むことができることと子どもの数は関連していると推測できる。
3. 子育てに関して、「50 后」の彼女たちは、主に自分で子育てを行い、さらに双方の両親と親族の支援を得ながら子どもを育てていた。退職後に自分の子どもの子育て、つまり「孫育て」を行っている女性たちが圧倒的に多い。「80 后」はまさしく「50 后」の義理を含めた父母のサポートを受けながら、仕事と子育てを両立させている。
4. 「50 后」は、義理を含めた親の介護は子どもの責任であると思って介護を行ったが、自身に介護が必要になったとき、人を雇うか、あるいは高齢施設に入ると 10 人中 9 人がこのように回答している。自分の介護を子どもたちにさせたくない、子ども家族に迷惑をかけ

たくない、子どもに期待していない人がほとんどである。一方、「80 后」は本格的な介護に携わってはいないが、今後義理を含めた父母の介護が必要になった時、介護は自分たち子どもの責任だと捉えている。特に全男性は、子どもの義務として、できる限り、義理を含めた父母の介護を担いたいと強く思っていることが分かった。

#### 【付記】

今回のオンライン・インタビュー調査にあたり、本調査にご協力くださった中国の「50 后」「80 后」の方、及び、共に調査を行ってくださった黄一峰先生（大連外国語大学日本語学院）に心より御礼申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金「基礎研究」(B)「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史的研究（課題番号：20H01567, 研究代表者：山根真理, 愛知教育大学教授）による研究成果の一部である。

また、2023年11月24日比較家族史学会第73回秋季研究大会（於日本女子大学）にて報告した「ケアをめぐる彼女たちの選択—自己・家族と国家のはざまで—」、及び、磯部香・李東輝「国家政策と家族の狭間で生き抜く「50 后」の中国女性たちのライフストーリー」『高知大学学校教育研究』第6号（pp.139-147）の内容を大幅に改正したものである。

#### 【引用文献】

落合恵美子（2008）：「グローバル化する東アジアの低出生率」『学術の動向』13巻4号，pp. 27-34.

世界銀行（2023）：「総生育率(女性人均生育)」

<https://data.worldbank.org.cn/indicator/SP.DYN.TFRT.IN?end=2021&locations=CN&start=1960&view=chart>（閲覧日：2024年02月01日）

——（2023）：「65歳和65歳以上的人口（占总人口的百分比）」

<https://data.worldbank.org.cn/indicator/SP.POP.65UP.TO.ZS>（閲覧日：2023年02月01日）

国家統計局編（2021）：『2021中国統計年鑑』「2-4 人口年齢結構和撫養比」

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2021/indexch.htm>（閲覧日：2022年11月9日）

内閣府（2022）：『令和4年版 高齢社会白書（全体版）』

[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/s1\\_1\\_2.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/s1_1_2.html)（閲覧日：2024年02月23日）

## 第4章 フィリピン

### —1950年代生まれ地方在住女性のライフコース調査の概要—

長坂 格

#### 1. はじめに

筆者は 2009 年に、本報告書を編集した山根真理を代表者とするアジア諸国（日本、中国、韓国、フィリピン）における女性のライフコースの共同研究に参加した。共同研究で行った比較調査において、筆者は、フィリピン、ルソン島北西部のイロコス地方において、1930 から 40 年代生まれの女性を主たる対象として、家族関係や自分が受けた／行った育児の経験についての質問紙調査を実施した（有効回答者数 81 名）。他国との調査結果との比較からは、①男女間で学歴に差が見られないこと、②女性の就労がこの世代において拡大し、さらに継続就労をした女性の割合が高いこと、③育児ネットワークの範囲は自分が子どものときも親のときも広いこと、④自分が育児をしたときには雇用する家事労働者による育児が増加していたこと、などが明らかになった（山根他 2014）。この調査では、調査補助を依頼した地元住民数名の知人からの紹介で調査協力者を募ったため、調査協力者の代表性には留保が必要であるが、これらの調査結果には、双方向的、家族圏的な家族・親族関係の下での育児のあり方や（清水 1990；長坂 2012）、米国植民地下における公教育の普及のなかで女性の就業拡大といった（エヴィオータ 2000；ソブリチア 2022）、フィリピンの社会的歴史的背景が関わっていると考察することができる。他方で、フィリピンの調査結果は、学歴や雇用家事労働者の有無といった点において、公務員などの有職女性と、農業従事女性との間で、大きな差があることも示していた。

今回の短期の調査では、前回調査より 20 歳から 30 歳ほど若い、1950 年代から 60 年代初頭生まれの女性 6 名を対象として、就学、就業、結婚、出産、育児、介護、死者親族祭祀を主要調査項目として、聞き取りを行った。前回調査の結果をふまえ、学校教員や役場職員などとして就業を継続した女性 3 名と、主として農業を生計手段としてきた女性 3 名に聞き取りを行った。本報告では、調査の経過を簡単に説明した後、調査協力者のうちの 2 名の事例をやや詳しく紹介することで、フィリピン調査の予備的報告を行うことにする。

#### 2. 調査方法

コロナ禍による海外渡航制限、外国人入国の制限が緩和された 2023 年 2 月に、フィリピン、ルソン島北西部のイロコス・ノルテ州において、正味 4 日間の調査を実施した。イロコス・ノルテ州は、イロコス地方の最北端の州であり、主要言語はイロカノ語である。イロコス地方は、フィリピンがアメリカの植民地であった 1910 年代から 1930 年代まで、フィリピンのなかでもとりわけ多数のハワイへの出稼ぎ労働者を送出していたことで知られる。植民地期にハワイ、後にアメリカ西海岸に渡った人々はほとんどが男性であったが、その後、長くハワイ、あるいはカリフォルニアなどに留まった者も少なくなかった。それらアメリカ在住者が起点となり、1965 年のアメリカ移民法の改正以降、家族再統合制度によってアメリカに移民する者が多いこともイロコス地方の特徴である。

調査は以前も調査を実施した、イロコス・ノルテ州のP町で行った。協力者は、1990年代後半から筆者がフィールドワークをしていたP町の一地区の住民や、調査を補助してくれた町民の紹介を通して知り合ったP町住民である。聞き取りはすべてイロカノ語で行われた。

すでに述べたように、1930年代から40年代生まれの人々を対象とした前回の調査からは、地方在住女性のライフコースを検討する際においても、公務員・教員などとして継続就業した女性たちと、町の農村部で農業を主たる生業としていた女性たちのライフコースの違いを考慮に入れる必要性が浮上していた。そこで、今回の調査で、1950年代と1960年代初頭生まれの女性をターゲットとして聞き取りを行ったが、公務員、教員などとして継続して給与所得を得ていた女性（給与職継続グループ）と、農村部で農業中心に生計をたてていた女性（農業中心生計グループ）、それぞれ3人ずつに聞き取りを依頼した。調査期間は限られており、調査協力者は6名に留まったが、それでも聞き取りを通してそれぞれのグループのライフコースの違いも浮かび上がった。

表4-1 調査協力者の概要

	生年	本人の主職業	夫の主職業	本人学歴	子どもの数	きょうだい数	職業経験
Aさん	1960	農業	農業	中1	4	7	17歳でマニラで家事労働経験。
Bさん	1960	農業	農業	小6	7	10	14歳のときマニラで家事労働。その後縫製工場勤務。17歳で結婚。
Cさん	1953	野菜売り	農業	中4卒	7	1	16歳からマニラの工場で働く。野菜売り。
Dさん	1957	町職員	電気工事、野菜売り	大卒	4	6	町政府に長く勤務。
Eさん	1955	学校教員	公務員	大卒	4	4	私立高校と公立高校に教員として長く勤務。
Fさん	1958	町職員	政治家警備など	大卒	4	4	私立高校経理から町政府で勤務。

表は調査協力者について簡単にまとめたものである。CさんとDさんは、中部ルソンの別の州の出身であり、婚入してP町に住んでいる。農業中心生計グループの3人は、いずれも町の農村部に住み、夫婦で農業を中心に行ってきた女性たちである。当時の教育制度は小学校6年、中等教育4年の後、大学か短大、専門学校へと続くものであった。給与職継続グループがいずれも大卒であるのに対して、農業中心生計グループの学歴は小学校から中等教育卒業までであった。農業中心生計グループは、いずれも10代でマニラでの出稼ぎを経験している。他方で、給与職継続グループの夫は、1名が公務員で継続して就労していたが、他の2名はこれといった職がなく、小規模な農業を営む程度であり、妻の稼ぎが生計の中心であった。早くに母親が亡くなったCさんを除き、農業中心生計グループのきょうだい数は多く、また子どもの数もやや多めであった。

### 3. ライフコースの事例

以下では、聞き取りを行った6名の女性のうちの2名による、誕生から現在までの語りを紹介する。農村在住で農業中心に生計をたててきた調査協力者女性と、教員・公務員など給与収入を継続的に得てきた調査協力者女性のグループから1名ずつ、その聞き取り内容を、予備的調査報告として要約して紹介する。

### 3.1 Cさんの事例—農村在住、農業中心生計女性のライフコース

1953年生まれのCさんは、イロコス地方のP町の農村部に住む。夫のTさんは2016年に亡くなった。夫との間には7人の子どもがいる。現在は2人の子どもと同居している。夫がかつて13年間マニラの工場で働いていたことで受け取り資格が生じた、フィリピン社会保障システム（SSS、Social Security System）から受け取っている少額の遺族年金が主な収入である。

Cさんは、イロコス地方とマニラの間に位置する、中部ルソンの州で生まれた。生まれたときは、伝統的産婆に取り上げてもらったという。その州で高校までを過ごした。母親はその州出身だが、父親はルソン島南部の出身であった。ただ、母親はCさんが3歳のときに亡くなった。その後、Cさんは母方の祖母と、母のきょうだい（おば、Lおばさん）に育てられた。Cさんには妹が一人いたが、その妹は父親のきょうだいに育てられた。母が亡くなってから、父親はマニラで働いていたが、ごくたまに会うくらいであり、Cさんとの関係は「遠い」という。父親はその後再婚し、再婚した妻との間に子どもがいた。

Lおばさんは、当時、マニラ首都圏のチョコレート工場で働いていた。Cさんは、中部ルソンの州で、小規模な農業を営む祖母と住んでいた。マニラで働くLおばさんから学費や生活費の支援を受けながら、祖母の家から小学校、高校に通った。高校を卒業してからはマニラのLおばさんのところに移った。Cさんは教員養成の大学に進学したかったが、Lおばさんに、「それは無理だ。（2年間の）秘書コースならば（可能だ）」と言われたので、進学をあきらめて働くことにした。

最初に就職したのは靴工場だった。当時、マニラ郊外のマリキナ町（現在のマニラ首都圏マリキナ市）には、たくさんの靴工場があった。就職したのは子ども用の靴の工場だった。ただ給料が安かったので、6年間働いた後に、マニラ首都圏の別の町にある靴工場に移った。その工場は、大人用の靴の工場で、給料がマリキナの工場よりも高かったという。

移った先の工場では後に夫となる男性、Tさんと出会う。Tさんはイロコス地方の調査地であるP町出身で、その当時、Cさんが移った靴工場で働いていた。靴工場では、Tさんらは1階で働き、Cさんらは2階で働いていた。知り合ってから、休憩時間などにTさんが2階に上がってきてしゃべりかけてくるようになった。おやつなどを持ってきたり、冗談を言ってきたりしているうちに関係が「発展」したという。

その後、Tさんが、Cさんが当時住んでいたLおばさんの家に結婚の交渉（*mangas-asawa*）にきたときには、もう「（自分からは）何も言うことがない状態」であり、すぐに結婚が決まった。Cさんは22歳、夫のTさんは32歳だった。マニラの裁判所での結婚式が終わってから、夫がLおばさんの家に引っ越し、一緒に暮らすことになった。夫は、そのうちオバが働くチョコレートの工場に移り、その後、さらに別の工場に移った。

マニラで二人の子供を産んだ。産婆さんが来たが、その処置の仕方はイロコス地方のそれとは異なるものだったという。イロコスで一般になされる身体を温めることなどの処置は、マニラではなかった。イロコスでは4人の子供を出産したが、近所に住む、夫の親族である伝統的産婆がきて処置をしてくれた。Cさんはイロコス地方の伝統的産婆の措置について以下のように回想する。寝床の下に床にたらいなどを置き、そこに火のついた炭を入れる。グアバや文旦の葉も一緒に入れる。産婦はシーツにくるまるように言われ、発汗

させられる。産婆さんが腹部のマッサージもする。最初の9日間くらいは水浴びをしない。その後水浴びをするが、その際にはお湯を使う。身体を温めることで「(身体が)調理され (*maluto*)」、また妊娠することが可能になると言われた。

1人目の子どもを産んだときはまだ工場で働いていた。L おばさんが子どもの面倒を見てくれた。L おばさんは夜勤の仕事をしていて、午後まではL おばさんが見て、私が帰ると私が子どもの世話をした。ただ2人目が生まれたときには、もうL おばさんが年をとって勤務と育児の両立が難しくなっていた。夫からも「自分が働くから」と言われ、Cさんが仕事を辞めて育児をすることになった。

1980年代の半ばには、工場でのストライキが頻発するようになった。その頃、ハワイに移民していた夫のオジが、夫に、イロコスに戻って彼らの家に住んで「田んぼを耕せばいい」といった。それでイロコス地方に移り、ハワイ移民である夫のオジの家に住み、夫婦で農業をすることになった。Cさんは苗取りや田植えはイロコスにきてから覚えたという。

イロコスに戻ってからは、Cさんは野菜売りも生業にするようになった。7人の子どもを出産したが、子どもを育てるのに農業だけでは十分ではなかったので、野菜の売買を覚えた。P町の中心部には市場があり、週に二回、市が立った。野菜は農家から仕入れる。代金は野菜を売った後に支払う。その頃は半日の市だけでずいぶん儲かったという。町のパン屋などで、売り上げからよくおやつを買ってきたという。また、野菜売りがよいのは、自分の家のおかずはただになり、子どもを食べさせることができることだと語る。

子どもを産んだ後、2か月くらいは働かなかった。しかし2か月後にはまた市に野菜を売りにいった。子どもが大きくなったら、下の子どもの面倒も見てくれた。市がたつのは水曜と土曜だった。土曜日は学校がないので、上の子どもが下の子どもの面倒を見た。水曜日は夫が面倒を見た。そのようにして、7人の子どもを育てながら市での野菜売りをつづけた。

一番上の息子は47歳になる。結婚してマニラで働く。2番目の息子は独身で、今はマニラで、L おばさんが遺した家に住み、三輪バイクの運転手をしている。3番目の息子は、地元の州の専門学校を卒業後、Cさんと同居し、農業をしている。正式に結婚はしていないが同じ町出身の妻と一緒に住み、5歳の娘がいる。4番目の娘はマニラで専門学校を卒業し、今は、イロコスの調査地の町で、近所の人経営する店で働く。彼女の夫はマニラでGrabのドライバーをしている。マニラでの家賃を払うのは大変なので、イロコスで5歳の子どもと一緒にCさんと暮らしている。5番目の息子は、マニラの大学を卒業し、結婚してマニラに住む。子どもはいない。6番目の息子はまだ30歳で、独身だ。地元の大学の2年コースを卒業し、マニラの自動車関連の会社で機械工として働く。7番目の娘は、43歳のときに産んだ子どもで、まだ26歳だ。マニラのカレッジでホテル・レストラン経営コースを卒業し、今は2番目の息子と一緒にLおばさんの家に住み、コールセンターで働いている。

子どもたちは高校卒業後も専門学校や大学で学んでいるが、Cさんたちは農業中心だったので学費を出すことは難しかった。そこで上の2人の子どもが、下の子どもたちの大学の学費を支援した。支援を受けた4番目の娘と5番目の息子は、大学を卒業してからマニラで働いたが、彼らが結婚する前に、下の子どもたちの学費を工面したという。

現在は、3番目の息子とその内縁の妻と5歳の娘、マニラで夫が働く4番目の娘とその5

歳の娘と 6 人で暮らす。娘は、近所の親族の女性が所有する店で働いているので、いない間は C さんが孫の面倒を見ている。息子の内縁の妻は仕事をしていないので、大体 2 人で子ども 2 人の面倒をみる。ただ、息子の妻も、収穫期などに誘われれば農作業に行くので、そのときは C さんが 2 人の子どもの面倒を見る。C さんは「私がしなければ他の人が見ることになるから」「そうすれば彼らも働けるし、私にも（タバコ代などといって）小遣いをくれる」と語る。

母の家族の財産は、母親の男きょうだいが相続している。C さんは「もめたくない」と、特に遺産を求めることはしないつもりだと述べる。現在 2 人の自分の子どもが住んでいる、マニラの L おばさんの家は、C さんを含めた 3 人の家族が相続することになると説明する。というのも、L おばさんは独身で子どもがいなかったが、C さんだけでなく、C さんのいとこ 2 人も養育していたからだという。C さんが住んでいる家は、夫の T さんのオジである、ハワイに移民した男性の所有である。そのオジはすでにハワイで亡くなった。ただ T さんのイトコにあたるそのオジの子どもが、将来的にハワイから戻り、イロコスに住む希望を持っていると聞いたので、現在、近くに家を作り始めた。ただ、まだ屋根がない状態である。

夫の命日には、イロコスの習慣に従ってお供えものをする。もち米でココナッツ・ミルクのお粥をつくり、鶏肉や豚の肝臓の串焼きをつくって、その日のおかずとともに供える。それくらいで、たくさんの人を招いて食事を出すようなことはしない。お供えをするときは、「ここに来て食べてください」と唱える。呼びかける相手は、夫だけでなく、「亡くなった親族 (*dagiti minatay*)」であり、生まれた州の親族も「みんなが含まれる」という。夫の墓、義父の墓、義母の墓は、P 町内の墓地にあるが、すべて違う場所にある。ただ、それぞれの墓に「尋ねに行く (*sarsarungkaran*)」ようにしているという。

介護したのは夫だけだという。自分を養育してくれた L おばさんは、発作で急死したので介護することはなかった。夫については、介護は子供と一緒にした。一番下の娘が特にした。病院に行くとは一緒にいき、身体を洗い、拭く。持ち上げて寝かせるなどは同居する息子がした。食事のときは食べさせた。ただ、夫は介護が必要となって 2 か月後に亡くなったので、介護期間は長くはなかったという。

### 3.2 D さんの事例—教員・公務員女性のライフコース

1957 年生まれの D さんは、イロコス地方の調査地の農村部に住む。2022 年まで町政府の職員として勤務した。夫との間に、4 人の子どもがいる。夫は 2004 年に亡くなっている。現在は、海外で働く娘の子どもと、近所にすむ 30 代半ばの女性家事労働者と 3 人で暮らしている。近所の女性は、昼間は自分の家での仕事をしたりすることもあるが、夜は必ずここで寝る。

D さんはマニラで生まれたが、小学校に入る前に、イロコス地方の南に位置する、中部ルソンの州に移った。きょうだいは双子一組を含む 6 人だった。子どもの頃から、父はマニラの繁華街のレストランで働いており、母と母方の祖母、きょうだいたちと暮らす。自分の世話を主にしたのは母親と母方の祖母だった。母親は町の市場でもち米菓子を売る商売をしており、自分の売り場も持っていた。子供を育てている間もずっと仕事を続けていた。

高校を卒業してからマニラの大学に行った。父親が、下宿代がもったいないと言い、勤めているレストランの人と話をし、父親が住む従業員寮と一緒に住むことになった。授業がないときはウェイトレスをして、無料で住まわせてもらうことになった。客からのチップやクリスマスボーナスもあったが、勉強を続けるのが難しく、父親の寮を出て、寝床を借りる「ベッドスペーサー」になった。マニラの大学が集まる地区に住むようになったが、たまたま近所に、夫となる男性、Lさんも住んでいた。Lさんは、P町出身の家族が所有するアパートに住んでいたが、そのアパートはDさんが住む下宿と同じ通りにあった。Lさんは当時、電気工事の仕事をしていた。Dさんと知り合ってから、Dさんに毎日電話をかけてくるようになった。Dさんはマニラの大学で会計学を専攻し、卒業した。ただ、すぐに後の夫と同棲したこともあり、会計士の試験勉強はしなかった。

1980年に夫とマニラで一緒に住み、その後、イロコスのP町で一緒に暮らすようになった。その後、父親が亡くなり、一度は中部ルソンの州に戻り、そこでしばらく働きながら暮らしていた。約1年後に夫と正式に結婚し、再びP町の農村部にある、夫の育った家で暮らすようになった。

夫の家族は農業をしていた。夫は8人きょうだいの長子だったが、子どもの頃から隣家に住む母方の祖母に育てられた。結婚してから住んだのも、夫の祖母の家だった。夫は小規模な農業をしつつ、家屋を建てる時の電気工事などに呼ばれることもあった。普段は、川で魚をとり、それをおかずにするなどしていた。

当時町役場に勤務していた、近所に住む役場職員に勧誘され、Dさんも役場に勤務することになった。以来、40年近く、P町の役場に勤務した。仕事については、「家族の収入源だ。仕事をしなければ子どもを勉強させることはできない。教育も家も服も健康もすべてそこから出すのだから」と述べる。「仕事は貴重」なものだから、出産して辞めた同僚は周囲にいなかったという。

子どもは伝統的産婆と助産師がセットできて、処置をしてくれた。出産時には、窓をバナナの葉で覆ったり、出産後に寝床を炭で温めたりしたという。Dさんはずっと仕事をしていたので、子どもの育児にはたくさんの方が関わったという。まず中部ルソンの州に住んでいた妹が、Dさんの紹介で夫のきょうだいと結婚して、P町の同じ村に暮らしていたので育児を助けてもらった。同じ時期に乳児がいたので、自分の子どもに授乳をしてもらったこともある。その他にも夫の母、祖母、それから夫の祖母に家で同居する、夫の独身のオジにも手伝ってもらった。夫は、自営業で仕事はほぼなかったが、主に料理をしていた。夫も家事をすべきという意見に対してのコメントを求めると、「ここでは普通だ。女性がここでは働くから」と笑って答える。

子どもについては、一番上の娘はアラブ首長国連邦のアブダビの洋品店で経理の仕事を長くしている。2番目の娘はカナダに住んでいる。大学卒業後、2008年にカナダ人と結婚してカナダに移住し、現在はケアホームで働いている。Dさんは数年前に2週間ほど、娘に呼ばれてカナダに滞在したという。3番目の娘は、一番上の娘に呼ばれ、アブダビで看護師をしている。今、うちで育てている子どもはこの娘の子どもだという。妊娠7か月のときに帰国し、出産し、3か月後にふたたびアブダビに戻って働いている。4番目の息子は大学卒業後、しばらくして役場の建築課で働くようになった。

Dさんは、マニラ近郊の州に住む自分のきょうだいの子を一人養育している。P町

で小学校に通い、高校から大学まで通わせた。同じ P 町出身の人と結婚した。D さんのことはオバ *tita* と呼ぶが、D さんの子どもたちはその子どもを自分たちのきょうだいと見ているという。今は、一番上の娘と呼ばれ、その子どもアブダビで働いている。また、別のきょうだいの子どもも一時期、家に住んでいたこともある。かつて市場で商売をしていた D さんの母親が養育していたが、母親が病気になったため、P 町に呼んで、ここで高校に行かせた。その後、大学にも行かせたが、大学は母親が住む州の大学だった。自分の母親が病気になったとき、「大丈夫、引き取るから」と言ってその子どもを引き取ることにしたという。その子どもの母は、「5 人の子どもがいて大変だったので」とも述べる。現在は、3 番目の娘の子どもの面倒を、近所の女性とともに見ているが、孫を見ることについては「とても幸せなこと」「(自分のこどもとは) 気持ちが異なる」と言い、「より貴重に感じる」とも言う。

自分の家族の相続についてはまだ具体的な話をしていない。きょうだいで助け合って改修した実家には、末の弟が住んでいる。母の亡くなるまで一緒に住んでいたからだという。父の墓は中部ルソンの州にあり、弟が購入した。母の墓は、P 町で自分が購入したので、こちらにある。亡くなった人への祭祀は、夫の命日に「思い出す (*lagip*)」ために麵料理などをつくって、近所の人をもてなすくらいだ。

介護経験としては、同居していた夫の祖母と独身のオジを介護したことがある。隣家に住む義母がまだ元気だったので助けてくれた。自分がよくすれば、自分もよくしてもらえと思ったという。また、自分はここに婚入してきて、彼らは自分の夫を育ててくれた人たちだからということもあつたと述べる。

#### 4. おわりに

以上の二人の語りからは、本人の孫たちの養育も考慮に入れば、近隣に住む近親者や年長の子どもの、そして家事労働者など、家族圏的な広がりや雇用労働を組み合わせた形で育児が展開していることなど、前回調査から継続している点もいくつか見られた。他方で、D さんもそうであるが、給与職継続グループの両親の学歴は必ずしも高くなく、両親が公務員などの職についていることもなかった。このことは、商売をしている家族などが子どもを大学に行かせ、その後、娘を公務員や教員として就職させていくという職業移動が、地方社会においても少数ながら見られたことを示唆している。今後は、前回調査との詳細な比較を行いつつ、さらに、6 人の語りを検討し、世代間、世代内のライフコースの違いと共通性をさらに検討していく予定である。

#### 文献

- エヴィオタ, E.U. 2000 『ジェンダーの政治経済学：フィリピンにおける女性と性的分業』 (佐竹真明・稲垣紀代訳) 明石書店
- ソブリチア, C.I. 2022 「アメリカ植民地教育はフィリピン女性の地位をどう変えたか」 落合恵美子・森本一彦・平井晶子編 『リーディングス アジアの家族と親密圏第 3 巻 セクシャリティとジェンダー』 有斐閣
- 清水展 1990 「子どもをめぐる家族と社会：フィリピン社会理解のための試論」 『社会科学論集』 30 : 69-109.

長坂格 2012 「フィリピン低地社会における死者親族祭祀：イロコス地方農村の事例」『社会学雑誌』 29：86-108.

山根真理・洪上旭・朴京淑・李東輝・長坂格・中筋由紀子 2014 「20 世紀アジアの社会変動と産育のネットワーク：5 地域ライフコース調査から」『愛知教育大学研究報告』 63：155-166.

## 第5章 デンマーク

### —高負担・高福祉国家に生きる人々の人生経験—

青木 加奈子・宮坂 靖子

#### 1. 高負担・高福祉国家の形成が人々のライフコースに与えた影響

本章では、デンマークで実施した1950年代生まれ（以下「1950s世代」と表記）と1980年代生まれ（以下「1980s世代」と表記）を対象とした聞き取り調査の結果から、それぞれの世代のライフコースの特徴とライフコースの世代差を明らかにする。

20世紀から21世紀を振り返ったとき、デンマーク社会に生きる人々のライフコースに影響を与えた歴史的な出来事として、戦後以降の高負担・高福祉を目指した国家づくりと、その結果として人々に浸透していったジェンダー平等および多様性の尊重を挙げたい。

北ヨーロッパに位置するデンマークは、現在でこそ環境ビジネスやIT、デザイン等の産業が活発であるが、元々は酪農を中心とした農業国であり貧しい国のひとつであった。第二次世界大戦後の国づくりにおいて、デンマークでは国民へ、就労および納税の義務を課す代わりに、必要とするすべての人へ必要な福祉サービスを国家が提供する「高負担・高福祉」の福祉国家の実現へと舵を切った。家族の中に育児や介護、介助等世話を必要とする者がいても、他の家族メンバーは、原則就労することが求められ、「高福祉」社会を支えるために納税の義務を果たさなければならない。その代わりに、家族メンバーの世話は国家の責任によって行われる。このような福祉国家のあり方は、エスピン・アンデルセンの比較福祉国家論に従えば、「社会民主主義レジーム」と呼ばれており、スウェーデンやノルウェー等、他の北欧の国々でもみられる（エスピン・アンデルセン 2001）。

社会民主主義型の福祉国家の国づくりが本格化した1960年代以降、デンマーク人のライフコースは、性別を問わず、またケアが必要な家族がいたとしても、仕事を続けていくことが前提となっていった。教育やケア産業を中心に女性も賃金労働に携わるようになり、社会における女性の待遇改善が進んだ<sup>1)</sup>。同時に、女性に偏りがちな家庭内でのケア役割も、実子に対する共同親権の拡大や父親の育児休業期間の延長等社会政策の整備によって、次第に「女性だけでなく男性も」かかわることが、実態の面でも規範の面でも浸透していった。

さらに、人々の経済的な自立は、生き方や家族形成にも変化をもたらした。それは例えば、カップル共通の子どもがいても婚姻関係を前提としないパートナーシップ（「非法律婚」：samlevendepar）、子どもをともなったパートナー関係の解消、新たなパートナーとの関係の再構築としてみられる。21世紀の前後には、同性同士のパートナーシップが社会的にも制度的にも認められるようになり<sup>2)</sup>、生殖医療技術の進歩はシングルの人や同性カップルが子どもを育てる可能性を広げている。すなわち近代家族的な家族モデルとは異なる多様な生き方や家族形態が、デンマーク社会の中で認められ存在している。

以上のようなデンマーク社会の変動に、本研究の調査対象となった1950s世代と1980s世代を当てはめると、各世代の特徴を次のように説明することができる。

1950s世代は誕生の頃に、デンマークが「高負担・高福祉国家」を目指して国づくりに着

手した頃である。女性が仕事を持ち始めた時期でもあり、親世代が必ずしも共働きであるわけではなく、むしろ実態として性別役割分業が残っていたと推測される。1950s世代が学業を終え、就職したり家族形成を開始したりした1970年代から1980年代は、男性だけでなく女性も仕事を続けていくことが当然とされ始めた時代である。公領域だけでなく私領域においてもジェンダー平等意識が浸透し、実践され始めていった。

その頃に誕生したのが、もうひとつの調査対象世代、1980s世代である。幼少期から両親は共働きで、母親だけでなく父親も家事や子育てにかかわる姿を見て育った世代である。自身が家庭を持ち親となった調査時点では、パートナーと共に生計を立て、パートナーと協力しながら仕事と家事・子育てをこなしている、そのような世代でもある。

## 2. デンマーク調査の概要と調査対象者について

デンマーク調査はいずれの世代も、デンマーク第2の都市、オーフス（Aarhus）市およびその近隣の街で2022年12月から2023年2月に実施した。調査対象者の選定方法は、現地在住の知人を介して調査対象者を紹介してもらうスノーボールサンプリング方式である。調査対象者には、事前に調査の趣旨を記載した調査票を配布し、調査に協力の意思を示した者に調査を実施した。調査場所は、調査対象者が指定した場所（自宅、親族宅、職場、カフェ）で、調査時間は約1時間半であった。日本語で意思の疎通が可能だった1980s世代の1名（80-1）を除き、調査はデンマーク語の通訳を介して行った。

調査対象者について簡単に説明しておく。1950s世代は、1950年代前半生まれ6名、同後半生まれ3名で、性別は女性5名、男性4名である。コペンハーゲン出身者が1名いたが、8名はオーフス市内を含むユトランド半島の出身であった。1980s世代は、1980年代半ば生まれ4名、同後半生まれ1名で、性別は女性2名、男性3名である。調査中に1990年代初頭生まれであることが判明した者が1名（女性）いた。聞き取り調査は継続したため、本報告書でも調査対象者の一人として結果を記載している（80-6）。全員がオーフス市を含むユトランド半島の出身であった。

調査対象者の属性一覧を表1、表2に示す。

## 3. 1950s世代の人生経験 ―職業キャリアとケア

この節では、調査対象者9名（女性5名、男性4名）の調査結果から、特に女性に視点を当てて特徴的な点を述べる。

### 3.1 職業キャリア―1950s世代とその親世代

#### 3.1.1 1950s世代の親世代

生年の情報のある1950s世代の実親と義親22名の生年は、1900年代生まれ1名、1910年代生まれ4名、1920年代生まれ12名、1930年代生まれ5名であった。おおよそ日本の大正期～昭和初期生まれ世代に相当する。

この世代の女性たちは、基本的に専業主婦（専業主母）であったが、家業（夫の自営業）を手伝う者もあった。当時は保育園がなかったため、育児期は基本的に専業主婦（専業主母）となり、育児終了後に非正規の職業に就くケースもあった。例えば、50-④や50-⑧の母親は、保育助手（正規の保育士とは異なる）の仕事に就いた。生涯就業経験のない専業主婦は1名のみであった。

表 1-1 1950s 世代の調査対象者の基本属性

ID	性別	出生年	出身地	現在の職業(カッコは現役時代)	カップル形態	子ども	実／義両親
50-①	F	1954	ユトランド	年金(民間企業の事務職)	法律婚 (夫1949*)	長男(1980) 次男(1984)	実父: 自営業(1918生、既に死去) 実母: 家業手伝い/主婦(1919生、既に死去) 義父: 自営業(1912生、既に死去) 義母: 専業主婦(1908生、既に死去)
50-②	F	1951	オーフス市	年金 (教師、~2013年)	法律婚	長女(1985*) 長男(1986)	実父: 会社員(1923生、2014年死去) 実母: オルガニスト/専業主婦(1925生、2005年死去)
50-③	M	1953	オーフス市	年金(会社員)			実母: 職人、工場経営(1918生、83歳で死去) 実父: 家業手伝い、専業主婦(1921生、88歳で死去)
50-④	M	1954	ユトランド	年金(教員)	法律婚 (妻1962)	長男(1986*) 次男(1989*) 長女(1991*)	実父: 農場経営(1923生、1995年死去) 実母: 専業主婦(1928生、1992年死去) 義父: 不明(81歳で死去) 義母: 不明(76歳で死去)
50-⑤	M	1952*	コペンハーゲン	年金 & 非常勤講師(現在PT, 2019年まで大学教員)	法律婚 (妻1955*)	長女(1980*) 次女(1994*)	実父: 会社員(1926生、88歳で死去) 実母: 専業主婦(1928生、90歳で死去) 義父: 農業(1926生、既に死去) 義母: 農業(1925生、既に死去)
50-⑥	M	1959	ユトランド 育ち	農業(FT)	法律婚 (妻1958)	長男(1983*) 次男(1995*) 長女(1998*)	実父: 農業(既に死去) 実母: 専業主婦(92歳) 義父: 不明(既に死去) 義母: 不明(既に死去)
50-⑦	F	1959	ユトランド	国立大学職員(FT)	非法律婚 (パートナー 1957)	長男(1985) 次男(1987) 三男(1993)	実父: 工場労働者(1929生、既に死去) 実母: 専業主婦(87歳) 義父: 不明(1920生、1996年死去) 義母: 不明(1920生、2000年死去)
50-⑧	F	1959	オーフス市	早期退職年金(保育士)	法律婚 (夫1953*)	長女(1989*) 長男(1994*)	実父: 郵便局員(88歳で死去) 実母: 保育士補助他(88歳)≠存命 義父: 不明(53歳で死去) 義母: 不明(63歳で死去)
50-⑨	F	1950	オーフス市	年金(保育助手他)	法律婚 (別居中)	長男(1971*) 長女(1973*)	実父: 不明(72歳で死去) 実母: 不明(41歳で死去) 義父: 不明 義母: 不明

[注] 表 1-1 の 50-② と 50-③ は夫婦である。

表 1-2 1980s 世代の調査対象者の基本属性

ID	性別	出生年	出身地	職業	カップル形態	子ども	実両親(数字は出生年)
80-1	M	1984	ユトランド半島	博士候補生(PT)	シングル	なし	父: 年金(1948*) 母: 年金(1954)
80-2	F	1985*	ユトランド半島	幼稚園教諭(FT)	非法律婚	長男 (2014*)	父: 年金(1946) 母: 年金(1952)
80-3	F	1985*	ユトランド半島	大学講師(PT)	法律婚	なし	父: 年金+自営(1950*) 母: 年金(1955*)
80-4	M	1986	オーフス市	会社員(FT)	法律婚	なし	父: 年金(1951) 母: 年金(1953*)
80-5	M	1989*	ユトランド半島	会社員(FT)	法律婚	長男(2017) 次男(2020)	父: 年金(1954) 母: 労働組合(PT、1962)
80-6	F	1991*	ユトランド半島	博士候補生(PT)	法律婚	長女(2018) 長男(2021)	80-5に同じ(兄妹のため)

[注] どちらの表も、調査内容から逆算して生年を算出したものは数字横にアスタリスクをつけている。「FT」は「フルタイム」、「PT」は「パートタイム」のことである。

### 3.1.2 1950s 世代

育児期に専業主婦（専業主母）であったのは 50-⑨の 1 名であった（第 1 子出産後約 6 年間）。50-⑨は、1969 年に結婚し、1971 年（19 歳）、1973 年（21 歳）に出産した。1970 年代に出産経験があった女性は本ケースのみであり、「当時はまだ保育園がなく、ほとんど母親が育てていた」と言うことであった。

他の 4 名の女性は、フルタイムまたはパートタイムのいずれかの働き方で仕事を継続していた。1950s 世代の母親世代からライフコースが大きく変わったことがわかる。デンマークでは、1970 年代に女性労働力率が高まったが（澤渡他 2020）、保育サービス制度が未整備であった（佐藤 2019）。1970 年代前半は、女性が専業主婦となる男性単独稼ぎ主型から共働き型への過渡期にあったことが看取できる。

### 3.2 海外就業を経由しての入職

初めての離家経験が海外就業であったという女性が 2 名いた。50-①はスイスでオペア（au pair: 住み込みで育児、家事等を担当する家事労働者）として、50-②はイギリスの病院で勤務した経験をもつ（この他、50-⑧の初職は国内でのオペアであった）。50-①は、高校卒業後の 1974 年（19 歳）に、幼児のいる家で住み込みのオペアとなった。1 日 6 時間勤務で、子どもの世話、洗濯や掃除などの家事を行った。当時オペアの就業は 1 年に制限されたため、その後帰国し貿易関係の会社に事務職として就職した。職業学校に通いながらインターンとして働いたということである。

1970 年代に学業を終了した女性に、海外でオペアになる事例が増加したという現象は、1973 年の EU 加盟が影響したと推察できる。

### 3.3 退職と年金

9 名中在職者が 2 名（男女各 1 名、50-⑥と 50-⑦）、7 名が既に年金生活者であった。デンマークの公的年金制度には、通常の年金（pension）と早期退職年金（afterløn）の 2 種類がある（宮坂 2024）。女性 4 名のうち、ケース 50-⑨を除く 3 名が早期退職を経験している（50-⑨は情報欠落）。男性 3 名のうち早期退職を経験した者はケース 50-③の 1 名であったが、これは会社の倒産によるものであり、主体的に早期退職を選択した女性対象者とは事情が異なっている。女性の方が早期退職年金制度を利用して年金生活者（pensionist）となる経路を選択する傾向がみられた。

女性のなかで、パートタイム就労経験のない者は一人もいなかった。女性はライフコースに応じて、フルタイムとパートタイムという働き方を柔軟に選択し転換していた。一貫して国民学校（小学校）教員であったケース 50-②の場合でも、育児期に短期間パートタイムに転換していた。以上のことから、職業キャリアはジェンダー非対称であり、女性の方がより柔軟な働き方を選択する傾向にあったと言える。

### 3.4 子育て

#### 3.4.1 1950s 世代の親世代の子育て

9 名すべてが「母親のみ」「母親中心」と回答しており、性別役割分業体制がベースとなった男性単独稼ぎ主型の世帯であった。例えば 50-⑦は、父親が鉄鋼会社勤務だったため、昼間は不在で、自分の世話をしてくれたのは母親のみだったと言う。

母親が父親の家業を手伝っていた場合には、子どもの世話を祖母に頼むことがあった。例えば、50-①は父親が庭師（自営）で母親が仕事を手伝っていたため、同じアパートの別

階に住む祖母が日常的に面倒をみてくれた。また、母親が専業農家である父親の手伝いをする際、当時は保育園がなかったため、「近所の 15、6 歳くらいの娘さん」に面倒をみてもらったケースもあった (50-⑥)。

### 3.4.2 1950s 世代の子育て

カップルによる共同育児、または夫が会社員の場合には妻中心+夫参加型のいずれかであった。実親、あるいは義親が移動可能な範囲に住んでいれば支援を受けることができた。仕事が企業勤務（会社員）ではなく、教員（公務員）や自営業等フレキシブルな働き方ができる夫は、比較的育児にかかわりやすかった。

第1子が育児休業明け（6ヶ月）に保育園に入所できなかったため、夫が離職して1年間面倒をみたというケースもあった (50-⑦)。当時妻の方が、給料が多かったという理由による。50-⑦は、9名中唯一「非法律婚」であり、次世代（1980s 世代）の萌芽とも位置付けられるケースである。

1970 年にはアメリカのフェミニズムがデンマークにも伝わり女性運動が活発となるなど、1980 年代にかけてデンマークの女性を取り巻く環境は大きく変化した。1950s 世代はこれらの影響を受け、新しい価値観を受容し新しいライフスタイルを生み出していった（澤渡他 2020）。

## 3.5 孫の世話

保育園から小学校低学年の孫がいて、子ども宅と車で 1 時間以内の距離に居住する者は、50-②と 50-③の夫婦一組と、50-④から 50-⑦の 4 ケースであった。車で 30 分以内程度の場合、1 週間に 1、2 回程度、孫の保育園の迎えや世話等の支援を定期的に行っていた。最も孫の世話が頻繁であったのは 50-⑤であり、娘 2 人の子ども（孫）4 人の世話を 1 週間に 2 回あまり行っている。50-⑤は 68 歳で大学教員を退職し年金生活者となった。現在も非常勤講師は続けているが、退職を決めた 1 つの大きな理由が娘の出産、孫の世話であった。

祖父母による育児支援は日常的に重要な機能を果たしている。余計な手出しをすることはないが、頼まれれば快く引き受けるという姿勢が共通してみられた。

## 3.6 高齢者介護

### 3.6.1 親の介護経験

1950s 世代の親世代は、高齢期に至っても夫婦で生活し、一方が死亡すると残された者は、コムーネ（市、kommune）からのヘルパーや看護師等の支援を得て自宅で一人暮らしをすることが一般的であった。認知症になるなど特別な事情になった場合は高齢者住宅<sup>3)</sup>に入居する。

今回の調査対象者は、「介護が必要な期間がなかったため介護経験がない」という人がほとんどだった。調査対象者たちは、親に会いに行き一緒に会話をしたり食事をしたりするなどの情緒的支援や、買い物や病院の付き添いなどの生活支援を行っていた。介護経験があるのはケース 50-②のみで、介護休業を 3 か月取得し、実家で父親やコムーネからのヘルパーらの支援を受けながら母親の世話をを行った。ただし、情緒的支援と生活支援が中心で、身体介護をすることはなかった。

実母が存命中のケースが 3 件あったが、いずれも自宅で一人暮らしである（老親は 80 歳代後半 2 名、90 歳代前半 1 名）。うち 2 名はコムーネからのヘルパーの支援を得て生活している。50-⑧の母親は、コムーネからのヘルパーに月 2 回訪問してもらっているが、姉と交

代で1週間に4日から6日程度、家の掃除等の生活支援を行っていた。50-⑥の母親は転倒して骨折したが、コムーネからのヘルパーや看護師に支援してもらいながら自宅で一人暮らしを継続していた。調査当日も、50-⑥が夕方に食事を用意し母親宅を訪問していた。

### 3.6.2 自身の老後についての希望

調査対象者全員が、自宅で配偶者とコムーネからの介護サービスを利用して生活することを望んでいる。認知症になった場合には、介護付高齢者住宅に入ることはやむをえないとも考えている。

子どもに対しては、身体介護を期待せず、「訪問する」「会話する」といった情緒的支援と、買い物や通院の付き添いやPC操作の支援といった生活支援を望んでいる。夫婦間でも身体介護は望まない傾向がある。身体介護は福祉サービスの専門家に任せ、家族を情緒的な関係性として捉えている点は大きな特徴である。身体介護に関しては、他人にしてもらうことに抵抗があるため家族に期待する日本と、家族の支援が必要と回答しつつも、身体介護は夫や子ども等の家族には期待しない、あるいはしてもらうことに抵抗があるというデンマークとの違いが浮き彫りになった。

### 3.7 相続

親が死亡した際の対応は、自宅やサマーハウス等の不動産は売却し現金化してきょうだいで等分する、家具や遺品等の動産は相談のうえ欲しい人がそれを引き継ぐというやり方が基本であった。

墓については、教会から土地をレンタルし、墓碑等は家族が設置する。親は生前にある程度の期間（20-30年程度）の土地の管理料を教会に支払う。その後は子ども達の裁量で、墓を維持するかどうかを決定する。その負担を孫の世代に持ち越すことはないと言う。親の墓にかかわる経費や労力の負担について、一般的に出生順位やジェンダーにより違いが生じることはない。

墓参りは、故人の誕生日やイースター、クリスマスなどにすることが多い。また、市内の墓地は公園にもなっているため、散歩しながら墓参りをするも行われる。近年は、土葬から火葬へ、個人墓から自然葬への動きがみられると言う。

### 3.8 家族やジェンダーに関する意識

非法律婚、婚外子、同性婚など婚姻や出産の制度には許容的であるが、一生独身で過ごすライフスタイルには否定的である。ケアに関しては、乳幼児期に専業主母となること、親の老後の面倒を子どもがみることを肯定する意識はほぼ存在していなかった。また、これらについて、1950s世代とその子ども世代の1980s世代の意識はほとんど差がみられなかった。

## 4. 1980年代生まれ世代の人生経験

この節では、1990年代前半生まれの1名を含めた6名（女性3名、男性3名）の調査結果から、この世代のライフコースに特徴的な点を述べる。

### 4.1 1980s世代とその親世代の職業キャリアと子育て

#### 4.1.1 1980s世代の親世代

1980s世代の実親の生年は、1940年代後半生まれ（80-1の実父）と1960年代前半生まれ（80-5と80-6の兄妹の実母）の各1名を除き、8名が1950s世代であった。調査時点で、

パートタイムとして働いていたのは 80-5 と 80-6 の兄妹の実母だけで、9 名は既に年金生活者であった。1980s 世代が就学前の幼少期、母親は育児休業期間を除きフルタイムかパートタイムにかかわらず仕事を続けており、両親が共に子育てにかかわっていたことを明確に記憶している。例えば 80-5 と 80-6 の兄妹の実両親は、母親が夜間勤務の仕事に就いていたため、昼間は母親が、夜間になると父親が主体となって兄妹の世話をしていた。

#### 4.1.2 1980s 世代

調査時点での 1980s 世代は、全員が仕事をしており、フルタイムとパートタイムが各 3 名であった。パートタイムで働く 3 名のうち、大学教員である 80-3 は、数年前まで国内外の大学でフルタイムの研究者として働いており、「(そのときは) 週に 50 時間ぐらいは働いていた」と言っていた。同じく博士候補生の 80-6 は、調査時に第 2 子の育児休業が終了し新しい職業キャリアに就いたばかりであった。以前はフルタイムで看護師や研究員として働いていた。80-3 も 80-6 も、職業キャリアの変更にともない働き方も変えていた。このようなケースは、同じく女性の調査対象者である 80-2 でも確認できた。一方、男性対象者の 80-4 と 80-5 では、職業キャリアの変更はあるものの働き方はフルタイムのままであった。今回の調査対象者がたまたま、職業キャリアの描き方に性差がみられただけかもしれない。しかしながら、デンマークにおいても人々の潜在意識に「男性＝稼得者、女性＝家庭でのケア従事者」という規範が残っており、それが働き方の選択に現れている可能性もある。

子どもがいたのは 3 名で、子育てはカップルが協力しながら行っている。カップル間での家事と子育ての分担割合を尋ねると、80-2 と 80-5 は「ほぼ半々」、80-6 は、「自分 6.5、夫 3.5」とやや調査対象者に偏っていると評価した。カップル以外の人からの実践的な子育て支援の有無を尋ねたところ、調査時点で子どもが 8 歳になる 80-2 は過去を振り返り、「あまり支援の必要を感じるものがなく、たいがいのことは夫と二人でなんとかなった」と語った。それでもどうしても支援が必要なときにのみ実親や義親にお願いしたと言う。80-5 は家事と子育ての分担について、正確には「妻 4.5、自分 4.5、実両親 1.0」だと言う。80-6 の妹も、オーフス市郊外に住む両親を頼って、たまに手伝いに来てもらっている。

1980s 世代は、保育施設や職場の休業制度を活用しながら、カップルが協力して、仕事への責任と家事・子育てへの責任を果たそうとしている。その両立は、カップル二人でも達成可能であるが、容易に移動ができる範囲に実親あるいは義両親がいるということは、「二人稼ぎ手、二人ケアラーモデル」(Ellingsæter & Leira 2006) と称される現代のデンマーク社会においても、強力な支援になりうるということが推察できる。

#### 4.2 介護に対する意識

介護の経験があると答えたのは、アルバイトとして障害を持つ男性の介護に携わった 1 名 (80-2) のみであった。要介護状態となった祖父母の介護生活を間近で見っていたのは 2 名 (80-3、80-4) で、どちらのケースも調査対象者は介護生活には関与しておらず、要介護者の子どもである実親が、祖父母の生活の支援をしていた。このように 1980s 世代は、身近に介護を必要とする人がまだいないか、いたとしても実際に介護に関与した経験を持つ人は少ない。そのため聞き取り調査で語られたことは彼らの理想であったり、希望であったりすることに注意が必要である。「高福祉国家」といっても子育てについては、子どもに対する実親の養育責任が明確に残っているのに対して、介護や介助は福祉領域とみなされ、家族ではなく国家責任で行われる (Koch-Nielsen 1996)。このような背景を持つ社会

において、比較的若い世代は老親介護や自分自身の介護をどのように考えているのだろうか。

#### 4.2.1 要介護の親へのかかわり方

親に介護が必要となったときに「自分がしてあげたいこと」は、「そばにいること」「話し相手になること」（いずれも 80-4）や、「食事の準備や掃除といった家事の手伝い」（80-5）であった。これらは 3.6.1 で 1950s 世代が親の介護が必要になったときに実際に行ったことと同じ「情緒的支援」や「生活支援」であった。一方、「自分がしてあげたいこと」として「身体的な介護以外で親が望むこと」（80-3）と言う語りが示すように、「身体介護はしない」とはっきりと述べる調査対象者もいた。このように入浴やトイレの世話等直接的な身体介護は、「国や自治体にまかせること」（80-5）、すなわち「自分はしたくないこと」として挙げられた。

#### 4.2.2 自分自身が要介護者になった場合の希望

今回の調査対象者は全員が、自分自身に介護が必要となったときに身体介護を子どもに望んでいなかった。子どもだけでなく「家族に望まない」（80-2）、「妻にも望まない」（80-4）。家族ではなく国家や自治体にしてもらうことを望み、必要であれば、個人的に専門の介護士や看護師を雇うことを考えている調査対象者もいた（80-3）。

80-3 は、子どもを持たないライフスタイルを選択した。下記の語りの引用では、インタビュアーが 80-3 へ、子どもがいないと老後が寂しいものにならないかと尋ねている。情緒面についての質問であったが、80-3 は、デンマークでは子どもが老後の保険とはならないと答えている。すなわちデンマークでは、親自身も社会も子どもが親の介護をすることを期待してはいないし、子どももそれを期待されることはないということである。老後の生活や介護を家族に頼りがちな日本と、そうではないデンマークの違いがここからもうかがい知ることができる。

インタビュアーA：子どもはこれから持たないっていう選択したときに、自分が年を取ってからのことを考えて、子どもがいないと困るとか、寂しいとか、そういうことは考えませんでしたか？

80-3：考えました。たくさん考えました。でもやっぱりデンマークの文化は、子どもがいることは保険にはならないんです。

インタビュアーB：保険にはならないんですね。

インタビュアーA：（子どもは老後の）保険ですものね、日本は。いろいろ考えたけど、（デンマークでは子どもが）いたからといって保険にはならないから、やっぱり自分たちの生活スタイルを優先して、そう（＝子どもを持たないこと）いうふうに決めたっていうことなんですね。

80-3：そうです。

#### 4.3 「家族」の多様性

今回の調査対象者はわずか 6 名である。しかし彼らの生殖家族に注目すると、この 6 ケースからもデンマーク社会の多様性がみえてくる。

パートナー形態は、シングルが 1 名、「非法律婚」が 1 名で、4 名は婚姻関係にあった。

シングルの 80-1 は、交際相手と同居しており、これからも永続的な関係を希望しているが、婚姻関係のある「法律婚」という形は望んでいない。80-2 は、調査時点でパートナーと同居を開始して 17 年が経ち、パートナーとの間に 8 歳の子どもがいる。しかし、パートナー関係は婚姻関係にはない「非法律婚」を採っている。彼女にとって婚姻関係にある「法律婚」は制度的なものであり、互いを保障するためのものであるという認識である。将来的には法律婚へ移行したいが、結婚式を挙げるにはお金がかかるため、まだ先になるだろうと思っている。

次に親子関係をみていく。パートナーと婚姻関係にある 2 名と「非法律婚」の 80-2 には、1~2 名の子どもがいた。パートナーと婚姻関係にあるものの、夫との話し合いの上で子どもを持たないという選択をしたのは、前項の最後で取り挙げた 80-3 であった。彼女が理由として語ったのは、夫も自分も日々忙しい生活を送っており、子どもがいるということは自分たちの生活に合わないからだと言う。

子どもがいる 3 名のうち、生殖医療技術を使って子どもを設けたのは「非法律婚」の 80-2 であった。別の調査対象者（80-3）によれば、3 回までは無料でドナーの提供を受けることができる。生殖医療技術を用いて子どもを産み、育てているシングル女性が 80-3 の周囲におり、このような手段で子どもを持つことは、デンマークではもはや珍しいことではなくなっているという。

デンマークに限らず北欧社会には「ライフスタイルの中立性の原則」という考え方が浸透している。どのような生き方をするか、誰とどのような家族を持つのかということは個人やカップルが決めることであり、家族や社会が介入してはいけないという考え方である。この考えにもとづき、国としても、個人の自己責任論に転嫁するのではなく、誰かが不利を被ることがないように社会制度を整えていった。本研究では扱わなかったが、同性同士のカップルに対しても同様のことが当てはまり、この四半世紀の間に彼らの社会での承認や権利が一気に拡大していった。

## 5. まとめ

高負担・高福祉を特徴とする福祉国家の形成は、デンマーク社会に生きる人々に、性別にかかわらず仕事を継続していくというライフコースをもたらした。このことは女性のライフコースにより明確に現れていた。1950s 世代の母親は、専業主婦または夫の家業手伝いとして補助的な仕事をしている程度であった。1950s 世代になると女性も賃金労働をするようになった。調査対象者は、一時的にパートタイムにしたり労働市場から離れたりしながら、多くが 60 歳前後まで仕事を続けていた。1980s 世代は、フルタイムで仕事を続ける世代である。もちろん子育て期間中や職業キャリアの間にパートタイムでの働き方を選ぶ者もいるが、「仕事をしない」という選択肢はこの世代からは聞かれなかった。

女性が家庭の外で賃金労働をすることは、それまで女性が担ってきた家庭でのケア活動（家事や家族の世話）を、女性に代わって誰が行うのか、という問題が生じる。専業主婦がいた 1950s 世代の親世代には、主婦である母親が主に家庭でのケア活動に携わっていた。実親や義親が健在で近居である場合には、彼らから支援を得るケースもあった。女性も家庭の外で仕事を始めた 1950s 世代は、夫が第 1 の支援者として挙がるようになった。すなわちこの世代を前後して、デンマークでは、家事や子育てにかかわる男性の姿が確認

できるようになったと言える。とはいえ、多くの場合、夫の家事・子育てへの関与は「妻のサポート」レベルであり、実親や義親からの支援が受けられる場合には、彼らもまた強力な支援者であった。1980s世代になると、カップルで協力しながら仕事と家庭でのケア活動をこなしている。デンマーク社会全体をみれば、家事や子育てが妻に偏りがちとなる傾向はあるものの、「カップルが二人で行っている」という認識は、今回の調査対象者が評するカップル間での家事・育児の分担比率からもみてとれるだろう。

2つの世代で介護に対する考え方や態度に違いはみられなかった。どちらの世代も入浴やトイレの世話のような身体的な介護は、子どもにもパートナーにも「して欲しい」とは望まないし、自分自身も親に対して「してあげたい」とは思っていない。そのような行為は、国家や自治体から派遣される専門家にまかせ、十分でない判断すれば私費でサービスを追加することもありうる。一方、要介護者の生活面での実践的な支援や情緒的支援は「してあげたい」と考えている。どの行為を家族が「する（したい）」か、「しない（したくない）」かの明確な境界線が存在することが示唆される。

今回、生き方の多様性として「法律婚をしない生き方」、「子どもを持たない生き方」、「生殖医療技術を用いて子どもを持つこと」、「同性婚というカップル形態」への態度を尋ねた。項目による差はあるものの、どちらの世代も総じて寛容な態度を示していた。これら4つの項目のうち、1950s世代では実際に「法律婚をしない生き方」を選んだ調査対象者がおり、1980s世代になると「同性婚というカップル形態」を除く3つの生き方が実践されていた。世代が若くなるほど、態度だけでなく実態面においても生き方の多様性がより現れてくると言えそうである。

多様な性を尊重する点においては受け入れられつつあるのに対して、狭義のジェンダー平等、すなわち男女の性差という点ではどうだろうか。既に1950s世代から女性も賃金労働をして家計を支え、男性も家庭内のケア活動にかかわる姿が確認できたという点では、デンマーク社会では、もはや性別役割分業は実態として消滅したと言えるだろう。しかしながら、例えば今回の調査結果でも女性対象者の職業キャリアをたどると、パートタイムとしての働き方が一時的にせよ確認された。これは男性の調査対象者にはみられないことである。もちろん数名の聞き取り調査結果を一般論として述べることはできないが、人々の潜在意識の中に性別役割分業規範が存在しているとすれば、男女の性差は今後もデンマーク社会において残り続けていくだろう。

## 謝辞

デンマーク調査の実施にあたっては、次の方々にお力添えをいただきました。Anemone Platz 先生（オーフス大学准教授）、永井暁子先生（日本女子大学教授）、富岡次郎先生（オーフス大学准教授）、Raymond Yamamoto 先生（オーフス大学准教授）、Annette Skovsted Hansen 先生（オーフス大学准教授）Jacob Hedegaards さん（オーフス大学 Phd. キャンディディト）、Bojaya Bojana Yamamoto-Pavlasevic さん、Manami Kunitomo Petersen さん、Laura Brath Høeg Hørning さん、Hanne Rask Larsen さん、林眞理子さん、Maumi Kita Thiele さん、辻内梓佐さん。この場をお借りして心より深謝申し上げます。

## 注

- 1) 実際は、デンマークは他の北欧諸国と比べると、ジェンダー平等の達成が遅れていると言われている。例えば毎年世界経済フォーラムが発表するジェンダー平等指標のランキングでは、2023年に対象となった146か国中、アイスランド（1位）、ノルウェー（2位）、フィンランド（3位）、スウェーデン（5位）は最上位に位置しているのに対し、デンマークは23位であった（日本は125位）。ジェンダー平等の推進は、デンマーク社会でも課題となっている（World Economic Forum 2023）。
- 2) 同性カップルにも異性愛の婚姻カップルに準じた法的な保障を認める「登録パートナーシップ制度」がデンマークで導入されたのは1989年であり、これは世界でもっとも早かった。2012年には教会での婚姻が認められた。
- 3) 1987年の高齢者住宅法の制定と1988年の社会支援法の一部改正により、介護付高齢者施設（プライエム）の新規供給は停止され、プライエムに変わり介護型の高齢者住宅（plejebolig）が建設されるようになった（石黒 2019; 225）。

## 文献

Ellingsæter, A. L. and Leira Arnlaug eds., *Politicising Parenthood in Scandinavia*, Bristol, The Policy Press, 2006.

イエスタ・エスピン-アンデルセン, 2001, 『福祉資本主義の三つの世界 比較福祉国家の理論と動態』（岡沢憲英・宮本太郎共訳）ミネルヴァ書房.

石黒暢, 2019, 「高齢者介護 -変容するケアのパースペクティブ」 斎藤弥生他編『新世界の社会福祉3 北欧』旬報社: 221-246.

Koch-Nielsen, I., *Family Obligations in Denmark*, The Danish National Institute of Social Research, 1996.

宮坂靖子, 2024, 「デンマーク地方都市における向シニア世代のライフコースと家族ネットワーク-オーフス市におけるインタビュー調査に基づいて」『消費生活科学研究所紀要』28 (1) : 1-12.

佐藤桃子, 2019, 「子ども -子どもの権利を中心とした子ども家庭支援の発展」 斎藤弥生他編『新世界の社会福祉3 北欧』旬報社: 247-269.

澤渡夏代ブランド・小島ブンゴード孝子, 2020, 『デンマークの女性が輝いているわけ-幸福先進国の社会づくり』大月書店.

World Economic Forum, 2023, *Global Gender Gap Report 2023, INSIGHT REPORT JUNE 2023*, Geneva.

## 第6章 トルコ

### 一事例に見る 1950 年代・1980 年代生まれの「成人期への移行」

安藤 究, Tolga Özşen, Melek Çelik

#### 1. はじめに

本稿では、『ライフコースと世代』の再編を考えるための基礎資料として、トルコの 1950 年代・1980 年代生まれの人々の「成人期への移行」に関する聞き取り調査の概要を報告する。成人期への移行に焦点をあてるのは、この移行過程において個人のライフコース上の家族・教育・職業領域で大きな変化が生じること、またその移行のあり方に対象者が埋め込まれた (embedded) 社会的・歴史的環境も反映されると考えられることによる。

成人期への移行過程では、家族領域の軌道 (trajectory)<sup>(1)</sup> では定位家族との関係の変化や、典型的・長期的にはケアにおける「受け手から送り手へ」につながるような立場の変化が生じるだろう。近代化の進行につれて、義務教育や高等教育を終えて「教育から職業へ」という移行が生じることも考えられる。教育領域の軌道は、定位家族の状況や地域性はもちろんのこと、国レベルでの教育システムの影響も受ける。職業領域の軌道の展開は、それまでの家族領域の軌道や当該社会の人口構造や経済環境などの歴史的文脈にも左右される (Elder 1976; Easterlin 1987)。

本調査は事例調査であり、大量に集積された個人レベルのデータから傾向を析出できるわけではない。それ故インフォーマントの離家・教育終了・初職開始・結婚という出来事を経験した年齢及びそのタイミングに関する主観的認識を、「社会的道すじ」(social pathways) という観点から検討することで、上述の 2 つの出生コーホートにおける成人期への移行と社会的・歴史的環境の影響を考えたい。また、家族領域に関しては、離家のタイミングやその契機とともに、ケアにかかわる態度やその変化の認識も確認する。

「社会的道すじ」とは、「ある制度・組織内の、また、それらの間の社会的ポジションの連続」(Elder & Shanahan 2006: 680) を指し、「歴史的に形成され、また、社会的制度によって構造化される」(Elder et al. 2003: 8)。「社会的道すじ」は教育・労働・家族等の領域で年齢分化をとまって制度化され、そのために人々の人生の方向性も構造化する。ただし、年齢規範を初めとした社会的制御と個々のライフコースにおける選択 (agency) の間には「緩やかな結合」(loose coupling) という性格があり、年齢分化した「社会的道すじ」と実際の人生の展開の間には潜在的にギャップもある。

議論を進めるにあたって、まず、トルコの 1950 年代出生コーホートと 1980 年代出生コーホートが埋め込まれてきた社会的・歴史的環境を、より長期的なトルコの歴史的時間のなかで、上述の本稿の分析方針に依って特に教育・経済領域のベクトルを意識しながらごく簡単に確認しておく。

非西洋社会における近代化・西洋化としては、周知の通り、オスマン帝国では東アジアや東南アジアよりも早い歴史的タイミングでそれが生じた<sup>(2)</sup>。1923 年に現在のトルコ共和国が誕生すると、アラビア文字の廃止や政教分離など、さらに徹底した西洋化が進められた。この「多民族・多宗教国家であったオスマン帝国から、トルコ民族主義と世俗主義を国是と

するトルコ共和国への転換」(小笠原 2019: 2) は、「トルコ国民の創成」を軸として展開された(小笠原 2019)。

それ故トルコ共和国成立後の経済は、エタティズム(有田 1985)という国家主導の性格となり、トルコ民族資本家の育成が目指された(比佐 2005)。近代化の過程で文字ないし表記体系が問題となったのは東アジアも同様だが、オスマン帝国の宗教的なアイデンティティと密接に結びついていたアラビア文字の廃止は、『トルコ人』としてのナショナル・アイデンティティ形成のためのきわめて重要な政治的選択(穠山 2019: 51)だった。トルコの政教分離は国家が宗教を管理するという世俗主義であり(Kuru 2010)、公の場での宗教の表出を禁止する厳格な性格をもっていた<sup>(3)</sup>。

トルコの経済発展と日本企業との関係をまとめた論考によれば(川邊 2015)、第2次世界大戦後エタティズムは成長したトルコ人資本家の活動の制約となり、計画経済から経済の自由化へと転換していく。それとともに、NATO加盟など政治的・経済的・軍事的に西側世界に接近する。

しかし経済の自由化の過程は単線的ではなく、政治的・社会的混乱のなかで1960年の軍事クーデタ後に成立した連立政権のもとで、再び計画経済に転換して輸入代替工業化がすすめられた。その後1970年代に国際収支が悪化し、IMFの意向に沿う形で1980年に発表された経済プログラムでは、再度経済の自由化への転換が示された。このプログラムの発表のすぐ後に起きた軍事クーデタでも経済プログラムの方針は修正されず、1987年のEU加盟申請から1996年EU関税同盟参加の間に本格的に自由化が進められた。21世紀初頭でも基本的には同じベクトルで、自動車産業など、トルコはEU輸出生産基地の役割を果たすようになった(川邊 2015)。

トルコの義務教育について概観した研究からは(丸山 2006; チャクル 2023)、20世紀後半のトルコの教育行政の1つの特徴は、8年間の義務教育の制度をトルコ社会全体に定着させる努力と言えよう。1923年に現在のトルコ共和国が誕生してからは世俗主義にもとづく公教育の整備が進められ、1961年の「初等教育及び教育法第222条」で義務教育が8年間とされた。しかし最初の5年間の小学校課程は実施されたが、残りの3年間の課程はほとんど実施されなかった。その後1973年の「国家教育基本法第1739条」、1983年のその改訂(「国家教育基本法第2842条」)、そして1997年の「基礎教育法第4306条」で、ようやく実効性のある8年間の義務教育の制度化が可能となった<sup>(4)</sup>。

こうした度重なる教育改革が行われてきたことは、8年間の義務教育が20世紀後半のトルコ社会で均一的には定着していなかったことを示す(丸山 2006)。8年間の義務教育制度に対する強い抵抗があったということだが、その抵抗は主に農村部と保守的な宗教勢力から受けてきた(丸山 2006; チャクル 2023)。上述の教育改革プログラムは世俗主義を堅持しようとする軍事クーデタを契機とした社会改革で進められており(丸山 2006)、教育改革は世俗主義維持の機能を有していた(丸山 2006)。

## 2. データと方法

調査対象者は機縁法によって選ばれ、1950年代生まれの男性3人と女性3人、1980年代生まれの男性3人と女性3人の計12人である。聞き取り調査はオンライン上で行われた。オンラインでの調査となったため、一人あたり10-15分であった。また、回答者の負担を減

らすために半構造化の調査票を用いて行われた。調査票はプロジェクトの共通部分以外の質問項目はライフコース研究の基本的視座にもとづいて日本側で準備され、それらの質問がトルコ社会で意味をなすかどうかをトルコ側で検討し、両サイドの協議のもとに適宜修正の後にトルコ語に翻訳された。

基本的属性に関しては、性別、年齢、生まれた地域、育った地域（義務教育終了時点）、調査時点での同居者、就業上の地位及び職種、調査対象者の父親・母親の年齢と健康状態、調査対象者のきょうだいと年齢を尋ねた。また、本プロジェクト全体にかかわる関心として、生まれた場所（自宅か病院などの施設か）についても尋ねた。

成人期への移行の過程に関しては、共通して、多くの人々が経験する教育終了・離家・就職・結婚という出来事（イベント）の出来事が生じた年齢と、そのタイミングに関する主観的認識を当該調査対象者の「同世代」（同じような出生コーホート）との比較で尋ねた（「on（適時）/off（早い、もしくは遅い）」）。ある出来事を off timing で経験している場合には、その理由も尋ねた（理由に関しては自由回答）。具体的には、各出来事を経験した年齢を尋ねた後に、「だいたい、同世代と同じ年齢」「同世代より、若い年齢（早いタイミング）及びその理由」「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）及びその理由」という選択肢を用意した。

各出来事で共通して尋ねた項目に加えて、離家については親元を離れた理由も、「進学のため」「就職のため」「結婚のため」「兵役のため」「その他（具体的に）」という選択肢を用意して尋ねた。

就職に関しては、「最初に就職した際の仕事」（自由回答）と、転職経験の有無と調査時点までの回数も尋ねた。教育に関しては、（調査時点で）最終的に卒業した学校を尋ねた。結婚に関しては、配偶者とどのように知り合ったかも尋ねた。なお配偶者の出生地域と義務教育を終えた地域、及び生まれた場所についても尋ねた。

他の価値意識については、性別役割分業・ケア（高齢の親の介護）・（家族の）個人化に関する質問を用意した。まず性別役割分業意識については、2つの「意見」に対する回答者の考えを尋ねた。具体的には、1つは「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもちたない方がよい」という意見に対する考えを、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の選択肢で回答してもらった。もう1つは「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見で、同じく4つの選択肢を用意した。

ケア（高齢の親の介護）に関しては、「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対する回答者の考えを尋ねた。回答の選択肢としては、やはり「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4つを用意した。

（家族の）個人化については、「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という意見に対して、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の選択肢を用意した。

また、上記の4つの価値意識に関する質問では、回答者の考えが、成人期に移行する頃と調査時点で変化が生じたかどうかも尋ねた（「変わらない」「少し変わった」「大きく変わった」の3つの選択肢を用意した）。

最後に、トルコ社会の空間的・歴史的な影響に関する回答者の主観的認識を把握するため

に、「これまでの人生を振り返ってみたとき、直接もしくは間接的に、あなたの人生に大きな影響を与えた天災や社会的・歴史的出来事」があるかどうかを尋ねた。ある場合には、「何歳ぐらいの時に起きた、どのような出来事であったか」も尋ねた。

### 3. 調査結果

本節では、1950年代生まれの男性と女性、及び1980年代生まれの男性と女性の調査結果の概要を述べる。

#### 3.1 1950年代生まれの男性

##### 【ケース1】

【ケース1】の男性は1954年生まれで、調査時点では69歳だった。政府機関の電気技師をしていた父と専業主婦だった母のもとに、トルコ北東部の地域で、5人兄弟の上から3番目の子どもとして生まれた。2番目の兄は53歳で亡くなっている（生きていれば、調査時点で70歳）。現在存命のきょうだいは、調査時点で72歳、66歳、53歳である。生まれたのは自宅ではなく、産院とのことだった。ただし、【ケース1】の配偶者（【ケース4】の女性）は、夫である【ケース1】は自宅で生まれたとコメントしている。調査時点では回答者の父親と母親は亡くなっており、配偶者及び娘と同居している。

その後生まれた地域から西に600km程離れた地域（トルコ中部）に転居し、さらに今度は東に400km程離れた地域（トルコ東部）に移動して、小学校・中学校時代はそこで過ごした。その後北の黒海沿岸地域に転居して、3年間の通信制カレッジの教育もその地で受けた。

親元を初めて離れたのは24歳で、1978年に通信制のカレッジを終えて、すぐに中学校の国語の教師として働き始めた時であった。ただし、勤務先は通信制のカレッジで勉強していたのと同じ地域にあった。中学校は30人の生徒という規模で、「校舎を修理する作業も自分でした」とのことである。調査時点ではすでに定年退職していたが、退職するまで転職の経験はない。

結婚は25歳で、相手は1956年生まれで2歳年下となる。配偶者の父親が軍人で、6歳から調査対象者が小学校・中学校時代を過ごした地域に住んでいた。知り合ったきっかけとしては、「もともと親戚」ということであった。配偶者の職業は同じく教員で、教科は社会科だった。

以上の当該調査対象者の離家、教育終了、初職就職、結婚のそれぞれのタイミングについては、「だいたい、同世代と同じ年齢」という認識である。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思わない」という回答だった。また「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては、「まあそう思う」ということだった。

ケア（高齢の親の介護）については、「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては「そう思う」と回答され、「親の面倒をみるならヘルパーのサポートは必要。もちろん親の老後に面倒を見るのが我々の責任です」とコメントされた。「トルコ人はこの面でかなり敏感」とのことと、「現在は親を老人ホームに預けたりもするけど、賛成できない。ただ、それが仕方がない状況もある」とも述べ

られた。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という(家族の)個人化にかかわる意見に対しては、「そう思わない」という選択肢が選ばれた。「我々は自分の生きるライフスタイルを決めるべき」「家族から遠くで暮らすと、いろいろ家族に合わせられないようなライフスタイルがでてくるから、(家族に)合わせるべきではない。みんな、それぞれの人生ですから」ともコメントされた。

これら 4 つの価値意識に関する考えは、すべて、調査対象者が成人期に移行するときと「変わっていない」と回答された。

歴史的な事件の影響に関しては、「自然災害の経験はない」「湾岸戦争と地震被害者のことは悲しかった」という回答で、【ケース 1】のライフコースに対して直接的な影響があった歴史的な事件は認識されていなかった。

### 【ケース 2】

ケース 2 の男性は 1956 年生まれで、調査時点では 67 歳だった。トルコ東部の国境近くの地域で生まれた。自営業の父と専業主婦の母のもと、7 人きょうだいの一番上として生まれた。他のきょうだいは、調査時点で、順に 64 歳、57 歳、54 歳、50 歳、47 歳、44 歳である。生まれたのは自宅ということだった。回答者の父親と母親はすでに亡くなっており、現在は配偶者と二人暮らしである。

7 歳でトルコ西岸地域に転居し、それ以来そこで生活をしてきた。小学校も転居した地域で通い、小学校が最終的に卒業した学校と回答されている。ただし、「最後に学校を卒業した年齢」としては 14 歳という年齢が回答され、そのタイミングについては、「だいたい同世代と同じ年齢」と認識されている。

親元を離れて生活を始めたのは 13 歳で、「出稼ぎ」のためということであった。この離家のタイミングについては、「だいたい同世代と同じ年齢」と回答されている。

初職の就職年齢として回答されたのは 15 歳で、7 歳から調査時点まで生活している都市で、飲食店の給仕として働いてきた。転職経験は「ない」という回答だった。就職したタイミングについては、「だいたい同世代と同じ年齢」と認識されている。

結婚は 22 歳で、配偶者は 1 つ年下である。配偶者は、【ケース 2】が働いていた街で生まれ育ち、仲人を介して知り合った。なお配偶者が生まれたのも、病院ではなく自宅であった。回答者の結婚のタイミングとしては「同世代より、上の年齢(遅いタイミング)」と認識されている。理由としては、「兵役に行ったから」ということがコメントされた。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」という回答だった。この考えに関しては、回答者が成人期に移行するときと「大きく変わった」ということである。

「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては、「そう思う」という回答で、この点についても、成人期に移行するときと較べて「大きく変わった」ということだった。

ケア(高齢の親の介護)については、「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては「あまりそう思わない」という回答だ

った。この点については、「今はみんな働くから、親の面倒はみられない。ヘルパーを雇った方がいいよ。自分は親と姑たちが近所だったからサポートしてもらい、ヘルパーを雇った」と補足のコメントがあった。

親の介護に対する考え方は、回答者が成人期に移行するときと「大きく変わった」ということである。「親が年を取ったら子どもがその面倒を見ると言われていたけど、我々はヘルパーを雇うことを選択した」というコメントとともに、「今は孫の面倒を見るお祖父さん・お祖母さんも減った。我々は孫の面倒をみています」とも付け加えられた。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という(家族の)個人化に関しては、「そう思わない」という選択肢が選ばれた。この回答者の考え方は、成人期に移行するときと「変わっていない」ということである。

歴史的な事件の影響に関しては、「あまりなかった、日常生活だった」とコメントされた。ただ、「思えば、1980年にクーデタが起きたのが結婚式を挙げる直前だったから、(クーデタによる)外出禁止令が取り消しになってから式をあげた」とも付け加えられた。

### 【ケース3】

【ケース3】の男性は1953年に生まれ、調査時点では70歳だった。トルコ西岸の県の村で、農業を営む父と母のもとに、5人きょうだいの上から2番目として誕生した(男子としては一番上)。生まれたのは病院等の施設ではなく、自宅ということだった。回答者の父親は亡くなっていたが、母親は「100歳です。元気です」とのことである。その母親は、「妹が面倒をみている」ため、調査時点では夫婦二人で暮らしていた。

小学校は生まれた村で通ったが、村に中学校がなかったので、(現在では)車で1時間ほど東にいった町に転居してから中学校に通い始めた。親元を離れたのは18歳で、就職のためということだった。親元を離れたタイミングは、「だいたい同世代と同じ年齢」と認識されていた。

初職は、ジャーミイ(camii)の僧侶であった。仕事をしながら大学で勉強をして卒業する。卒業時の年齢は23歳で、この年齢は、最終的な学校を卒業するタイミングとしては「同世代より上の年齢」と認識されていた。その理由としては、上述のように、小学校に通った地域に中学校がなく、転居して中学に通えるようになるまで待っていたからとコメントされた。転職は1回で、小学校の教師となって定年退職を迎えた。

結婚は23歳の時で、仲人の紹介によって知り合った相手は1歳年下であった。配偶者は回答者と同じ地域で、自宅で生まれた。配偶者は結婚後専業主婦であったが、26歳のときに「スーパーマーケット」を始めたとのことである。ただし、日本語の「スーパーマーケット」という言葉が惹起するイメージと、その規模が異なっている可能性には留意する必要がある。例えば現在のトルコの代表的な小売業者である Migros Turk (トルコ・ミグロ) は、トルコでの事業展開の初期には、(ミグロ設立の地スイスと同様に)小さなトラックでの移動販売を行っていた。

結婚した年齢(23歳)は、「同世代より、上の年齢(遅いタイミング)」という認識であり、その理由としては、「彼女の親が納得するまで待ったから」とコメントされた。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思わない」という選

択肢が選ばれた。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては、「そう思う」という回答だった。

ケア（高齢の親の介護）については、「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては「そう思う」という回答であり、「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化に関しては、「そう思わない」という選択肢が選ばれた。

以上の価値規範意識にかかわる考え方は、すべて、成人期に移行するときと「変わっていない」ということである。

歴史的な事件の影響に関しては、そうした影響は「あまりない」という認識だった。

### 3.2 1950年代生まれの女性

#### 【ケース4】

【ケース4】の女性は1956年生まれで、調査時点で66歳だった。【ケース1】の配偶者である。トルコ南部の地中海に面した地域で、3人きょうだいの一番上の子どもとして生まれた。下は調査時点で65歳の弟と、56歳の弟である。生まれたのは自宅だった。調査時点では回答者の父親は亡くなっていたが、母親は87歳で、「自分のことは自分でできる、元気です」とコメントされた。回答者は、調査時点では夫と子どもと一緒に暮らしている。

6歳からは、父親が軍人であったためトルコ東部の都市に転居して（その都市は軍事的に重要な位置を占めていた）、結婚するまでそこで過ごした。最後に卒業した学校である大学も、そこで通った。大学を卒業したのは22歳で、そのタイミングは、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

就職したのは22歳で（1978年）、大学を卒業して社会科の教員となった。1年勤務したあと、23歳で結婚する。この結婚した年齢も、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されていた。結婚後も社会科の教員は定年まで続けた。

親元を初めて離れたのはこの結婚によってであり、離家のタイミングとしては、やはり「だいたい、同世代と同じ年齢」と捉えられていた。【ケース1】の記述箇所ですべて述べたように、配偶者とは親戚関係にあったが、結婚は「自分たちで決めた」とのことである。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思わない」という回答であり、この点に関して、成人期への移行の頃から考え方は変わっていないとされている。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「そう思う」という回答で、このような考え方も成人期への移行期から変わっていないという認識だった。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「まあそう思う」という選択肢が選ばれ、この点に関しては、成人期への移行の頃と「大きく変わった」ということである。「義理の親は、6年間ずっと泊りのヘルパーと一緒に暮らした。ヘルパーの給料は子どもたちがみんなまで払った。仕事する人は面倒見る余裕がないから、老人ホームに頼らざるを得ない・・・悲しいけど仕方がない」とコメントされた。

（家族の）個人化にかかわる、「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という意見に対して、「そう思わない」ということだった。この回答

者の考え方は、成人期に移行するときと「変わっていない」ということである

歴史的な事件の影響に関しては、「1980年のクーデタと非常事態宣言のあとすべてが難しくなった」と受け止められていた。(教員という職業であったので、当該クーデタ以降に)「読書率が低くなった」と認識していることも挙げられた。

#### 【ケース 5】

【ケース 5】の女性は、1957 年生まれで、調査時点で 67 歳だった。上述の【ケース 2】の配偶者である。トルコ西岸の地域で、農業を営む父親と母のもとで、5 人きょうだいの下から 2 番目の子どもとして生まれた(母親の職業に関しては、「主婦」とコメントされている)。1948 年生まれの一番上の兄は、調査時点ですでに亡くなっていた。存命の回答者の上のきょうだいは 1951 年生まれと 1955 年生まれで、下は 1964 年生まれである。回答者が生まれたのは自宅だった。生まれてからインタビュー時点まで、生まれ育った地域で生活してきた。調査時点で母親は亡くなっていたが、父親は 96 歳で「病気が多い」とのことである。インタビュー時には、定年退職をした配偶者との二人暮らしである。

最後に卒業した学校は小学校で、12 歳の時だった。このタイミングは、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。夫である【ケース 2】の場合と同様に、この「同じ年齢」という認識に関しては、最終的に学校を卒業する年齢に関してではなく、小学校を卒業した年齢が、他の同世代と同じような年齢という意味である可能性は考えておく必要がある。

親元を初めて離れたのは結婚によってであり、【ケース 5】が 21 歳の時だった。離家のタイミングについては「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

1 つ年上の配偶者とは、仲人による紹介で知り合った。結婚したのは 21 歳で、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。配偶者はトルコ東部の国境近くの地域で、自宅で生まれている。

就職に関しては、「主婦」であることから、「仕事をしたことはない」と述べられた。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」ということだった。この点については、「子どもたちがかわいそうだから働かない方がいい」とコメントされている。また、この点に関しては、成人期への移行の頃から考え方は変わっていないとされた。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「そう思う」という回答で、成人期への移行期からこの考え方は変わっていないと回答された。

ケア(高齢の親の介護)に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「まあそう思う」と回答された。「ヘルパーを雇った方がいい」ともコメントされており、介護施設ではなく自宅の方が望ましいという認識であると思われる。この点についても、考え方としては成人期への移行の頃と同じであると回答された。

(家族の)個人化にかかわる、「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という意見に対して、「そう思わない」ということだった。このように考える理由としては、「親よりも夫の意見の方が大事」であることが挙げられた。

この回答者の考え方は、成人期に移行するときと「変わっていない」ということである。

歴史的な事件の影響に関しては、「悲しいことが多いね」とのみ述べられた。

#### 【ケース 6】

【ケース 6】の女性は 1955 年生まれで、調査時点で 67 歳だった。夫は【ケース 3】である。トルコ西岸の県の村で、大工であり副業で養蜂もしていた父と母のもとに、2 人きょうだいの下の子どもとして生まれ、兄は調査時点で 73 歳である。生まれたのは自宅だった。回答者の父親と母親はすでに亡くなっていた。調査時点では、配偶者との二人暮らしである。

最後に卒業した学校は小学校で、12 歳の時だった。最後の学校を卒業したタイミングとしては「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答されたが、これまでの小学校が最終学校であったケースと同様に、小学校を卒業した年齢が他の同世代と同じような年齢という意味である可能性に留意する必要がある。

小学校卒業後は「家の手伝い」をしていた。家の仕事であったため、働き出したのは「同世代より、若い年齢（早いタイミング）」と位置づけられている。結婚して主婦になった後、26 歳の時に「スーパーマーケットの運営」を始めた。このことで「転職」は 1 回と認識されている。ただし、【ケース 3】の箇所でも記したように、ここでの「スーパーマーケット」は、移動販売のような小規模なものである可能性は考慮しておく必要がある。

仲人の紹介によって 2 歳年上の夫と知り合い、21 歳で結婚して専業主婦となった。配偶者は回答者と同じ地域で生まれた。配偶者も自宅で生まれている。結婚年齢に関しては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

親元を初めて離れたのは、この結婚によってであった。親元を離れたタイミングについても、「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答されている。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「あまりそう思わない」という選択肢が選ばれた。このような考え方は、成人期への移行の頃と較べると、「大きく変わった」と認識されている。若い頃の、「女性は子どもの面倒をみるべき」という考え方から変化したということである。

「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「そう思う」という回答で、成人期への移行期からこの考え方には変化がないと回答された。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「そう思う」と回答された。この考え方は、成人期への移行の頃から変化していないとも回答された。

（家族の）個人化にかかわる、「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という意見に対して、「そう思わない」ということだった。この考え方は、成人期への移行期の頃と変わっていないとのことだった。

歴史的な事件の影響に関しては、「ないです」と回答された。

### 3.3 1980 年代生まれの男性

#### 【ケース 7】

【ケース 7】の男性は 1985 年生まれで、調査時点で 38 歳だった。トルコ西岸の地域の村の生まれであるが、生まれたのはその地域の都市部の病院においてだった。農業を営む父と主婦の母親のもとで、2 人きょうだいの下の子どもとして生まれた。調査時点で【ケース 7】

の父親と母親はともに 62 歳で、「元気」ということだった。姉は調査時点で 41 歳である。親とは同居しておらず、配偶者と息子と 3 人で暮らしている。

最後に卒業した学校は中学校で、16 歳の時だった。そのタイミングについては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

就職に関しては、父親が農業を営んでいたので、「ずっと親と一緒にです。家の仕事を続けている」と回答された。そのため、「就職をした年齢」は無回答ということになった。ただし、「就職をした年齢」のタイミングとしては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答された。これは、学校教育を終えて仕事だけするようになった時点が意識されたことによると思われる。

仲人の紹介によって同年齢の妻と知り合い、24 歳で結婚した。結婚のタイミングは、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。配偶者の仕事は、調査時点では「主婦」と回答されている。

親元を初めて離れたのは、この結婚によってであった。親元を離れたタイミングについては「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」と回答された。この考え方は、成人期への移行の頃と較べて、「変わらない」と認識されている。

「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては、「そう思わない」と回答され、この点についても、成人期への移行の頃と「変わらない」とされている。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「そう思う」と回答され、やはり成人期への移行の頃から「変わらない」とされている。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という、（家族の）個人化にかかわる意見に対しては「そう思わない」と回答され、この考え方は若い頃と「変わらない」と回答された。

歴史的な事件の影響は主観的には認識されておらず、「ない」という回答だった。

#### 【ケース 8】

【ケース 8】の男性は 1985 年生まれで、調査時点で 35 歳だった。トルコ西部の地域で、靴職人の父親と専業主婦の母親のもと、3 人きょうだいの一番上の子どもとして生まれた。調査時点で弟は 27 歳、妹は 21 歳だった。生まれたのは自宅である。回答者の親に関しては、調査時点で、父親が 62 歳で母親は 53 歳だった。「元気だけど、二人とも持病がある」とのことである。

親元を離れたのは 18 歳で、進学のためである。この離家の年齢に関しては、「だいたい、同世代と同じ年齢」という認識が示された。

この進学先はカレッジ（短期大学）で、生まれ育った地域から東に 150km 弱離れたところにある。このカレッジが回答者の最後に卒業した学校となる。卒業したのは 20 歳で、そのタイミングは「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答された。

就職は 23 歳で、警備員の職についた。この初職のタイミングについても、「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答されている。初職以来 2 回の転職を経験しているが、職種としては

すべて警備職だった。

調査時点で結婚は経験していない。その理由としては、「経済的、社会的理由」とコメントされた。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」と回答されている。この考えは、成人期への移行の頃と変わらないとのことだった。

「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては、「まあそう思う」と回答されながらも、「主には男性が担うべき。夫が75%、妻が25%でいいと思う」とコメントされた。この点についても、成人期への移行期と考え方は変わっていない。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「そう思う」と回答され、やはり成人期への移行の頃と「変わらない」とのことである。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化にかかわる意見に対しては、「あまりそう思わない」と回答された。「両方とも譲ったりして、歩み寄るべき」とコメントされている。この考え方も、若い頃と変わっていない。

歴史的な事件の影響は、具体的には回答されなかった。ただ、「自然災害は2023年にありました、2月です。その後は非常用のカバンを作っておいて」「戦争は悲しいけど、自分の生活への影響はない」というコメントがあった。なお、2023年2月の自然災害とは、トルコ南東部でシリアとの国境地域で生じたマグニチュード7.8の地震を指す。

#### 【ケース9】

【ケース9】の男性は1988年生まれで、調査時点で39歳である。トルコ北西部の地域で、その地域の村で農業を営む父親と母親のもと、二人きょうだいの上の子どもとして生まれた。妹は調査時点で37歳である。父親と母親は調査時点でそれぞれ65歳と58歳で、「二人ともとても元気」とのことである。生まれた場所は病院だった。調査時点では、配偶者と息子・娘と一緒に、4人で暮らしていた。

最後に卒業した学校は中等学校で、16歳だった。そのタイミングに関しては、「だいたい、同世代」と認識されている。

親元を初めて離れたのは26歳で、「就職のため」ということである。このタイミングについては、「同世代より、若い年齢（早いタイミング）」とされている。

就職は26歳で、「同世代より、若い年齢（早いタイミング）」と回答された。中等学校を修了して親元を離れるまでは、回答者の親が農家だったので農業に従事していたと思われるが、それは「仕事」としては認識されていなかった。恐らくは、賃金労働ではないことによるだろう。初職は「ガソリンスタンドのスタッフ」で、調査時点まで2回の転職を経験している。調査時点での仕事は、「農業省の火災チーム員」とのことであった。

結婚は29歳のときであり、相手はその時26歳だった。配偶者の職業は、調査時点では「主婦」と回答されている。結婚年齢のタイミングに関しては、「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）」と認識されている。遅いタイミングでの結婚となった理由は、「彼女はまだ学生だったから、卒業を待った」とコメントされた。誰かに紹介されてという結婚ではなく、

「自分たちで」知り合って結婚したとのことである。なお結婚のタイミングについては、「祖父は14歳、祖母は13歳で結婚した」ということを言われた記憶があるとのことである。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」と回答され、その考え方は、成人期への移行の頃と考え方は変わっていないとのことである。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「そう思わない」と回答され、やはり若い頃からその考え方には変化がないとのことである。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「そう思う」という回答で、成人期への移行期からこの考え方については変わっていないとされている。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化にかかわる意見に対しては、「まあそう思う」という回答だった。この点についても、成人期への移行の頃と考え方には変化がないと回答された。

歴史的な事件の影響は、「ないです」との主観的認識だった。

### 3.4 1980年代生まれの女性

#### 【ケース10】

【ケース10】の女性は1980年生まれで、調査時点で43歳である。トルコ中央部の地域で、3人きょうだいの一番上の子どもとして生まれた。生まれた場所は病院である。調査時点で妹は41歳、弟は38歳だった。父親の職業に関しては「農業、工場労働者、商売などをやりました」ということで、母親は専業主婦だった。調査時点で父親は71歳・母親は62歳で、「持病はあるけれど、元気」とのことである。調査時には、配偶者と息子2人の4人で暮らしていた。

最後に卒業した学校は大学で、生まれ育った地域で通った。23歳で卒業して、その年齢は、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。

親元を離れたのは24歳で、就職のためだった。親元を離れたタイミングとしては、「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）」と回答された。その理由としては、「親のいるところで大学に行ったから」ということである。

就職は24歳で、そのタイミングについては、「だいたい、同世代と同じ年齢」とのことである。職種は大学の語学系の非常勤講師で、その後語学学校の秘書を経て、調査時点では外交関連の職員である（転職は2回）。

結婚は26歳の時で、結婚年齢に関しては、「だいたい、同世代と同じ年齢」とされている。相手とは「友達の紹介」で知り合った。配偶者は同い年で、トルコ南西部の地域で生まれた。場所は病院である。調査時点での配偶者の職業は、自分で経営している会社の取締役である。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思わない」と回答され、その考え方は成人期への移行の頃と変わっていないと回答された。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「まあ、そう思う」と回答され、やはり若い頃からその考え方には変化がないとのことである。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がすべきだ」という意見に対しては、「そう思う」と回答された。この考え方は、やはり、成人期への移行期から変わっていないとされた。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化にかかわる意見に対しては、「あまりそう思わない」という回答だった。この点についても、成人期への移行の頃と考え方には変化がないと回答された。

歴史的な事件の影響は、「なかったです」との主観的認識が示された。

#### 【ケース 11】

【ケース 11】の女性は 1980 年生まれで、調査時点で 43 歳である。トルコ西部の地域の村で、革靴職人の父親と専業主婦の母親のもとで、4 人きょうだいの一番下の子どもとして生まれた。生まれたのは自宅である。上は 3 人の兄で、調査時点の年齢は、順番に 50 歳、46 歳、44 歳である。父親は生涯靴職人で、70 歳で亡くなっている。母親は調査時点で 62 歳で、心臓の手術を受けたり高血圧であるが、「なんとか自分の面倒をみられる」ということである。

最後に卒業した学校は「普通高校」で、18 歳の時だった。そのタイミングとしては「だいたい、同世代と同じ年齢」という回答だった。

親元を離れたのは 24 歳で、そのタイミングに関しては、「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）」と認識されている。離家の理由は「結婚のため」だった。「24 歳も遅くないけど、その時みんな 18～20 歳の間に結婚していた。自分ももっと人生経験をしてから結婚すればよかったのと思う」とコメントされていた。

就職したのは、高校卒業後、18 歳の時である。そのタイミングとしては、「だいたい、同世代と同じ年齢」とされている。仕事内容としては、「工場で、ベッド用のシーツを縫う仕事」だった。ただし、「工場で 15 日間だけ働いたけど、父に止められて辞めた」とのことで、その後「18 歳－19 歳の間は仕事しなかった」ということである。結婚後、「子どもが 5 歳になって、2010 年から家で内職を始めた。靴づくりの皮を縫う仕事です、今もやっています」ということであり、転職は 1 回と認識された。

結婚は 24 歳の時で、仲人によって知り合った相手は当時 29 歳だった。配偶者は同じ村で生まれ、生まれた場所は自宅だった。現在、物流のトラック運転手である。先に離家の箇所で紹介したように、結婚による離家のタイミングは「少し遅い」とされ、それは周りが 18－20 歳で結婚して離家していたことによる。結婚自体のタイミングとしては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答されている。

価値意識に関しては、性別役割分業に関する「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思わない」と回答され、その考え方は成人期への移行の頃と変わっていないと回答された。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「あまりそう思わない」ということであった。この考え方は、成人期への移行の頃と較べると、「大きく変わった」ということである。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がすべきだ」という意見に対しては、「そう思う」という回答で、成人期への移行期から変わっていない。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化にかかわる意見に対しては、「そう思う」という回答だった。この点については、「親に育ててもらったのだから、それを忘れずに行動すべきです」とコメントされた。この考え方は、成人期への移行の頃と変化がないとのことである。

歴史的な事件の影響に関しては、「2023年2月の地震でたくさんの子供が亡くなった」ことがコメントされ、「他はない」ということだった。

#### 【ケース 12】

【ケース 12】の女性は 1988 年生まれで、調査時点で 35 歳である。トルコ北西部の地域の村で、農家の父親と母親のもとで、3 人きょうだいの一番下の子どもとして生まれた。生まれた場所は自宅である。調査時点で、姉は 40 歳・兄は 38 歳だった。調査時点では父親は亡くなっており、母親は 63 歳であるが「かなり病氣」であり、「母の面倒はきょうだい順番で見ることになっていて、調査時点では回答者が「全部私が面倒みている」とのことだった。そのため、一緒に暮らしているのは、配偶者と息子と姑及び回答者自身の母親ということである。

親元を離れたのは 23 歳で、「結婚のため」に離家した。離家のタイミングに関しては、「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）」と認識されている。タイミングが同世代と異なっていたのは、「結婚できる人がいなかった、理解できる人がいなかったから」とコメントされた。

就職に関しては、教育終了以前に仕事を始めており、初職開始の明瞭な年齢が意識されてはいなかった。「10 歳ころから畑で日雇いで働きました。小学校 4 年生頃、10 歳前後に、一日中農家のところで日雇いで働きました。大人と同じ手当ももらっていた」とコメントされている。このタイミングに関しては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と回答されている。働き始めるタイミングも含めて、「村はみんな果樹農家で、他の子ども達も同じように働いていた」とのことである。調査時点でも、配偶者とともに自営の農家である。

転職は「ある」とは回答されていたが、具体的な回数はなかった。「13 歳以降はトラクターを使い始めて、いろいろな農業の仕事をした」とのことであり、農業の仕事をしていたことには変わりはないが、農業で行う具体的な作業が変わったことで、「転職」と認識されているがその回数は定かではないということであると思われる。

結婚は 23 歳の時で、「友達の紹介」で知り合った相手は当時 30 歳だった。回答者自身の結婚のタイミングとしては、「だいたい、同世代と同じ年齢」と認識されている。夫も回答者と同様に自営の農家である。配偶者とは、回答者が生まれ育ったトルコの同じ地域で、別の村で生まれている。ただし、配偶者は 250km 以上北東に離れた地域の病院で生まれた（そこまで行った）。

最後に卒業した学校は普通高校で、33 歳の時である。そのタイミングは、「同世代より、上の年齢（遅いタイミング）」として認識されている。「仕事をしたかったから、通信教育で勉強した」ということで、通信教育での高校の勉強は「結婚後」であった。

価値意識に関しては、性別役割分業に関して、「夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい」という意見に対しては、「そう思う」と回答され、この考え方は、成人期への移行の頃と変わらないとのことである。「妻が仕事するならベビ

ーシッターがいるべき、子どもが小さい時に働きましたが、とても疲れました。経済的に大丈夫なら、妻は働かない方がいい」とコメントされている。「妻も、生活費を平等に分担すべきだ」という意見に対しては「そう思わない」ということで、この考え方も、成人期への移行の頃と変わっていないと回答された。

ケア（高齢の親の介護）に関する「老いた親の介護は、介護施設に親を入れるのではなく、子ども達がするべきだ」という意見に対しては、「あまりそう思わない」という回答で、成人期への移行期から変わっていない。

「自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきである」という（家族の）個人化にかかわる意見に対しては、「そう思わない」という回答だった。この点についても、成人期への移行の頃と考え方には変化がないとのことである。

歴史的な事件の影響に関しては、「戦争は昔あったようですが、我々は戦争を見ていません」とコメントされ、特に歴史的な事件の影響は意識されていない。

#### 4. 考察

調査対象者は機縁的に選ばれ数も少ないので調査結果に代表性はないが、1950年代出生コーホートと1980年代出生コーホートのインフォーマントの回答を「社会的道すじ」という観点から検討することで、今後の議論の展開のために材料を提供することはできるだろう。幸いなことに本調査のサンプルは、二つの出生コーホートともに、生まれたときのきょうだいの数という点ではそれ程偏っているわけではないことが考えられる<sup>(5)</sup>。

成人期への移行過程で、定位家族からの離脱＝離家は重要な出来事である。離家の契機に関する1950年代出生コーホートと1980年代出生コーホートの回答からは、20世紀後半のトルコ社会においてジェンダーによって異なる「社会的道すじ」があることが浮かび上がる。1950年代出生コーホートでは、男性の離家の契機はすべて「就職」という回答であり、女性の離家の契機はすべて「結婚」という回答だった。最終的に卒業した学校が大学という高学歴の【ケース4】の女性も大学には親元から通っており、その離家は結婚を契機としていた。離家の契機におけるジェンダー差は、1980年代出生コーホートでも1950年代出生コーホートと同様なパターンで存続している。

ただしこの2つの出生コーホートで、「社会的道すじ」に変化が生じている可能性にも留意しておきたい。1980年代出生コーホートでは、離家の契機として男性で「進学」という回答が現れ、女性で「就職」という回答もあった。もちろんケース数が少ないために、たまたまこのような相違が生じたということは十分考えられる。にもかかわらずここで注意したいのは、就職による離家と回答した【ケース10】の女性が、自身の離家のタイミングは「同世代よりも遅いタイミング」であったという認識を示し、その理由として「親元から大学に通ったので」とコメントしている点である。

このコメントからは、自身の離家のタイミングを評価できるような離家と教育領域の出来事の結びつきが、すなわち「(特に高等教育の)進学のために親元を離れることは当たり前」というような認識枠組みが、20世紀末から21世紀初頭にかけてのトルコ社会で一定程度自明性を帯びて定着していたことが示唆されよう。それに対して1950年代半ばに生まれた【ケース4】の女性は、1970年代にやはり親元から大学に通っていたが、親元から離れるタイミングがそれで遅れたとは認識されていなかった。

「教育から職業へ」という移行に関しては、日本の「戦後型青年期」(乾 2000)のようなパターンは明瞭ではない。「日本の戦後型青年期は、学校から(正規)雇用への移行過程で滞ることを想定しない社会システムとして定着」(乾 2006: 8)したが、前節で紹介した事例に見られるように、1950年代出生コーホートでも1980年代出生コーホートでも、「卒業と同時に就職」というパターンは規範的移行とはなっていない。

この点については、親が農業に従事していた調査対象者の回答が議論の参考となる。調査では、(アルバイトではなく)フルタイムの初職についての年齢を尋ねたが、家業が農業である回答者の場合、明瞭に「仕事を始めた」年齢を回答するのが困難であった。1950年代に農家の子どもとして生まれた【ケース5】の女性は、12歳で小学校を卒業して21歳で結婚して離家したが、学校修了後から結婚するまで家の農業にかかわったことがないとは考えにくいものの、「主婦だったので仕事はしたことがない」とコメントした。農家の家の手伝いで賃金が発生していなかったため「仕事はしたことがない」というコメントとなった可能性は考える必要はあるだろうが、他方で1980年代に農家の子どもとして生まれた【ケース12】の女性は、「仕事」を開始した年齢は明確には言及しなかったにもかかわらず、「10歳頃から畑で一日中農家のところで日雇いで働きました。大人と同じ手当もらっていた」とコメントしており、近隣もしくは地域の農家での子どもの労働が、「手伝い」という範囲を超えた、かつ貨幣による「大人」と同様な報酬も伴ったそれであった場合もある<sup>(6)</sup>。1980年代に生まれた【ケース7】の男性も、最後に卒業した学校は中学校で16歳のときと回答しているが、仕事を始めた年齢として教育終了の年齢が回答されなかっただけでなく、具体的な年齢が回答されることもなく、「ずっと親と一緒にです。家の仕事を続けている」とコメントされた。

これらのケースにおいて「仕事」を何歳から開始したかが回答しにくいのは、農作業における「手伝い」と「仕事」の境界線が、「仕事」以外の領域との関係にもとづいた、年齢分化した社会的な制度として確立されてはいなかったことによるのではなからうか。(現在の日本のように)教育と職業の軌道の関係も包含し年齢分化した「社会的道すじ」が明瞭となっている場合には、例えば農家の家に生まれ育っても、「学校を卒業した〇〇歳から本格的に農業の仕事を始めた」というように、「職業キャリア」の開始時点がライフコースの中心を占める軌道が交代する年齢と結びつけて認識される可能性はあるだろう。換言すれば、ライフコースを構成する複数の領域(例えば家族・教育・仕事などの領域)の中で発達もしくは年齢段階による中心的な位置を占める軌道が、社会の様々なグループを横断して共通して了解されているわけではないだろう、ということである。

トルコ社会全体で、成人期の移行にかかわる標準的で年齢分化した「社会的道すじ」が明瞭には共有・内面化されていないとすれば、それは「はじめに」で概観したように、年齢別に編成された義務教育の学校システムが、トルコ全土に十分には定着していなかったことと関連するだろう。例えば【ケース3】の男性は最後に学校を卒業した年齢(大学卒業年齢)を「同世代より上の年齢(遅いタイミング)」と認識していたが、その理由としては、小学校に通った村に中学校がなく、別の地域に転居してから中学校に通ったことが挙げられていた。

前節の調査結果の箇所でもみたように、「直接もしくは間接的に人生に大きな影響を与えた天災や社会的・歴史的出来事」という問いに対しては、ほとんどのインフォーマントが「な

い」と回答していた。しかし、「戦争（もしくは地震等）で人生がかわった」というような認識がないことが、今回の調査対象者がトルコ社会の歴史的時間の影響を受けていないことを示すわけではないだろう。教育改革が軍事グーデタによる社会改革と密接に結びついてきたような、トルコ共和国建設以来の世俗主義にもとづく教育システムと社会の緊張関係が、上述のような本調査結果にも反映されているのではなかろうか。

それと同時に、同じく軍事クーデタの影響のもとで振り子のように計画経済との間を揺れながらも経済の自由化が進展して経済成長したことは、1950年代出生コーホートと1980年代出生コーホートにおけるジェンダー化された「社会的道すじ」に揺らぎをもたらしている可能性もあった。先述のように1980年代出生コーホートでは、女性のインフォーマントで離家の契機を就職とするケースが現れ、かつ、その離家のタイミングが「親元から大学に通った」ことで遅れたとコメントされていた。高等教育への進学と離家の結びつきが一定程度自明となり、さらにジェンダー化された離家の契機にも変化が生じることで、ジェンダー化された「社会的道すじ」に揺らぎが生じて、社会的制約のもとでの選択（agency）の幅が広がり性役割やケア意識にも影響を与えた可能性もあるだろう。

紙幅の都合でケアにかかわる価値意識の1950年代出生コーホートと1980年代出生コーホートの相違、及びその相違と成人期への移行の仕方との関連についての検討は別の機会に譲らざるを得ない。ごく簡単に価値意識の特徴を述べるならば、調査時点での性役割もしくは性別役割分業意識は、多くの先行研究が示すような教育や職業との関連が示唆される。子どもによる扶養という規範意識は二つの出生コーホート間の連続性が示唆されるが、トルコ社会の変化の中で実際に親の介護を経験した1950年代出生コーホートで、若い頃の考え方との変化も報告されている。

## 注

(1) ライフコース研究では、軌道とはある領域における「役割や経験の連続」（Elder et al. 2003: 8）であり、個人のライフコースは相互に依存しあう複数の軌道（trajectory）から構成されると概念化されている（Settersten 2003）。

(2) 『世界史』の教科書にも記されているように、18世紀末に軍の近代化がまず試みられ、19世紀前半にはタンジマート（恩恵改革）という「上からの近代化」の諸改革が始まり、1876年にはオスマン帝国憲法（通称ミドハト憲法）が發布された。これらの改革は、オスマン帝国という「中心」が「周辺」化される過程で進められてきた。

(3) 例えば公務員が職場でスカーフを着用することは2013年まで禁止されていた。

(4) それまでは5年目の初等段階で授与されていた修了書が廃止されたことなど、初等段階修了だけで就職に結びつくようなメリットをなくした（丸山 2006）。

(5) 1950年代出生コーホートに属する回答者では、生まれたときのきょうだいの数にばらつきが大きく（範囲としては2人～7人）、5人という回答が半分だった。回答者のほとんどが自宅で生まれていた。それに対して1980年代出生コーホートに属する回答者ではきょうだいの数のばらつきが小さくなり（2人～4人）、3人という回答が半数だった。回答者の半分は病院で生まれていた。国連の統計データでは（UN Population Division Data Portal）、1955年のトルコの普通出生率（crude birth rate）は4.63、1985年の普通出生率は2.95なので、本調査のサンプルはきょうだいの数という点ではそれ程偏っているわけではない。

(6) ある農家だけでは作業が難しく地域での共同作業が必要となることと、及びそこでの「洗練された依頼の仕方」(中山 2000: 62)については、参与観察による研究(中山 2000)を参照。

## 文献

- 穂山祐子, 2019, 「国民創出イベントとしての文字革命」小笠原弘幸『トルコ共和国 国民の創成とその変容—アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会, 49-71.
- 有田稔, 1985, 「トルコ共和国の経済体制研究とそれに伴う混合経済の概念整理」『徳山大学論叢』23: 1-32.
- チャクル, ムラット, 2023, 「トルコの教育制度の成立過程及び発展に関する研究—義務教育制度を中心に」『研究論集(関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部)』117: 299-316.
- Elder, G. H. Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, Chicago: University of Chicago Press.
- Elder, G. H. Jr., M. K. Johnson, & R. Crosnoe, 2003, “The Emergence and Development of the Life Course,” J. T. Mortimer & M. J. Shanahan eds., *Handbook of the Life Course*, New York: Plenum, 3-19.
- Elder, G. H. Jr. & M. J. Shanahan, 2006, “The Life Course and Human Development,” R. E. Lerner ed., *The Handbook of Child Psychology, 6th Edition Volume 1: Theoretical Models of Human Development*, New York: Wiley, 665-715.
- Easterlin, Richard A., 1987, *Birth and fortune : the impact of numbers on personal welfare* 2nd, University of Chicago Press.
- 比佐優子, 2005, 「20世紀初頭のトルコ経済と産業資本家—2つの工業統計にみるオスマン帝国から共和国への連続と断絶」『一橋論叢』133: 731-753.
- 乾彰夫, 2000, 「『戦後的青年期』の解体—青年期研究の今日的課題」『教育』50(3): 15-22.
- 乾彰夫, 2006, 「青年期ルネッサンス?: 若者・青年期研究をめぐる今日の問題点と課題」『人文学報(教育学)』41: 1-12.
- 川邊純子, 2015, 「トルコの経済発展と日本企業」『城西大学経営紀要』11: 1-26.
- Kuru, Ahmet. T., 2006, *Secularism and State Policies toward Religion*, Cambridge University Press.
- 丸山英樹, 2006, 「トルコの教育改革—欧州水準を目指した量的拡大と世俗主義維持の機能」『国立教育政策研究所紀要』135: 137-151.
- 中山紀子, 2000, 「人は一人では生きられない—村の人間関係」鈴木薫編『アジア読本トルコ』河出書房新社, 62-69.
- 小笠原弘幸, 2019, 「『アタテュルクのトルコ』を問い直す」小笠原弘幸『トルコ共和国 国民の創成とその変容—アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会, 1-17.
- Settersten, R. A. Jr., 2003, “Propositions and Controversies in Life-course Scholarship,” R. A. Settersten, Jr., ed., *Invitation to the Life Course: Toward New Understandings of Later Life*, Amityville, NY: Baywood, 15-45.

## 第7章 日本

### —1950年代生まれ、1980年代生まれの人々の「ケアの軌跡」—

山根 真理

#### 1. はじめに

本章では、日本で行ったインタビューデータをもとに、協力者の方々の産育にかかわるケアの軌跡を記述し、そこから1950年代生まれ、1980年代生まれの人々の、ケア経験の傾向性を読み取る。さらに、1920～40年代生まれの人を対象にした「AL2009調査」（第1章参照）の結果と重ねた考察を行う。「AL2009調査」データを産育のネットワークに注目して分析した結果、ソウル、テグ、大連、イロコスと対照させた名古屋データの特徴は、次の二点である。①出産の医療化には複数の道筋があり、名古屋以外の4地域は圧縮的な医療化を経験しているのに対し、名古屋データの出産医療化には女性助産師浸透による医療化の時期が存在する。②産育ネットワークの歴史的変容過程も社会によって異なる。名古屋データでは自分が育った時のケア・ネットワークにおいて父方祖母が優勢だったが、自分が子育てをする時期にはケアの第一の与え手は子どもの母親に集中し、ケアの支え手としての祖母役割に双方化の傾向がみられた。（山根他，2014）

本稿は本科研プロジェクトにおける日本調査データから、協力者の方々が生まれ育った時、子どもを産み育てた時、1950年代生まれ世代については孫とのかかわりについて、ケース記録として整理した資料を示し、そこから第一段階の予備的考察を行う。1950年代生まれの人の産育にどのような特徴があるか「AL2009調査」結果と重ねて考えること、1980年代生まれ世代の人の産育について、1950年代生まれ世代のそれと対比して考えることが課題である。

#### 2. 日本調査の概要

##### 2.1 調査方法

日本調査は、2023年3月から12月にかけて断続的に、愛知県の名古屋市圏（名古屋市及びその周辺市）に住む1950年代生まれ、1980年代生まれの人を対象にして行った。1950年代生まれ世代は7名（男性3人、女性4人）、1980年代生まれ世代は6名（男性2人、女性4人）の方々にご協力いただいた。

方法はインタビュー調査である。実施にあたり、社会教育施設及び知り合い<sup>1)</sup>を通して調査の趣旨を知らせていただき、趣旨をご理解いただいたの方々にご協力いただいた。協力者の方々のご都合のいい時間、場所で1時間から2時間程度、基本的には対面で、用意した質問シートに沿って半構造化インタビューを行った。12人の方々には対面で、都合を合わせるのが難しかった1人についてはオンラインでインタビューを実施した。

調査実施前にインタビューの目的と方法、プライバシーと個人情報保護等に関する説明を行い、同意を得た上でインタビューを行った。インタビューは協力者の許可を得て録音した。なお、調査実施に先立って、愛知教育大学研究倫理委員会の承認を得た。（本報告書第1章）

## 2.2 協力者のプロフィール

表7-3、表7-4に、インタビューに協力してくださった方々のプロフィールを示す。

表7-3 1950年代生まれ協力者のプロフィール

	性別	生まれ年	職業（最長職）	最終学歴	配偶者有無	配偶者職業（最長職）	同居世帯員	子ども（生年・配偶者有無）
Aさん	男性	1958	無職（会社員）	大学	有	無職（結婚後主婦。内職、パート経験あり）	妻 長女 次女	長女（1993*・無） 次女（1995*・無）
Bさん	男性	1957	無職（会社員）	大学	有	無職（結婚後主婦、アルバイト経験あり）	妻	長男（1988*・有）
Cさん	男性	1958	無職（会社員）	大学	無	—	1人暮らし	いない
Dさん	女性	1955	障がい者施設相談員（介護職）	短期大学	無	死別（会社員）	1人暮らし	いない
Eさん	女性	1950	NPO理事（NPO代表）	短期大学	有	無職（会社員）	夫 長男	長女（1980・有） 長男（1984・無）
Fさん	女性	1952	保育補助員・パート（保育士・パート）	短期大学	有	マーケティングの仕事・非正規（大学教授）	夫	長女（1979・有） 長男（1983・有）
Gさん	女性	1956	子育て支援アドバイザー（施設ボランティア）	大学	有	高校講師（教員）	夫	長男（1986*・有） 長女（1988*・有） 次女（1991*・有） 次男（1997*・無）

\*生まれ年の情報が得られず、調査時の年齢から推定した。（以下の表においても同様）

表7-2 1980年代生まれ協力者のプロフィール

	性別	生まれ年	職業	最終学歴	配偶者有無	配偶者職業	同居世帯員	子ども（生年）
Hさん	男性	1987	作業療法士	大学	有	看護師	妻 長女 長男	長女（2019*） 長男（2021*）
Iさん	男性	1983	公務員	大学	有	会社員	妻 長女 長男 次女	長女（2010*） 長男（2014*） 次女（2019*）
Jさん	女性	1987	助産師	大学	有	会社員	夫 長女 夫の父 夫の母	長女（2022）
Kさん	女性	1984*	助産師	大学院	無	—	1人暮らし	いない
Lさん	女性	1982	公務員	大学院	有	公務員	夫 長女 長男	長男（2015*） 長女（2017*）
Mさん	女性	1982	公務員	大学（卒業後専門学校）	無	—	叔母 叔母の夫	いない

1950年代生まれ世代の男性3人は4年制大学卒業後、「サラリーマン」の人生を歩んできた。有配偶の男性2人の妻は「主婦」（パート、内職、アルバイト経験あり）である。女性のうち3人が短大卒、1人は4大卒である。3の資料にあるように、女性のうち3人が結婚、子育てのタイミングで仕事をやめた経験がある。4人ともケアにかかわる仕事や社会活動をしている。

1980年代生まれ世代の人は4人が大学卒、2人（女性）が大学院卒である。女性4人は全員正規職、男性2人の妻も正規職で継続就労をしている。

### 3. 子どもにかかわるケアの経験

3では13人の協力者の子どもにかかわるケア経験の資料を示す。

#### 3.1 1950年代生まれ協力者のケア経験

(1)Aさん（男性）

概要		三重県で生まれ育つ。家は兼業農家。4人兄弟の末子。18歳で家を離れ、関西の大学で学ぶ。大学卒業後、銀行勤務。1991年に職場の同僚と結婚。妻は愛知で生まれ育つ。結婚後はほぼ専業主婦。55歳で退職後、子会社4社に勤務。妻、2人の娘と4人暮らし。
生まれた時	生まれ年	1958年
	生まれた場所・取り上げた人	自宅（推測）・産婆さん（推測）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖父母、兄3人
	就学前に世話をしてくれた人	一番は父方祖母。母は鋳物工場の仕事で忙しかった。遊び相手は兄たち
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない（台風で避難した時、母の実家にあずけられた）
	養子・里子経験	ない。養子に行く話はあったが、兄が嫌と言ってなしになった。
子どもを産み育てた時	子どもの生まれ年	長女：1993年*、次女：1995年*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・助産師さん
	親との居住関係	自分方：三重、妻方：県内（車で10分くらい）
	就学前に世話をした人	妻（8、9割）、妻の実家の母（1、2割）
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
子どもとの関係	現在の子どもの居住関係・孫	長女（独身・同居）、次女（独身・同居）・孫なし
	孫とのかかわり	孫がいたら、頼まれたら引き受ける。
自分の子ども以外の子育てへのかかわり		ない
特記事項		三重の実家は兄が跡を継いだ。

(2)Bさん（男性）

概要		広島県で生まれ育つ。父は高校教師。母は保母、のちに喫茶店経営。2男1女の長子。18歳で家を離れ関西の大学に進学。大学卒業後銀行勤務。1986年に会社の同僚と結婚。妻は結婚してほぼ専業主婦。銀行を1953歳で退職後、関連会社で60歳まで働く。子どもは息子1人。妻と2人暮らし。
生まれた時	生まれ年	1957年
	生まれた場所・取り上げた人	家・産婆（弟妹は病院）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母（別棟に母の父家族が住んでいた。敷地は母の実家）

	就学前に世話をしてくれた人	近くのおばちゃん（親戚ではない）
	幼い時親から離れて暮らしたこと	母の母は「駆け落ち」し、田舎に住んでいた。小学生の頃、夏休みはそこで過ごした。
	養子・里子経験	ない
子どもを産み育てた時	子どもの生まれ年	長男：1988*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者（帝王切開）
	親との居住関係	自分方：遠居（広島）、妻方：岐阜
	就学前に世話をした人	妻。妻以外にはいない 自分は遊ぶくらい
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
子どもとの関係	現在の子どもの居住関係・孫	長男：静岡県居住・孫 娘（4歳）娘（2歳）
	孫とのかかわり	息子の家に行って手伝う。おしめをかえたりご飯もつくる。日帰りの時も泊まる時もある。
	自分の子ども以外の子育てへのかかわり	ない
	特記事項	—

(3)Cさん（男性）

概要		三重県で生まれ育つ。家は兼業農家。2男1女の長子。高卒後1年浪人をし、19歳で家を出て東京の大学に進学した。大学4年の夏に父が脳梗塞で仕事ができなくなった。23歳で地元の新聞社に入社、事務畑で2014年度末まで勤務。退職後、関連会社で2020年6月まで働く。独身で子どもはいない。
生まれ育った時	生まれ年	1958年
	生まれた場所・取り上げた人	産院・産婆さん（きょうだいみんな一緒）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母（父方祖父母は亡くなっていた）
	就学前に世話をしてくれた人	母（母も農業で忙しかった。農作業の時、近所の人が守をしてくれたと母から聞いたことがある。）
	幼い時親から離れて暮らしたこと	わからない
	養子・里子経験	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
	自分の子ども以外の子育てへのかかわり	ない
	特記事項	中学生の頃、農作業の手伝いがくやしかった。サラリーマンになりたかった。地元に残った弟が家と田圃の世話をしている。

(4)Dさん（女性）

概要		長崎県の島に生まれ育つ。父は公務員。3男4女の長女。高校卒業後、岐阜の会社に就職、働きながら短大（幼児教育）に通う。その後、手芸の店に勤めた。38歳から特養で介護職につき、50歳まで続けた。福祉関係会社調査員を経て、55歳から65歳までケアマネとして勤務。現在は障がい者施設の相談員をしている。44歳の時に再婚。夫を2021年に亡くし1人暮らし。
生まれた時	生まれ年	1955年
	生まれた場所・取り上げた人	わからない・知らない（1959年生まれの妹は病院）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、兄（父方祖父母と叔母が同じ敷地の「へや」に住んでいた。）
	就学前に世話をしてくれた人	母。祖父母に世話をされなかった。父も「ほかりっぱなし」だった。

	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
養子・里子を育てた経験		質問せず
自分の子ども以外の子育てへのかかわり		妹や弟の世話をよくした。
特記事項		長女で母の愚痴をよくきいた。

(4)Eさん (女性)

概要		兵庫県で生まれ育つ。父は自営の技術者。1男2女の長女。地元の短期大学（幼児教育科）に進学した。20歳の時にアルバイト先で夫と出会う。短大卒業後、幼稚園教諭になり26歳で「寿退職」をする。結婚後も幼稚園教諭、障がい者教育の仕事をする。31歳の時、愛知県K市（夫の出身地）に住むことになる。息子に障がいがあり、障がい者自立支援のNPOを1996年に立ちあげる。2020年までNPO代表をつとめた。
生まれた時	生まれ年	1950年
	生まれた場所・取り上げた人	自宅・産婆さん（妹は病院だった）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖父母、おば2人、末のおじ、おおお婆さん（父の母の姉妹）
	就学前に世話をしてくれた人	おおお婆さん（父の母の姉妹）（妹は病気で、妹の世話は母がしていた。）
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
子どもを産み育てた時	子どもの生まれ年	長女：1980年、長男：1984年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者
	親との居住関係	自分方：遠居（兵庫県）、夫方：近居（市内）
	就学前に世話をした人	自分。それ以外に世話をした人はいないが、あずかってくれる近所の友だちの輪があった。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
子どもとの関係	現在の子どもの居住関係・孫有無	長女：近居（三重県）・孫 息子2人（高校生と中学生）、長男：同居・独身・孫なし
	孫とのかかわり	孫が小さい時、よく来ていた。子どもをあずけて夫婦で遊びに行っていた。
自分の子ども以外の子育てへのかかわり		アパートの隣の家の人が4人の子を置いて蒸発したことがあり、その時、子どもたちを1週間あずかった。
特記事項		夫の父の没後、夫の母と5年同居して世話をした。

(5)Fさん (女性)

概要		静岡県で生まれ育つ。家は兼業農家。父はサラリーマンもしていた。1女2男の長女。短大（幼児教育科）に進学。通学の電車で夫と出会い、つきあうようになった。短大卒業後2年、幼稚園教諭を2年で退職。23歳で結婚。夫は結婚時は高校教諭。後に大学教授になった。子どもは娘1人、息子1人。結婚後も幼稚園教諭をしたが、26歳で専業主婦になる。下の子が小6の時からパートで保育の仕事をし、現在も保育補助をしている。夫と2人暮らし。
生まれ育った時	生まれ年	1952年
	生まれた場所・取り上げた人	家・産婆さん（弟たちも同じ）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖父母、叔父（父の弟）（祖父母は別棟）
	就学前に世話をしてくれた人	祖母

	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
子どもを産み育てた時	子どもの生まれ年	長女：1979年、長男：1983年
	生まれた場所・取り上げた人	大学病院・医者
	親との居住関係	自分方：遠居（静岡県）、夫方：遠居（静岡県）
	就学前に世話をした人	自分が主。夫は夜中にミルクを飲ませたり、おむつを替えたりしてくれた。病気の時、夫の両親に家に来てもらった。地域のあずけあいがあった。上の子が幼稚園の時、延長保育を活用した。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
子どもとの関係	現在の子どもの居住関係・孫	長女：県内居住・孫 娘2人、長男：近居・孫 娘2人 息子1人
	孫とのかかわり	娘の子：週一回あずかる。息子の子：週1回は必ず、3歳の子の保育園の送り迎えをする。
自分の子ども以外の子育てへのかかわり		子育てをしていた頃、近所の子（仲のいいママ友の子）を時々、あずかってみてあげたことがある。
特記事項		—

(7)Gさん（女性）

概要		愛知県K市で生まれ育つ。娘3人の次女。父母ともに医者。高校卒業後東京の大学に進学した。22歳で地元に戻り、1年間養護高校で機能訓練士を経て23歳から教員として12年間働く。29歳で結婚、夫は高校教員。最初は共働きをしていた。子どもは息子2人、娘2人。
生まれ育った時	生まれ年	1956年
	生まれた場所・取り上げた人	助産所・助産師（妹も同じ、姉は病院・医者）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖父母、姉
	就学前に世話をしてくれた人	祖父。ご飯は祖父母と食べた。姉は祖母が世話をした。父母は本を読んだりはしてくれた。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
子どもを産み育てた時	子どもの生まれ年	長男：1986年*、長女：1988年*、次女：1991年*、次男：1997年*
	生まれた場所・取り上げた人	病院（取り上げた人 情報なし）
	親との居住関係	自分方：近居（市内）、夫方：近居（県内）
	就学前に世話をする人	上2人は保育園とおばさん（母の妹）、下2人は自分
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
子どもとの関係	現在の子どもの居住関係・孫有無	長男：近居（市内）・孫 娘と息子、長女：近居（県内）・孫 娘と息子、次女：遠居（静岡県）・孫 娘（5カ月）、次男：遠居（千葉県）・独身 孫なし
	孫とのかかわり	長男の子：1～2カ月に1回、夫と2人の子をあずかる。長女の子：熱が出た時のお迎えをする。
自分の子ども以外の子育てへのかかわり		ない
特記事項		夫が姓を変え自分たち夫婦が跡取りとなった。

3.2 1980年代生まれ協力者のケア経験

(2)Hさん（男性）

概要	愛知県 T 市で生まれ育つ。3 人兄弟の次男。父は公務員、母は不規則の働き方だった。北海道の大学に進学し、卒業後作業療法士として総合病院に勤務、現在も同じ職場で働いている。職場の同僚と 2016 年に結婚した。妻は看護師として病院勤務。妻と 2 人の子（4 歳、2 歳）の 4 人で暮らしている。	
生まれ育った時	生まれ年	1987 年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・わからない
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、兄、父方祖父母、祖父の母（祖父は養子）
	就学前に世話をしてくれた人	母が一番。その他に世話をしたのは祖父母
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
親との居住関係（現在）	自分方：県内、妻方：県内	
産み、育てた時（現在）	子どもの生まれ年	長女：2019 年*、長男：2021 年*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・助産師（1 人目は医者も同席、2 人目は医者同席なしだった）
	子どもの世話をする人	定期的には、妻が 6、自分が 4。不定期に手伝ってくれるのは自分方と妻方、両方の両親。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
	制度の利用	育児休業は、2 人とも妻が取得。1 子は 1 歳 2 カ月、2 子は 1 歳 3 か月まで。そのあと保育園を利用。妻は短時間勤務（6 時間勤務）を利用。3 人目が生まれたら、時短も、育休もとろうかなと思っている。2 子では保育料の一定金額が無料になり、助かっている。
自分の子ども以外の子育てのへかかわり	育てたことはない。兄の娘と遊んだくらい。	
特記事項	実家の管理を親に頼まれている。兄は神奈川にいる。	

(2) I さん（男性）

概要	愛知県 K 市で生まれ育つ。3 人兄弟の 3 男。父は公務員から自営を起業、母は公立保育園の先生として定年まで勤めた。22 歳で県内の大学を卒業後、会社勤務。25 歳の時に転職し、公務員になった。24 歳の時に地元の青年団が縁で親しくなった女性と結婚。妻は会社員で継続して働いている。妻と中 1、小 3、4 歳の子どもたちと K 市で暮らしている。	
生まれ育った時	生まれ年	1983 年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者
	生まれた時、一緒に住んでいた人	母方祖父母、両親、兄 2 人
	就学前に世話をしてくれた人	母方祖母。祖母に何から何までしてもらった。その他に世話をしてくれたのは、祖父。農業に連れていってもらった。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
親との居住関係（現在）	自分方：近居（町内）、妻方：近居（町内）	
産み、育てた時（現在）	子どもの生まれ年	長女：2010 年*、長男：2014 年*、次女：2019 年*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者（3 人とも）
	子どもの世話をする人	育児休業中は妻 70%、自分と自分の母が 10% ずつくらい。今は妻 50%、自分 40%、自分の母 10%。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない。里子を育てたいと思ったことがある。

	制度の利用	妻が育児休業をとった。上の子2人は保育園から小学校に行った。末子が年少になる前に保育園が乳児園になり、そのため幼稚園（子ども園）に変わった。
	自分の子ども以外の子育てのへかかわり	ない
	特記事項	—

(1) Jさん（女性）

概要		愛知県で生まれ育つ。1女1男の長女。父は技師、母は看護師で、子育て期に5年間仕事をやめていた。4年制大学で助産師免許を取得、23歳から助産師として病院に勤務してきた。2021年に今の夫と再婚した。夫は会社員。夫の両親、夫、娘（10カ月）と5人の生活である。
生まれ育った時	生まれ年	1987年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖母
	就学前に世話をしてくれた人	母。母以外で世話をしてくれたのは、父と父方祖母。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
親との居住関係（現在）		自分方：愛知県内（隣の市）、夫方：同居
産み、育てた時（現在）	子どもの生まれ年	長女：2022年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・助産師（職場の助産師さんをお願いした）
	子どもの世話をする人	自分。自分が8、夫は2。夫がするのは、おむつ交換、自分の体調が悪い時の風呂、休日に離乳食を食べさせること。義父母に子どもの世話まではお願いしていない。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない。妊娠できなかつたら里親の選択もあると考えていた。
	制度の利用	インタビュー時点でJさんは育児休業中。5月に復帰予定。時短で復帰したかったが保育園入園が難しいと言われ、フルタイムで復帰することになった。7時間勤務くらいの時短がいいと思う。
	自分の子ども以外の子育てのへかかわり	今の子どもが生まれる前、夫の前妻との子（当時5歳）が事情あって1ヵ月くらい家に来て、一緒に生活したことがある。
特記事項		—

(4) Kさん（女性）

概要		愛知県S市で生まれ、高校卒業までに千葉県、愛知県内の2市で生活した。父は会社員、母は結婚してから専業主婦。18歳で家を出て、看護師養成の学校で学びながら働き、寮生活をした。22歳から看護師として総合病院に勤めた。28歳から助産師学校で学び、29歳で現在の病院に助産師として就職する。2018年に修士課程に進学、働きながら4年間学ぶ。現在はNICU病棟勤務、N市で1人暮らしをしている。
生まれ育った時	生まれ年	1984年*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・助産師（推定）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	母方祖父母、母（里帰り出産だった）。父のいる千葉県に戻ってからは父と母。
	就学前に世話をしてくれた人	母8、父2
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない

親との居住関係（現在）	父母：愛知県内
養子・里子を育てたこと	ない
自分の子ども以外の子育てのへかかわり	姪、甥の育ちにかかわっている。姪の時は週 1 回くらい、甥の時は月 1 回くらい会っていた。親以外の人のひとりとしてかかわり、いろんな経験をさせたい。仕事を通しては、赤ちゃんの育ちにかかわっている。
特記事項	—

(5)Lさん（女性）

概要	愛知県N市で生まれ育つ。1女1男の長女。父母とも教員。大学卒業後2年間大学院で学び、24歳で小学校教員になった。2023年から生涯学習課の仕事をしている。31歳の時に結婚。公務員の夫、2人の子ども（8歳、6歳）と4人暮らし。	
生まれ育った時	生まれ年	1982年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者（帝王切開）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母
	就学前に世話をしてくれた人	母が中心。母以外に世話をしてくれたのは父方祖父母（近所に住んでいた）保育園の送り迎えをしてくれ、自分が病気の時にみてくれた。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子経験	ない
親との居住関係（現在）	自分方：市内（近所）、夫方：父は市内 母は県内（夫の父母は離別）	
産み、育てた時（現在）	子どもの生まれ年	長男：2015、長女：2017*
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者（2人とも帝王切開）
	子どもの世話をする人	育休中は100%自分。今は夫と半々。自分の父母の助けは大きい。保育園の送り迎えはほぼ父母がしている。
	子どもが幼い時離れて暮らしたこと	ない
	養子・里子を育てたこと	ない
	制度の利用	育児休業は1人目1年半、2人目1年半、連続して3年とった。そのあとは保育園を利用し正規で働いている。
自分の子ども以外の子育てのへかかわり	友だちと子どもをみあうことはある。	
特記事項	実家から徒歩2、3分のところに家を買った。	

(4)Mさん（女性）

概要	愛知県A市で生まれ、N市で育つ。3人姉妹の長女。父は会社員、母は結婚して主婦、末子が小学校に入ってからパートにでた。Kさんが私立中学に進学時にA市の祖母宅に住むことになった。高校卒業後大学に進学、一年後別の大学に入学して卒業後、専門学校で精神保健福祉士の資格をとり、25歳で公務員になる。母方叔母夫婦とA市で暮らしている。	
生まれ育った時	生まれ年	1982年
	生まれた場所・取り上げた人	病院・医者（妹たちも同じ）
	生まれた時、一緒に住んでいた人	父、母、父方祖父母、曾祖父母（幼稚園に行く前くらいに父方の実家を出て、両親と自分3人になった。）
	就学前に世話をしてくれた人	一番は母。それ以外は母方祖父母、叔母（母の妹）。母と離れてA市の母方祖父母と過ごした記憶がある。
	幼い時親から離れて暮らしたこと	中1の時から母方祖母の家で生活した。
	養子・里子経験	ない
親との居住関係（現在）	父母：愛知県内	

養子・里子を育てたこと	ない
自分の子ども以外の子育てのへかかわり	姪甥（妹たちの子）と一緒に遊びにいたりする。妹たちは実家のつながりで子育てをしている。
特記事項	叔母夫婦と母方祖父母の介護をした。

#### 4. 考察

##### 4.1 1950年代生まれのケア経験から

1950年代生まれの協力者のケア経験、特に子育て・子育てについての考察を要約的に記す。①生まれ育った頃、母親は「専業主婦」として子どもの世話に専念する存在ではない。子育ては関係性の網の目に埋め込まれており、父方母方でみると父方親族のケアを受けた人が多い（A、E、F、G）。一方で、他出した母方祖母との関係（B）のように、母方親族との柔軟な関係もみられる。地域の子育て力（B、C）を示唆する語りもあった。②自分の子どもを育てた頃の経験をみると、就労しない状況の下では子どもの母親が中心的ケアラーとなっている。父親のケアがあるとしてもサポートとして語られた。妻方の親、親族の支援を受けたとした人が2人（A、G）、夫方の親の支援を受けたとした人が1人（F）である。自分が生まれ育った時と比べると、相対的に妻方親族の支援が浮上している。これらの結果は「AL2009 調査」名古屋データにみる1920～40年代生まれの人々の経験の方向と一致する。都市（近郊部含む）で形成された子育ての繋がりについて語った人（E、F）もいた。③孫とのかかわりについて、男性が祖父になって、あるいは祖父になることを予期して「孫のケアをする」事実や展望が語られることに注目される。

##### 4.2 1980年代生まれのケア経験から

1980年代生まれの子育て・子育て経験についての考察を記す。①生まれ育った頃、自分の母親が中心的なケアラーと回答した人が多い（H、J、K、L、M）。父を補助的な存在としてあげた人は2人（J、K）である。親族（祖父母を中心とする）のケアについては、父方親族（H、J、L）と母方親族（I、M）が拮抗している。父方祖父母と同居しているがケアの絆としては母方親族が強いMさんのような人もいる。②子育てをしている共働きの4人のうち、3人（H、I、L）の家庭において父親は「補助」ではなく、欠くことのできない共同ケアラーである。③親族関係に注目すると、子どもにとっての祖父母は重要な子育ての支援者である（夫の母（I）、妻の両親（L）、両方の両親（H））。④保育無償化、認定子ども園の普及、男性の育児休暇推進など、制度改革や推進の影響を受けており、その中で父親の育児休業について「自分事」として語る人がいた（I、L）。

#### 注

- 1) 名古屋市男女平等参画推進センター（イーブルなごや）にてご協力をいただいた。インタビュー協力の呼びかけにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

#### 文献

山根真理・洪上旭・朴京淑・李東輝・長坂格・中筋由紀子，2014「20世紀アジアの社会変動と産育のネットワークー5 地域ライフコース調査からー」『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学編）63：155-166.

## 第8章 前近代日本

### —19世紀初頭生まれの人々の出生・死亡・結婚—

平井 晶子

#### 1. ライフコースの長期的変容を考える：歴史的視点の導入

本研究プロジェクトでは、各国のおもに 1920 年代・30 年代生まれ、1950 年代生まれ、1980 年代生まれの人々への詳細な聞き取り調査によるライフコースの再現、それを踏まえた歴史的変化ならびに多国間比較を行うことを目指している。

<歴史>から考える本章では、前近代、とくに 19 世紀初頭生まれの人々のライフコースを歴史的資料から再現し、20 世紀生まれの人々のライフコースとの連続性／非連続性を考える基盤を提供したい。

まず第 2 節では人口学ならびに歴史人口学の成果をもとに、19 世紀から 20 世紀にかけての出生率と死亡率、結婚率と離婚率についてのトレンドを明らかにし、マクロな視点から見た 20 世紀生まれの 3 つの世代の特徴を検討する。第 3 節では前近代のライフコースにアプローチするための歴史人口学の資料と方法を簡潔に紹介する。第 4 節では歴史人口学的アプローチを用いて、19 世紀初頭生まれの東北農村の人々のライフコースを再現する。

そして最後（第 5 節）に本プロジェクトの中核をなす 20 世紀生まれの 3 つの世代の特徴を考えるにあたり歴史的視点を導入する意義を検討する。

#### 2. 19 世紀から見た 20 世紀の 3 つの世代の人口学的特徴

##### 2.1 出生率の推移：19—20 世紀

###### 2.1.1 20 世紀における出生率の低下

日本の出生率は 1950 年からの 6 年間で急激に低下した。合計出生率でみると 1949 年の 4.32 から 1956 年には 2.22 へ半減している。

この間の変化があまりにも顕著なため、つい見逃してしまいがちであるが、出生率の低下は 1920 年代から始まっている。1925 年の合計出生率は 5.1 であるが、1930 年には 4.70、1940 年には 4.11 と直線的に下がっている（表 8-1）。1940 年代は、戦争による混乱、その後のベビーブームと、大きな歴史的出来事があり、短期的に極端な事態が生じているが、長期的トレンドとしては、少なくとも 1920 年代から出生率は低下しはじめ、それが 1950 年代まで続いたといえよう。

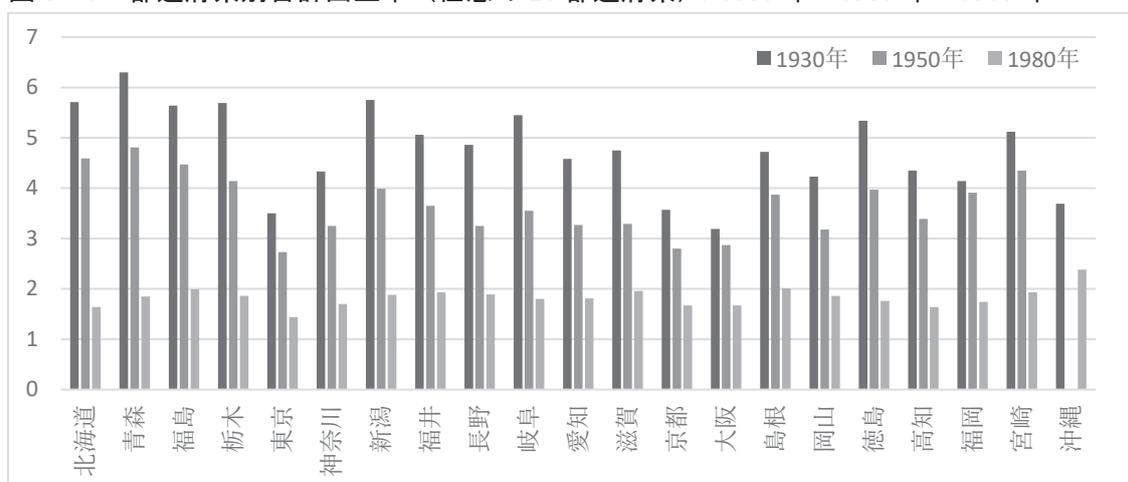
この 20 世紀前半に生じた出生率低下は地域差が大きいことでも知られている（図 8-1）。1930 年にもっとも合計出生率が低いのは大阪府（3.19）で、最も高いのは青森県（6.30）である。平均 3 人産む大阪府と 6 人産む青森県とではライフコースのちがいは一目瞭然である。1950 年に最も低いのは東京都（2.73）で、最も高いのは青森県（4.81）である。いく分、両者の差は縮小しているが、まだ地域差は大きい。それが 1980 年になると最小の東京都が 1.44、最大の沖縄県が 2.38 と、地域差が縮小している。倍率にすると沖縄県は東京都の 1.7 倍と大きく見えるが、子どもが 1-2 人の東京都と 2-3 人の沖縄県では、前の 2 つの世代に比べるとライフコースのちがいは小さくなっているといえるだろう。

表 8-1 日本の合計出生率の推移：1925-1960

合計出生率	
1925	5.10
1930	4.70
1940	4.11
1950	3.65
1960	2.00

出所：国立社会保障人口問題研究所編『人口統計資料集（2023）』の表 4-3 より作成。

図 8-1 都道府県別合計出生率（任意の 21 都道府県）：1930 年・1950 年・1980 年



\*（東京・愛知・大阪・沖縄を除いて）各地方で最も出生率が高い県と低い県を選択。

出所：国立社会保障人口問題研究所編『人口統計資料集（2023）』の表 12-33 より作成。

### 2.1.2 19 世紀の出生率

1925 年の合計出生率が 5.1 ということから前近代の出生率はそれ以上に高いと想像する方がいるかもしれない。しかし、前近代の日本の出生率は必ずしも高くはなかった。

歴史人口学的成果をまとめた落合恵美子（2015：27）の表序-1 を見ると、前近代日本の合計出生率は、東北日本で 2.99（仁井田村・下守屋村：1716-1870）、あるいは 5.04（山家村：1760-1870）、西南日本で 3.56（野母村：1766-1871）である。山家村の出生率のみ 5 をこえているが、それ以外は 3-4 程度とけっして高いとは言えない。むしろ仁井田村・下守屋村や野母村の出生率は人口転換以前とは思えない低い値となっている。

資料的制約から前近代の合計出生率を計算できる地域は少ない。そのため、平井（2021：11、表 2）では普通出生率（人口 1000 人あたりの出生率）を用いて前近代の出生率の推移をまとめてみた。それを 19 世紀に絞ってまとめ直したのが表 8-2 である。表では、19 世紀から 20 世紀にかけての推移がわかるように、19 世紀の村単位の出生率に対して、20 世紀の県単位の値を並置してみた。

普通出生率が 30‰を下回っている太字に注目すると、それらが前近代に集中しており、20 世紀には少ないことが見てとれる。逆に、濃い網掛けは 40‰をこえる比較的高い出生率

を示している。こちらは 20 世紀になって幾分多い。

つまり日本の出生率は、高い前近代から近代へと直線的に低下したわけではなく、もともとあまり高いとは言えない出生率が 20 世紀初頭に上昇し、1920 年頃にピークを迎え、その後、低下するという流れとなっている。とりわけ東北地方で、19 世紀前半に低く、近代に入り上昇し、20 世紀前半は高い傾向が続く。

表 8-2 普通出生率の推移（‰）：1800-1940

県	村	1800 年年	1820 年代	1840 年代	1860 年代	1900 年	1920 年	1940 年
宮城県	狐禅寺村	<b>23.9</b>	<b>19.1</b>	<b>28.3</b>	-	32.3	43.0	33.2
福島県	仁井田村	<b>20.7</b>	<b>26.5</b>	32.2	34.5	32.4	39.8	33.4
岐阜県	西条村	37.8	35.7	41.3	34.0	32.4	40.5	31.9
島根県	和木村	32.1	33.5	-	-	28.1	33.2	<b>27.2</b>
長崎県	野母村	30.8	36.5	35.3	<b>28.3</b>	<b>27.4</b>	32.7	30.2
全国平均		-	-	-	-	33.0	36.2	<b>29.4</b>

1) 1800 年代, 1820 年代, 1840 年代, 1860 年代：各村の修正普通出生率（観察結果の 1.15 倍）の 10 年平均。近世資料には出生直後もしくは出生から数ヶ月以内の死亡が「出生」として記録されないことがあり、記載漏れが指摘されてきた。そのためここでは観察結果に 115% を掛けた修正値を使用。

2) 網掛けの部分は村単位の修正普通出生率（‰）を提示。

3) 1900 年、1920 年、1940 年：県単位の普通出生率（‰）を提示。

4) 30% 未満を太字とする。

出所：1800s-1860s は平井（2021：11）の表 2 より作成。

1900, 1920, 1940 は国立社会保障人口問題研究所編『人口統計資料集（2023）』の表 12-27 より作成。

### 2.1.3 世代別の出生率の特徴

19 世紀から 20 世紀にかけての長期的な出生率の推移を踏まえると、本プロジェクトが対象とする 1920 年・30 年代生まれ、1950 年代生まれ、1980 年代生まれはどのように位置づけられるのか。

1920 年・30 年代生まれは、（少なくとも 19 世紀以降の日本の中で）もっとも出生率が高い時代に生まれた世代であることがわかる。また、19 世紀から 20 世紀中葉まで顕著な地域差があったことを踏まえると、19 世紀の顕著な地域差は 1920 年・30 年代でも、1950 年代でも維持されていたが、1980 年代になると相当程度、縮小していたことがわかる。

## 2.2 死亡率の推移

次に死亡率の推移を検討する。

出生率の低下に先駆けて 19 世紀末から死亡率の低下が始まっていた。スペイン風邪（1818-21）や戦争による短期的な変化はあるものの、普通死亡率（人口 1000 人あたりの死亡数）の長期的トレンドを見ると、1880 年の 30‰ から 1940 年には 15‰ へと大きく改善している（河野 2007：114 の図 4-2）。

前近代（19 世紀）はどうだったのか。出生率と同様に、前近代の村落単位の普通死亡率（人口 1000 人あたりの死亡数）と 20 世紀の県単位の普通死亡率をまとめたのが表 8-3 である（1920 年は 1918 年に発生したスペイン風邪の影響により死亡率が高い）。

人口規模の小さい村単位の死亡率（表の網掛け部分）はどうしても振れ幅が大きくなるが、出生率のような地域別の特徴は見られない。むしろ概ね 20-30%の範囲に収まっており、大きな地域差は確認できないことに 19 世紀前半の死亡率の特徴が確認できる。

長期的な出生率・死亡率の推移から見ると、1920 年・30 年代生まれは、記録上のきょうだいが多く世代というだけではなく、死亡率が低下し、きょうだいの生き残る可能性が高まった世代であり、生存きょうだい数が多い世代と位置づけられる。

表 8-3 普通死亡率の推移（‰）：1800-1940

県	村	1800 年年	1820 年代	1840 年代	1860 年代	1900 年	1920 年	1940 年
宮城県	狐禅寺村	35.8	20.6	-	-	18.6	26.0	16.4
福島県	仁井田村	32.2	25.3	23.0	25.3	19.4	26.0	16.8
岐阜県	西条村	31.9	22.1	24.6	18.5	20.5	25.8	18.3
島根県	和木村	13.2	22.2	24.7	-	21.9	25.1	19.9
長崎県	野母村	25.7	30.7	23.2	26.6	18.2	22.6	16.9
全国平均		-	-	-	-	24.0	25.4	16.5

1) 1800 年代, 1820 年代, 1840 年代, 1860 年代：各村の修正普通死亡率（観察結果の 1.15 倍）の 10 年平均。近世資料には出生直後もしくは出生から数ヶ月以内の死亡が記録されないことがあり、記載漏れが指摘されてきた。そのためここでは観察結果に 115% を掛けた修正値を使用。

2) 網掛けの部分は村単位の修正普通死亡率（‰）を提示。

3) 1900 年、1920 年、1940 年：県単位の普通死亡率（‰）を提示。

出所：1800s-1860s は平井（2021：12）の表 3 より作成。

1900, 1920, 1940 は国立社会保障人口問題研究所編『人口統計資料集（2023）』の表 12-28 より作成。

## 2.3 結婚率と離婚率

### 2.3.1 20 世紀生まれの人々：皆婚から非婚化へ

表 8-4 は出生コーホート別の生涯未婚率（50 歳時点の未婚率）を示したものである。1920 年・30 年代生まれは、50 歳時点で 95% 以上が結婚経験者という世代であるが、1950 年代生まれは、生涯未婚率が、女性で 6% へ微増し、男性では 13% まで急増した世代になる。1980 年代生まれについては、生涯未婚率はまだ出ていないが、おそらく女性の 2 割、男性の 3 割程度が生涯未婚と推定されている。

離婚率は出生コーホート別に求めることはできないため、時代別にその推移を見ておこう。日本の離婚率は 1980 年代以降に上昇したという印象を持っている人が多いかもしれないが、長期的に見ると 20 世紀初頭の高い時代から一度低下し、再度上昇したというのが実態である（図 8-2）。20 世紀初頭は世界的に見て日本はもっとも離婚の多い国のひとつであったが、その後急速に低下し、1920 年代から 1970 年代までは離婚のできない国となっていた。

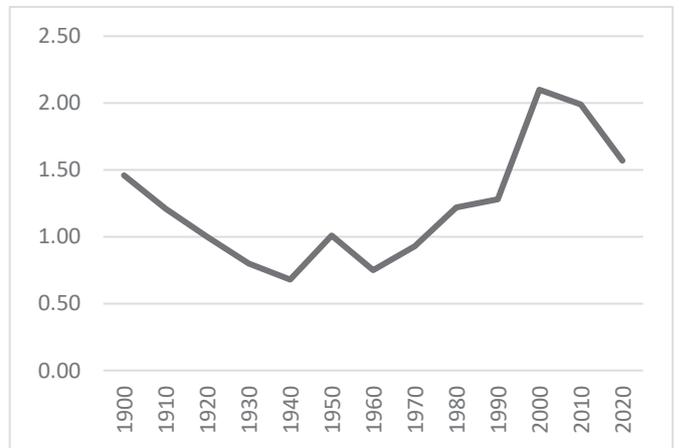
つまり 20 世紀生まれの 3 つの世代は、結婚・離婚の特徴が大きくちがう世代であることがわかる。すなわち 1920 年・30 年代生まれは皆婚で離婚もしない世代、1950 年代生まれは皆婚が終焉を迎えた（とくに男性）世代・離婚も可能になった世代、1980 年代生まれは結婚も離婚も「選択」する世代と特徴づけられる。

表 8-4 出生コーホート別 50 歳時の未婚率  
(1920 年代生まれから 1970 年生まれ)

出生年	女性	男性
1890	1.47	1.75
1900	1.35	1.45
1910	1.88	1.26
<b>1920</b>	<b>3.33</b>	<b>1.70</b>
<b>1930</b>	<b>4.45</b>	<b>2.60</b>
1940	4.33	5.57
<b>1950</b>	<b>5.82</b>	<b>12.57</b>
1960	10.61	20.14
1970	17.81	28.25

出所：国立社会保障人口問題研究所編  
『人口統計資料集（2023）』表 6-23 より作成。

図 8-2 離婚率（%）の推移：1900-2020

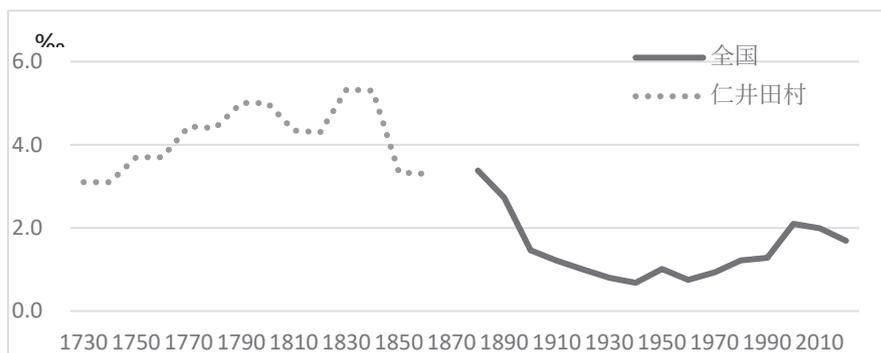


出所：国立社会保障人口問題研究所  
『人口統計資料集（2023）』表 6-2 より作成。

### 2.3.2 19 世紀生まれの人々の結婚率・離婚率

19 世紀生まれについて、出生率と同様、落合による歴史人口学の成果のまとめを見てみると（落合 2015:27 の表序-3）、前近代の村落社会の生涯未婚率は、男性で 2.2%（仁井田・下守屋村）から 12.1%（野母村）まで村によるちがいが大きい。女性については地域差がさらに大きく、未婚では生きられない生涯未婚率 0.1%という村（仁井田・下守屋村）から現代のような 20.6%（野母村）という村まで実に多様である。

図 8-3 前近代の仁井田村の離婚率と近代の全国の離婚率



出所：仁井田村 人別改帳データベース。  
全国の 1883 年と 1890 年は内各統計局『帝国統計年鑑』。  
全国の 1890 年以降は国立社会保障・人口問題研究所編『人口統計資料集（2023）』表 6-2。

初婚に対する離婚の割合を見ても、結婚の 1/3（34%）が離婚で終わるといふ村落（仁井田・下守屋村）から、1 割（9.7%）が離婚で終わるといふ地域（西条村）までこちらも

地域差が大きい。このように地域差はあるものの、いずれの地域であっても離婚が忌避される状況はなかったというのが前近代の特徴である。

では前近代から近代にかけて離婚率はどのように推移したのか。前近代の仁井田村（近世のなかで離婚が多い地域）の離婚率（%）を近代のそれと対比させたのが図8-3である。前近代の仁井田村の離婚率は概ね近代初頭より高い。つまり、長期的に見ると、前近代の高い離婚率は近代初頭まで続いていたが、19世紀末から低下する。

#### 2.4 1920年・30年代生まれ／1950年代生まれ／1980年代生まれ

19世紀から20世紀にかけての出生率、死亡率、結婚率、離婚率といった人口学的指標からマクロな変化を踏まえると、本プロジェクトが焦点をあてる3つの世代の特徴は次のようにまとめられる。

- ・1920年・30年代生まれ：出生率が高くもともと生きようだいな数が多い世代  
生まれた地域によりライフコースが大きくちがう世代  
皆婚世代・離婚不可世代
- ・1950年代生まれ：出生率が低下し始めており、きょうだいな数が減り始めた世代  
生まれた地域によりライフコースがかなりちがう世代  
男性の非婚化が始まった世代・離婚も選択肢に入る世代
- ・1980年代生まれ：きょうだいは2-3人という世代  
地域差が小さくライフコースが均質化した世代  
結婚が当たり前ではなく「選択」するものになった世代

### 3. 前近代生まれの人々のライフコースへの歴史人口学的アプローチ

#### 3.1 歴史人口学の資料：宗門人別改帳

（前節の人口指標も含め）前近代の人々のライフコースはいかに再現できるのか。本章では聞き取り調査もできない、近代統計もない前近代の人々のライフコースにアプローチするために、歴史人口学的方法を用いる。歴史人口学とは、近代統計が確立する以前の社会について出生や結婚、死亡といった人々のライフコースを解明する方法である。20世紀のライフコースは近代統計ならびに聞き取り調査によりマクロにもミクロにもアプローチすることができるが、19世紀以前に関しては歴史資料に頼らざるを得ない。世帯情報や出生、死亡といったライフイベントが記載された資料から、家族やライフコースを再現するのが歴史人口学である<sup>1</sup>。

日本には近代以前の庶民のライフコースを知るための手掛かりが豊富に残されている。いわゆる宗門人別改帳である。キリシタン禁令のために作成が義務づけられた宗門改帳や、村落や町内の家・人員を把握するための人別改帳、それらが統合された宗門人別改帳がそれである。徳川初期の宗門人別改帳は情報量が少なくライフコースを再現するには不十分な資料が多いが、18世紀後半以降は個人が家を単位に丁寧に記載されていることが多く、年齢、続柄、出身地などが1人ひとりについて記録されている（資料8-1）。

このような情報が、村のすべての住民について記録されている。多いときには100年、150年分が残っている。100年以上の期間にわたり連続して残されているものは多くはないが、それらを活用することでライフコースの実態ならびに変容を知ることが可能になる。本章ではユーラシア・プロジェクト（以下、EAP）で収集し整備した資料を用いてライフ

コースを再現し、19世紀初頭に生まれた人々の人生を追跡する。

#### 資料 8-1 寛政一二年申年三月安達郡仁井田村人御改帳（村控）（故遠藤精吾氏所蔵）

持高	本田九石八斗四升八合	
	新田貳石壺斗貳升九合	
借高	新田九升三合	寛政八辰年より五年来庄吉へかり地
作高	本新メ拾貳石七升	
一、	平次郎女房いそ	年廿九 身請引込申候
一、	嫡男平蔵	年八ツ (後筆)「帳面仕立後死失」
一、	親平兵衛	同五拾九
一、	女房りつ	同五拾六
	メ五人内	二人男
		三人女
一、	家主平次郎	年三十四 当村遠藤新十郎方給取

出所：平井（2008、26頁の資料2-1（A））。

### 3.2 資料の利用法：ベーシック・データ・シート（BDS）の考案とデータベースの構築

資料 8-1 に示した情報からライフコースを再現するために考案されたのがベーシック・データ・シート（BDS）である。日本の歴史人口学を長く牽引した故速水融により考案され、長く活用されている。一枚のシートに一家族をまとめ、縦軸に年、横軸に家族員を書き込み、両者の交わるところに年齢を入れる。そうすることで、いつ、だれが、だれから生まれ、いつだれと結婚し、いつ死んだのか、家族の中で個人の人生を追跡することが可能になる。EAP では、この BDS からデータベースを作成し、研究が大いに促進され、さまざまな成果が生みだされた<sup>2</sup>。

## 4. 19世紀初頭生まれの人びとのライフコース

### 4.1 1800年代、1810年代、1820年代に東北農村に生まれた3人の女性を軸に

ここでは19世紀初頭に陸奥国安達郡仁井田村（現在の福島県本宮市）で生まれた3人の女性を軸に、彼女たちの人生、彼女たちの家族の人生を、仁井田村の BDS をもとに再現する<sup>3</sup>。なお、この時期の東北は大きく人口が落ち込んだ時代であることを付記する。

第1のケースでは1804（享和4）年12月に生まれた「ふみ」を軸に、2つ目のケースとしては1819（文政2）年3月に生まれた「つよ」を軸に、3つ目は1820（文政3）8月に生まれた「しも」を軸にする（以下、本項では人別改帳に記載された年齢（数え年）でライフコースを再現している）。

### 4.2 1800年代生まれの「ふみ」を軸に：養女、家族の再統合、弟へ継承、そして婚出

「ふみ」は1804年、父惣十郎（34歳）、母ふよ（21歳）の第1子として生まれた。父は「ふみ」が生まれた直後から質物奉公に5年間行き、その後も奉公を繰り返しており、家庭の厳しい経済状況がうかがえる。そのためか「ふみ」は8歳の時に村内の跡取りのいない71歳の喜右衛門の家へ養女に行く。そして喜右衛門が73歳で亡くなると、「ふみ」が戸主となる。その「ふみ」の家に、実の両親、妹、弟が引っ越してきて、両親と子どもたちでの暮らしが再び始まる。このとき、帳面には養女となった「ふみ」が戸主（「家主」となり、実の両親は「父」「母」という続柄で記載される。

その後、「ふみ」が21歳、弟新吉が13歳のとき、戸主が弟に移り（「当年より家主」）、  
「ふみ」は「養母」と記載される。弟を養子に迎えて家督を譲ったことになる。そして26  
歳のとき、近くの村へ縁付き、「ふみ」の記録はここで終わる。

家督を継承した弟（養子）は19歳で親戚の娘を嫁に迎え、新三郎と改名し、55歳で明  
治を迎える。資料が残る1870（明治4）年まで新三郎夫婦は共に健在で、6人の子どもに  
恵まれた。新三郎夫婦は20歳と16歳で第1子を、27歳－23歳で第2子、30歳－26歳、  
36歳－32歳、40歳－36歳、48歳－44歳で第3子から第6子を産んでいる。娘が1人夭折  
したが、5人は無事に育ち、長男が家を継承、次男、三男はそれぞれ村内に養子に行く。  
娘は村外へ嫁に行き、末娘は9歳で資料が終わる。

新吉の子ども時代（家督を継ぐまで）は、親が質物奉公に出ていたり、家族で引っ越し  
があったり、姉の後を継いだりと、直系家族の「標準」的ではないライフイベントを経験  
するが、結婚後は多くの子どもに恵まれ、長男が家を継ぎ、他の子どもたちは婚出する  
という直系家族らしいライフコースを辿っている。

#### 4.3 1810年代生まれの「つよ」を軸に：分家・養女・連れ子の養育・娘の結婚

「つよ」は、1819（文政2）年に父和吉（27歳）、母みな（24歳）の第3子（次女）とし  
て生を受ける。戸主である叔父（父の兄）は長期にわたり質物奉公に出て不在のなか（祖  
父や祖母も時には質物奉公で不在のときがあるが）、だいたい祖父母、80歳代の曾祖母、  
両親ときょうだいという直系家族の中で子ども時代を過ごす。ただし姉は2歳で夭折、き  
ょうだいは5つ上の兄と、3つ下の妹のみとなる。

「つよ」は15歳の時、長らく奉公に行っていた叔父の養女となり分家する。叔父は20  
代から（質物のときもあれば、給取のときもある）何度も奉公に行っており、家を不在に  
していることが多かったが、分家の3年前、49歳の時に妻（50歳）と共にようやく家に帰  
ってきた。そして52歳で姪（「つよ」とともに分家した。

「つよ」は20歳の時、越後から婿を迎える。天保期の当該地域では飢饉が頻発し、人口  
が激減するなか、人口が増えている越後からの移住を促進していた。仁井田村でも越後出  
身者が迎えされる時代であった。「つよ」は22歳で第1子けさを産む。婿の忠吉はときど  
き家を出てしまい（「欠落」）行方しれずになる。あるときは2年で、あるときは1年で戻  
ってきた。しかし1年で戻ったと思ったら3歳の連れ子を連れて帰ってきた。「つよ」は12  
歳の長女と3歳の夫の連れ子の面倒とみることになる。娘が14歳になったとき、娘は近隣  
から婿を迎え、孫も次々生まれた。「つよ」が活着している間に3人の孫が生まれたが2人は  
夭折している（娘夫婦は資料のある1870年までに7人の子どもを産んだが5人が夭折）。

夫の連れ子は10歳で村内に養子に遣わされる。すでに娘が婿を取り孫も生まれており、  
家に置いておいても、という判断があったのかもしれない。しかしよくわからない所へ追  
いやったという訳ではなく、「つよ」の実家に養子に出す。ただ残念なことにこの連れ子  
は養子となった翌年に11歳で病死する。

「つよ」は30代で養父母を看取り、娘の結婚、孫の誕生を見とどけ、46歳で病死する。  
「つよ」の死後、50代の夫は2年間村内で奉公に行くも、最終的には越後に帰った。彼の  
移動を見ると、越後との間には村どうしで婿を受け入れたり、奉公人を受け入れたりする  
ネットワークがあったと思われる。しかも彼が婿入後30年たった50代になって越後に戻  
っていることを考えると、仁井田村で暮らした30年の間も越後とのつながりを維持しなが

ら暮らしていたことが想像できる。

19 世紀中葉の東北農村は直系家族を基盤とした「家」社会<sup>4</sup>であるものの、様々なリスクにさらされており、思い通りには生きられたわけではなかった。むしろ広範囲に移動をしながら、いわゆる長男継承という枠にとらわれず、さまざまな工夫をしながら生をまっとうし、家を維持したと考えられる。

#### 4.4 1820 年代生まれの「しも」を軸に：核家族生まれの次女、2 度目の結婚で安定か

「しも」は、父与右衛門 49 歳、母ちん 44 歳の間に生まれた次女である。上には 14 歳の姉と 10 歳の兄がいる 3 人きょうだいの末っ子である。いわゆる両親と子ども 3 人という核家族で生まれた。「しも」の家は村の中では持高が比較的多い中層に位置づけられるが、19 世紀初頭は飢饉が頻発し厳しい時代であったことから、親は質物奉公も経験している。

「しも」が 5 歳の時、18 歳の姉が村内の市次郎と結婚し家を出る。そして「しも」が 7 歳の時、父が 55 歳で病死し、17 歳の兄が家督を継ぎ、家族は母と兄の 3 人となる。

その後、兄は（「しも」が 12 歳の時）21 歳で他村から嫁を迎えるも「不縁」となる。15 歳になった「しも」は、村内の喜右衛門に縁付いた。彼の家の持高は「しも」の実家と同程度で、婚家には 60 歳の舅、兄夫婦、兄夫婦の子ども（2 歳）がいた。なにがあったのかは知るよしもないが、3 年後に「しも」は「不縁」となり実家に戻る。そして、その翌年、今度は近隣の村の政右衛門の嫁となり村を出る。ここで「しも」の仁井田村での記録は終わる。「実家に立ち帰る」との記録が出てこないことから、嫁ぎ先の村で人生を終えたと推察できる。

兄は離婚後長らく独身であったが 30 歳で再婚し、やがて 3 人の子どもが生まれている。しかし結婚が遅かったこともあってか、結婚と同時に 5 歳の男子を越後から養子に迎え（最初の 2 人の実子が夭折したこともあってか）、家はこの養子が継いでいる。

「しも」や兄の結婚からわかるように、結婚直後の離婚は「普通」であった。多くの場合、離婚後は比較的早く再婚しており、離婚が否定的なものと考えられていたようには見えない。死亡率が高いことから養子・養女も多く、移動（引っ越しや離婚・再婚、奉公）も多い。このように前近代の人々のライフコースには、高い死亡率がついて回る。

#### 4.5 19 世紀初頭生まれのライフコースの特徴

江戸時代は、武士であれ庶民であれ、離婚が多かった。同時に、不縁の後、再婚が行われるのも「普通」であった。厳しい暮らしを維持する上で結婚はトライし、ダメならやり直す、これが常識だったのだろう。

加えて次世代へ家を継いでいくことが容易でなかったことも垣間見える。18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて飢饉が頻発した東北日本では人口は激減する。藩も「赤子養育法」を定め子育て支援を行うなど人口減少が問題であることを認識し、対応を急いだ（多産の家庭に養育のためのお米を与える政策）が、けっして十分なものではなくあまり効果はなかったと言われている（高橋 2005）。そのような厳しい時代のなかで、人々はなんとかして次世代へと家を継承するために養子や養女を迎えたり、遠く越後から婿を迎えたりと、「工夫」をこらした。

子どもの死亡率も高い。飢饉になれば中程度の階層の家であっても借金の形に奉公に行かなければならない（質物奉公）。村単位で見た出生率や死亡率、結婚年齢や離婚率は、このような先の見通せない多様な人生の束が集まった結果である。東北農村では直系家族

規範があり家は一人の子どもが継承していくのが理想であったが、予定通りに進むことはけっして多くはなかった。

ここで取り上げた3人の女性はそれぞれに「標準ではない」人生を歩んでいるように見えるかもしれない。しかしイレギュラーな方をあえて選んだわけではない。BDSをめぐりながら「19世紀生まれの女性」で、「ある程度長生きできた人」この2点を規準に探していった結果がこの3人である。

## 5. 前近代から見た20世紀生まれの人々のライフコース

前近代は死亡率が高く、飢饉などの影響により生業が不安となるなど、人生には常に大きなリスクがついて回った。直系家族であるとか、「家」社会であるという、3世代で同居し、長男が家を継ぐ固定的な暮らしを想起しがちであるが、あととりがいなくて養子や養女を迎えていたり、離婚が頻繁に起きていたり、子どもも高齢者も引っ越しがあったりと、家を維持するために人々は様々な生き方を強いられた。逆にいえば、流動性が高く、先の読めない人生だったとも考えられる。それに対して20世紀前半になると、平時の死亡リスクが減少している。もちろん20世紀にもスペイン風邪や戦争など、近世とは異次元のリスクがあり単純に比べることはできないが、19世紀初頭生まれの人びとのライフコースに思いを馳せることで、20世紀前半の特徴を多面的に見ることができるのではないだろうか。その先に、死亡率・出生率が劇的に低下し、寿命が延びた1950年代生まれの人々の人生が、1980年代生まれの人々の人生がある。

いかえると20世紀に入り人生の不安定さが低下することで、直系家族なら長男が家を継承し、3世代で同居するというような規範的ライフコースは実現可能になっていった。私たちは実現が難しい時代には規範的な人生を「そうであれば」と理想的に考えられるが、それが容易になったときには新たな理想像を求めるのではないだろうか。

本章では、19世紀初頭生まれから20世紀末の1980年代生まれまでの200年間におよぶライフコースの推移を十分展開することはできなかったが、本研究プロジェクト全体として、前近代のライフコースを思い浮かべながら20世紀のライフコースを考えることで少しでも「20世紀生まれのライフコース」の理解が深まることを期待する。

謝辞：本章では、筆者も参加した文部相科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」（代表：速水融）が作成したBDS、データベースを使用した。データベースの作成を一貫して指導されました故速水融先生、資料の利用を許可くださいました故遠藤精吾氏、BDSを作成されました成松佐恵子先生、データベースの作成作業を担当されました宇野澤正子氏をはじめとする慶應義塾大学古文書室の皆様、データベースプログラムを作成されました北海道大学の小野芳彦先生に、この場を借りてお礼を申し上げます。

---

## 注

- 1) 歴史人口学については、速水（2001、2012）参照。
- 2) データの収集状況やデータベースの構造、利用については平井（2015）を参照。歴史

---

人口学の成果については、日本人口学会編（2022）を参照。

3) 仁井田村には1720年から1870年までの人別改帳がほぼ残存しており（5年のみ不在）、2000人以上のライフコースを再現できる。資料の詳細、ライフコースや世帯・人口学的分析については平井（2008）参照。

4) 「家」社会の特徴などについては（平井 2008）参照。

## 文献

落合恵美子，2015，「徳川日本の家族と地域性研究の新展開」同編『徳川日本の家族と地域性』ミネルヴァ書房。

河野稠果，2007，『人口学への招待：少子・高齢化はどこまで解明されたか』中央公論新社

高橋美由紀，2005，『在郷町の歴史人口学：近世における地域と地方都市の発展』ミネルヴァ書房。

日本人口学会編，2022，『歴史人口学の課題と展望』日本人口学会。

<http://www.paoj.org/hiroba/historicaldemography/index.html>

速水 融，2001，『歴史人口学で見た日本』文藝春秋。

速水 融，2012，『歴史人口学の世界』岩波書店。

平井晶子，2008，『日本の家族とライフコース：「家」生成の歴史社会学』ミネルヴァ書房。

平井晶子，2015，「歴史人口学の資料とデータベース」落合恵美子編『徳川日本の家族と地域性』ミネルヴァ書房。

平井晶子，2021，「三〇〇年からみる家族人口論序説」『社会学雑誌』38，6-19。



資料 『ライフコースと世代』の再編に関する比較家族史的研究  
インタビュー調査内容

\*以下は、本プロジェクトで実施したインタビューの基本内容である。この基本内容を共有したうえで、各地域の実情にあわせて調査を実施した。

(1) 家族の現在の状況

① 本人と配偶者

年齢 職業／地位 出生地 育った所（中学校卒業時） 居住地 最終学歴  
健康状態 その他  
結婚しているか 結婚した年 法律婚か 何度目の結婚か 初めて結婚したのはいつか  
どのようにして出会ったか  
（結婚していない人に）結婚状態（ずっと独身 離別 死別）そのいきさつ

② 子ども

子ども数  
子ども 年齢 性別 結婚状態 生死  
職業／地位 出生地 育った所 居住地 学歴 その他（習い事の有無・理由等）

③ 同居している人

関係 年齢 職業／地位 出生地 育った所 居住地 その他

④ 親、きょうだいとの関係（本人）

関係 年齢 職業／地位 居住地 婚姻状態 親健康状態 その他  
両親の居住地、同居している人  
両親の最長職 仕事を中断した時期

⑤ 親・きょうだいとの関係（配偶者）

関係 年齢 職業／地位 居住地 婚姻状態 親健康状態 その他  
連れ合いの両親の居住地 同居している人

(2) 出生

- ① あなたのお母さんがあなたを出産したのは、どこでしたか？
- ② 生まれたとき、あなたを取り上げた人は、どなたでしたか？
- ③ あなたがお生まれになったとき、一緒に住んでいたのはどなたでしたか？

(3) 自分が育ったときの世話

- ① あなたが学校にあがる前の時期、あなたの世話を一番してくれた人は誰でしたか。
- ② その他にあなたの世話をしてくれた方はいらっしゃいますか。
- ③ 幼いとき、親から離れて暮らしたことがありますか。いくつの時（何歳から何歳まで）で、理由は何でしょうか。
- ④ 養子や里子になったことはありますか。いくつの時（何歳から何歳まで）で、どなたのところに養子（里子）に行きましたか。

(4) 離家経験

- ① はじめて親もとを離れたのは、いつですか。そのとき、おいくつでしたか。

②家を離れた理由は、なんでしたか。

(5) 仕事

①これまで、どのように仕事をされてきましたか。(初職から順番に聞く。継続就労か中断があるか、中断があればその理由)

- ・仕事について
- ・時期と年齢
- ・仕事の内容
- ・職場のあった地域

②あなたにとって仕事をするこの意味は、何でしょうか。

(6) 出産・子育て

①あなたのお子さんに関して伺います。

②子どもさんを出産したのは、どこでしたか。生まれたときに取り上げた人はどなたでしたか。(子どもが多い場合、最初の子どもと最後の子どもについて)

③子どもが小学校に入学する前に、一番世話をしたのは誰でしたか。

④その人以外に、子どもたちの世話をした人はいますか。

⑤どうしてそのような世話の形になったのでしょうか。

⑥子どもが幼いとき(小学校に入学する前)、あなたと離れて暮らしたことがありますか。理由を教えてください。

⑦養子、里子を育てたことはありますか。いつ、その子どもさんが何歳から何歳のときまで、育てましたか。

\*お話して下さるようなら、いきさつもきく。

⑧子どものいない人にもきく

50年代 (もっと) 子どもがほしかったですか。

何人ほしかったですか。

どうしてそう思うのですか。

80年代 (もっと) 子どもがほしいですか。

何人ほしいですか。

どうしてそう思うのですか。

⑨生殖技術(人工授精、体外受精等)についてどう思いますか。

(可能ならば)利用を考えたことはありますか。

⑩小学校にあがる前の、自分の子ども以外の子育てにかかわったことはありますか。

いつ、どのようにかかわりましたか。

⑪子どもを育てる(子育てにかかわる)ことは、あなたにとってどのような経験でしたか。

\*子育て経験の、本人にとっての意味に関する質問である。

ワーディングは、その地域で伝わるようにする。

⑫お孫さんはおられますか。お孫さんの世話をされていますか。どのような形で世話をされていますか。

毎日、また必要に応じた世話について、どうですか。

⑬お孫さんの子育てを、世話以外に(経済的、精神的など)援助していることがありますか。

どのようなことですか。

⑭お孫さんの世話や、お孫さんの子育てへの援助をする(しない)ことについて、どのように感じておられますか。

※共働き 孫の場合

○子どもが共働きの場合、子（孫）育ての支援をしますか。

- ・小学校入学前の子どもがいる場合
- ・小学生の子どもがいる場合
- ・中学生や高校生の子どもの場合

⑮子育てについて、これからどのような公的支援がより必要だと思われますか？

(7) 介護について

①あなたはこれまで、どなたかを介護したことはありますか。

②どなたをどのように介護してこられましたか。

期間 場所 誰かと一緒に介護したか など

③介護をすることは、あなたにとってどのような経験でしたか。

④まだ介護をしていない人に

あなたの親、あなたの配偶者の親の介護について、どのように考えておられますか。

どうしてそのように考えるのでしょうか。

親以外の人で、介護について考える人はいますか？ どなたですか？

どうしてそのように考えるのでしょうか。

⑤これまであなた自身が介護を受けたことはありますか。その時、どなたの介護を受けましたか。

将来、あなた自身に介護が必要になったら、どなたに、どのようにしてもらいたいですか。それはどうしてですか。

(8) 人の生き方や家族に関する考え方について

\*人の生き方や家族に関する次の考え方について、あなたはどう思われますか。

※ 賛成 反対 を答えてもらう。

\*時間があり、お話されたそうならば理由もきく。

※ より詳しく聞きたい項目について、各地域の判断で質問を追加しながら進める。

・子どもの頃と（例えば10代の頃）と現在とでは、考えが変わりましたか。

（昔と今では、考えが変わりましたか?）

そのきっかけは何かありましたか。

・あなたの子どもが〇〇〇を選択する場合、どう思いますか。

\*子どもがいない場合は、身近な他者を回答の対象にする。

・子どもの年齢 何歳くらいの子どもについてどう思いますか。

<性別分業>

①夫の収入が十分であれば、子どもが小さいうちは、妻は仕事をもたない方がよい。

\*子どもが何歳くらいまで、そう思いますか

②夫も、家事・育児を平等に分担すべきである。

③妻も、生活費を平等に分担すべきだ。

④親の就労のために、幼い子どもを保育施設に入れるのはかわいそうだ。

\*1歳ではどうですか 2歳ではどうですか 3歳ではどうですか

⑤職業は自己実現の重要な手段である。

⑥仕事をしないと社会との接点がなくなる。

<家族と愛情>

⑦家事をするのは家族に愛情があるからだ。

<世代間関係>

- ⑧祖父母は孫の教育に関わるべきではない。
- ⑨親は自分の老後のために、元気なうちにできるだけ子どもに援助をするべきだ。

<親扶養・介護>

- ⑩老後の経済的な負担は親自身で担うべきだ。
- ⑪高齢の親を扶養するのは国の責任だ。
- ⑫親に介護が必要になったら、子ども（パートナーを含む）が世話をすべきだ。

<ライフスタイル多様性>

- ⑬事実婚（非法律婚）という生き方もよい。
  - ⑭一生独身でもよい。
  - ⑮結婚しないで子どもを産んでもよい。
  - ⑯同性同士の結婚を認めてもよい。
  - ⑰夫婦別姓を選べるように法律で認めるとよい。（日本）
- ※各地域で家族をめぐる制度変更の重要トピックがあればきく。

- ⑱早期教育について、どう思いますか。
- ⑲子ども家族が早期教育を選択する場合、どう思いますか。

その際、子ども家族を支援しますか。  
支援する場合、どのように支援しますか。

※各地域で「子どもの教育のために努力をおしまない」の象徴的な事象があれば、きく。

(8) 法事・お墓について

\*地域による違いがある項目である。その地域で該当する項目については、「文化的翻訳」をする。ここにある以外に継承、相続、祭祀に関する重要事項があれば、独自の質問できく。

- ①あなた、もしくはあなたの配偶者は、家の「あととり」（後継者）ですか。
- ②次のものをあなた、もしくは配偶者は相続(受け継いだ)しましたか。  
家 土地 墓 仏壇（日本） 財産 その他に相続（受け継いだ）したもの

※それぞれについて 本人、配偶者が相続していない場合

家 墓 仏壇 どなたが受け継がれましたか。  
(誰も受け継いでいない場合) 将来、どうなりそうでしょうか。  
土地 財産 ごきょうだいとの間で、相続はどのようにされましたか。  
(誰も受け継いでいない場合) 将来、どうなりそうでしょうか。

- ③現在、お宅が主催する法事がありますか。
  - ある場合：どなたの法事ですか。  
いつ、どこで行いますか。  
法事には誰が参加しているのか。  
何回忌まで法事をしますか。
  - ない場合：  
先祖のお祭りは、誰がどのように行っているか。  
どのように参加しているのか。
- ④今後、ご先祖のお祭りはどうする予定ですか。
  - 現在家で法事など、先祖のお祭りを行っている場合：子どもに引き継ぐのか、引き継がないのか。
  - 現在家で法事など、先祖のお祭りを行っていない場合：例えば、本人の法事はどうか
- ⑤将来、次の世代に人たちにお祭りしてほしいですか。誰にしてほしいですか。それは何故ですか。

⑥現在、先祖のお墓は誰が主に管理していますか。

お墓参りはしますか。どこの、誰のお墓にお参りしますか。

⑦将来、子どもに「家」（法事、祖先の墓等を含む）を継いでもらいたいと思いますか。

⑧将来の子どもの居住地について、どう思いますか。

※同居したい 近くに住んでほしい どこに住んでもよい（国内外）など

(9) 人生の出来事

①これまでの人生のなかで、あなたにとって重要な出会いは、どなたとの出会いですか。

なぜそのように思われるのでしょうか。

②これまでの人生で、一番大変だった出来事はどのような出来事でしたか。

何歳のときに起こりましたか。

どのような出来事でしたか。→内容をもう少し詳しく教えてください

③あなたの人生に大きな影響を与えた社会的・歴史的出来事がありますか。何歳の時におこったどのような出来事でしたか。→内容をもう少し詳しく教えてください

④新型コロナウイルス感染症拡大は、あなたの人生に影響を与えましたか。どのような影響でしょうか。



研究成果報告書  
2020～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））

**「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史的研究【PDF版】**

発行日 2024年4月1日

研究代表者 山根 真理

発行 愛知教育大学教育学部家政教育講座 山根研究室  
〒448-8542  
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1  
0566-26-2479（研究室直通）

印刷所 株式会社 コームラ  
〒501-2517  
岐阜市三輪ぷりんとぴあ3